
ゼロの世界で

凜湜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの世界で

【Nコード】

N68160

【作者名】

凜涅

【あらすじ】

この小説はゼロの使い魔の二次創作です。
主人公サイドアンチです。

そしてこの話には幼児虐待、性的虐待、強姦、暴行などが含まれます。

苦手な方は決して見ないでください。気分を害されても作者は責任を負いかねます。

また、ボーイズラブととられるような表現も出てきます。

苦手な方は今すぐ閲覧をおやめください。

では、以上のこと全てに目を通した方は、どうぞ。

始まりの前

ここは、どこだ・・・？

暗くて、暖かくて、そしてどこかとても懐かしい。

不安などみじんも感じず、ただ満たされている。

ずっとここにいたい。ずっとずっと、このままで・・・。

む？何か息苦し…ってか四方からギュウギュウ押しつぶされっ
な、ちよっ、助け、アッー

オンギヤー オンギヤー

「産まれたか！」

「あなた…」

「よく頑張ったな、ロザリー。可愛い女の子だぞ」

「あなた、お名前は？」

「名前は…」

.....。

なんぞこれ？

プロローグ

やあ、はじめまして。

私の名前はセレナ。前世の記憶のある元日本人な一般人さ。

え？前世の記憶があるだけで十分一般人から外れてるって？

言われなくても分かってるさ、そんな事は。ほっといてくれ。

さて、もうお分かりとは思っけど、どうやら私は今はやりの転生ってやつを実体験中みたいだ。

それにしちゃ随分落ち着いてるって？

そりゃ最初の頃は夢かと思い、一向に目が覚めないの、いつの間にか昏睡状態にでもなって妄想の中に入り込んだのかと疑い、自分が狂ったのかと疑惑を持ち。

夢でも妄想でも幻覚でもないと分かったところで、一度は現実を否定した。

でもまあ、現実はそのに有る限り見ないふり、気付かないふりも限界があるもので。

一度そこを突破してしまつたら、後は開き直つて受け入れるか、全てを拒絶し心を閉ざして引きこもり、壊れるか。

まあ、私は開き直つた訳だけど。

私が壊れないでいられたのは、きっと奇妙な赤ん坊だった私を、それでも慈しんで育ててくれたこの世界の両親のおかげだ。

きっとあの二人がいなければ、私は全てに心を閉ざしていただろう。

本当に、この世界で彼らの元に生まれて来れた事に感謝したい。

ああ、赤ん坊の時の様子は聞かないでくれ。心が折れる。ただ、固形物が食べられると言う事がどれだけ素晴らしいことか知った。こちらには歯医者なんてモノは無いだろうから、歯には気をつけたいものである。

『この世界』 『こちら』

勘のいい人ならもうお分かりだろう、ここは、私の生まれたこの世界は、前世の、現代日本とはまるで違う。というか、世界が違う。

いや、回りに注意を払えるだけの余裕を取りかえしてからは、私だって何か変だとは思ってはいたんだ。

電化製品はまるで無いし、台所には薪が積んであるし。なんとびつくり明かりはランプだし。

極め付けに聞こえて来たのが。

ここは『トリステイン』の『ラ・ウ”アリエール』領らしいよ。貴族は『メイジ』って言って魔法が使えるんだと。ちなみに隣り村に有る教会は『ブリミル』教。そして窓の外には月二つ。

どう考えてもゼロの使い魔です本当にry

トラックに轢かれてもいないのに、本気で異世界転生してしまったのだと気付き、打ちひしがれた2歳の夏。

でもまあ、なってしまったものはしょうがない。この世界にいる以上、この世界と向き合わなくては、と気を取り直したところで、直ぐさま挫折したよ。

何せこの魔法全盛の世界で、私は平民。両親に貴族の血が流れてる、

なんてことも一切無い由緒正しい庶民の血筋。精霊も見れなけりや、不思議な力を持つてる訳でもない。家も金持ちでもない。正にナイナイ尽し。

じゃ、一発原作知識を使うか、と思い情報を集めると、言っても母達のお喋りを聞いてただけだけど、聞こえて来たのは『烈風カリ』の噂ばかり。バリバリの現役、もうすでに隊長らしいよ。

つまり原作開始のだいぶ前にして、『烈風の姫騎士』は終わってるわけで。

介入のしょうが無いじゃないかorz

農業改革しようにも、アレは広大な土地を一気にやるからこそ効果があるわけだし、商売をするにしろ、事業を起こすにせよ、元手が無いから何もできない。

両親が伝説のメイジ殺したとか、そんな設定も一切なし。

うわぁ、てかもうコレ詰んでるよね。

そう涙ながらに悟った3歳の冬。

あ、一つ有ったや。父は元々ソコソコ名の売れた水メイジの家に仕

えていて、そこで主人の世話を焼いている内に、一通りの薬草の使い方や、簡単な薬の作り方は覚えてしまったらしい。とは言っても秘薬とかはメイジしか作れないんだけど。父は専ら、農作業の合間に薬草を取って来ては、秘薬屋に売ったりして家計の足しにしている。

因みに母はその水メイジの屋敷で働いている時の同僚、つまりメイドで、主人が死んで暇を出された時に、思い切ってプロポーズ、見事両思い、って事で生まれ故郷の村に2人して帰って来たんだと。今でも鬱陶しいくらいに仲が良い。私の弟か妹が産まれる日も近いだろう。

閑話休題。

私は前世では体が弱く、薬草やら漢方やら、そういったものに随分お世話になったものだ。そこからその分野に興味を持ち、興味が高じて気付けば仕事にしていた。

だから、当然父の扱う薬草にも興味津々。父も当然自分の仕事（本業は農業だけど）に娘が興味を示せば嬉しいし、現実的な問題として生活は厳しく、少しでも人手が欲しいので私にも知識を伝えて手伝いをさせる。

父と母が畑を耕している間、それを見ながら小さな薬草園の世話を

して、時々父に連れられて母とともに薬草採取の為に山に入り、夜は繕い物をする母の横で父と2人仕分けをしつつ薬草や文字の勉強。頭の中では前世の知識と今生で手に入れた知識をすり合わせる。

こんなゆったりして優しい生活が続けば良いと、そう願った4歳の秋。

「セレナちゃん、ちょっと手伝ってちょうだい」

「はい」

母の元に駆け出す私・セレナ。ただいま5歳児である。

こんな生活が、続けば良いと。

世界は、どこまでも残酷なのだと知る、それは少しだけ前の話。

その1

「セレナ、この薬草の効果を言つてご覧」

「葉は解熱。ただし過ぎれば毒となる。根っこは煎じれば鎮静剤となる」

「じゃ、こっちの葉っぱは？」

「メイジが良く使う初步的な秘薬の原料となる」

「こっちの枝は？」

「細かく刻んで煮出せば二日酔いに利く」

「すごいぞ、セレナ、みんな正解だ」

ぐしゃぐしゃと、大きな手が髪をかき乱す。

「何するんだよ、父さん。髪がぐしゃぐしゃじゃないか。やめてくれって言ったよね、それ」

私の髪はただでさえ細い巻き毛で絡まりやすいのに、こんなにされたら……………

「あらあら、セレナちゃん、髪の毛がすっかり鳥の巣よ。お出でなさい、解いてあげるわ」

母さんがブラシ片手に手を招く。

「全く、父さんのせいじゃないか。だからやめてくれて言ってるのに」

髪を解かれながら、父さんを睨んでやった。

「悪い、悪い。いや、セレナがとっても頭が良いからついな、嬉しくてな。文字もあつという間に覚えだし、薬草ももう父さんに教えられる事は無いだろう。セレナは本当に賢いな」

ズルイな。

ニコニコと、そんな事言われたら怒りようがないじゃないか。

「本当に、セレナちゃんはパパと仲良しね。ママちよつと寂しいわ」

口を尖らせそんな事言われても困るのだがな、母よ。

と言つか、おいおい、娘に嫉妬してどうするんだ？

「うふふ、冗談よ。それにママだってセレナちゃんは凄いつて知ってるのよ？頭が良いのも勿論だけど、お手伝いは言われる前にしてくれるし、ママが疲れた時はご飯の用意までしてくれるし、我儘一つ言わないし。セレナちゃんはとっても優しい良い子だわ」

いや、そんな事を真顔で言われるとこそばゆいと言うか。

手伝いばかりしてるのは他にやる事が無いからだし（前世（25）
+今生（5）で精神年齢30歳、この年になって子供と遊ぼうなぞ
思えるものか）、我儘は、言ったところでどうにもならないから（
ネットがやりたいだのエアコンが欲しいだの言ったところで……）
言わないのだ。

それに両親には感謝しているのだし。

「さ、セレナちゃん、出来たわよ」

母がまだ町に居る時に買ったのだと言う手鏡には、栗色の巻き毛に
淡く明るい茶色の瞳、小生意気そうな表情をした小娘が写っている。
顔立ちは……まあ、十人並みと言ったところか。

おかしな所は無いな。

母さんの膝から滑り降り、薬草を手取る。

「また実験か？」

そう。今私は前世の薬草学はこの世界で通用するのか、つまりは、
あの世界の調合法に従い調薬した場合、私の意図する薬が出来るの
か、を調べているのだ。とは言うものの、まずはあちらの薬草に対
応するものをこちらの薬草（のみならず植物全般）の中から調べね

ばならないからなかなか大変なのだが。だが、努力の甲斐あつて、大分どの薬草がどういった効能を持ち、どれと対応しているのか、分かつて来た。調剤法も大きな変わりはないようだ。これなら、こちらの世界の薬学事情を改善出来るかも知れないな。

さて、今日はどれを使うか。

その2

この世界に転生したての頃はともかく、今となっては私の人生目標は決まっている。

のんびり農業をしつつ、薬学の研究を進める。これしかない。

原作？知った事では無いわ。勝手にしてくれ。

まあ、時折ダンゲールのことが頭をよぎったりはするが、あれは私がどうこう出来るような問題では無い。

もしコルベールに真実を教えたとして、どうにかなる物でなし。彼の変わりはいくらでもいる。それに両親のことを考えると、私は下手に動くべきでは無い。何せハルゲギニア最大の宗教が関わっているのだ。私のような力ない平民など、存在したと言う事実をも簡単に消される事だろう。

まあ、まだまだ時間はある事だし、出来そうな手は打つが。これは私が日本人としての気質を強く持っているからかもしれないが、正直、宗教とは関わりあいになりたくない。

まあ、6000年も前の人間称えてるだけでやりたい放題の旨い職業ではあると思うが。

ああ、これは貴族にも言える事か。始祖の血筋やら力やらを免罪符にしたい放題。

ハッキリ言つて、貴族や神官の恩恵と害、どちらが多いかと言われれば、私は間違いなく害悪だと答える。

それほどまでに奴等の増長は目に余る。いない方がマシだ。

いつその事宗教革命でも起こしてやろうか……………。

「セレナちゃん？どうしたの？難しい顔をして」

……………。うつかり思考が危険な方向に流れていた。しっかりしろよ、私。面倒事には関わらないって決めたばかりだろうが。

宗教改革とかどう見ても面倒＋死亡フラグ満載だろうが。アホな事を考えるな、私よ。

「何でもないよ、母さん」

私はのんびりと薬草に囲まれて過ごすんだ。
そして目指せ新薬開発。

メイジの手を介さなくても効果の高い薬を作れば、金額は大分押さえられる。平民でも手の届くくらいにまで。そうすれば、死に行く者も減り、生活も少しは楽になるだろう。その為にも、私に余計な事をしている暇は無いのだ。

この道はこの道で大変だろうけどな。既得権益が奪われるだろう水メイジ達の反応を考えると……………。やる気が。やるけど。

まあ、ともかく、今は目の前にあるこの強敵を片付けなくては。

はしばみ草、苦手なんだよ。

薬草なら、薬としてならどんな苦いのも平気なんだが。普通の食事で苦いのが出ると……。ましてやこのはしばみ草、苦さが半端で無いし。

タバサを尊敬するよ、いつそ。

あー、もー。

だれだこんな草食用にした奴は。ブリミルか？すべては奴のせいなのか？

その3

断言しよう。

私は幸福だったと。

予期せぬ、そして望みもしない転生を迎えて、この世界に生まれ落ちて6年と少々。

私は確かに、幸せであつたのだ。

その日までは、確かに。

何の、変わりもない日だった。変哲もない1日になる筈だった。

収穫期の農村は忙しい。

「セレナちゃん、こっちお願い出来る？」

「わかった」

「悪い、セレナ、こっちもだ」

「了解」

両親に呼ばれてあつちを手伝い、こちらに運んで。

一日が終わる頃には、研究すら億劫になるほどに疲れ果てている。

「あらあら、セレナちゃん、床に転がっちゃって……。今日は大変だったものねえ」

ひょい、と体が浮く。

「うー」

もう声も出す気力もないんだ。

「あらあら」

クスクスと、柔らかな笑い声が後頭部に落ちる。

ええい、私は疲れているのだ。

母さんのおもちやになる元気なぞないぞー。

「明日は収穫祭のお祭りだし、今日はもうねんねしましょーうね」

「うー」

とりあえず私は眠い。父さん（外で農具の手入れ中）には悪いが、もう寝るぞ。

ん？あれは……………馬、の蹄の音か？

私をだいている母さんの手に力が籠った。

「母さん？」

なぜそんな強張った顔を？

「母さん、どうし……………」

寝室の中にほうつり込まれる。

「母さん！？」

っ！？ドアが開かない！？

「母さん、母さん、開けて、」

ええい、ドアを殴ってもびくともしない。

「母さ……」

乱暴に扉の開く音。

「へえ。なかなか美人じゃないか」

「あいつらの言っていた通りだな」

下卑びた笑い声。

「何をするんですかつつ?!」

「放してください!!」

両親の、叫び声。

「ファイアー・ボール」

何か、重い物が叩き付けられる音がして。

「つつ、あなた、あなた、オーギュストっ！」

母さん、の、ひめい、が。

ドアがダメなら、窓からだ。

そうして。

転げるように、家に飛び込んで。

そこに、在ったのは。

体の一部が炭化するほどに焼かれた父と、男に囲まれ、犯されていく、母。

「あ、ああああああアアアアあ!？」

わたしは　そのときたしかに　しあわせが　くずれさるおと
を　ききました

体が宙を舞う。

男達に殴りかかり、反対に殴られたのだと気付いたのは、体が地面に叩き付けられてから。

「っ、セレナちゃん、にげ、逃げなさいっ」

こんな時まで、貴女は私を心配するのか、母さん。

でも、確かに今は。

ここで私一人が向かって行っても返り討ちにされるだけだ。助けを呼ばなくては。

待っててくれ、母さん、父さん。すぐに誰かを呼んで来るから。

隣りの家のドアを叩く。

「すみません、開けてください！！」

ちっ、留守か！？

次っ。

「すみません、誰か！！」

おかしい、おかしいおかしい。

どうして誰も出て来てくれない!？

「誰かつつ」

何件目かの家に無理やり押し入る。

居た。

「あ、あの、おねがいします、助けて……………」

「出て行ってくれ!!」

目の前でドアが閉ざされる。

厄介事でも見るような忌々しい目に、固く閉ざされた家々の扉に、私はようやく理解した。

私達は、生け贄にされたのだと。

村で一番美しい母を、長いこと町で暮らしていて馴染みの薄い父を、薬草の知識のおかげで少しでも暮らしに余裕のある私達を売って、自分達の安全を得たのだと。

唯それだけで。私達の日常は壊れたのだと。

そう、理解した。

だけど、そんな事を受け入れてたまるか！！

確か明日の収穫祭の為にプリミル教の神官が村長の家に来ていた筈だ。

諦めて堪えるものか。

「なんだお前は」

「無礼な」

「つまみ出せ」

「神官様、おねがいします、助けてください、神官様」

必死に手を伸ばして最後の希望に縋る。

だけど。

「ぐつつ」

魔法、か、これは。

風の塊に、叩き出されて。

「無礼な平民だ」

その冷たい蔑みに満ちた目を、忘れる事は生涯ありませんでした。

は、あ。頭が、くらくらする。立て続けのダメージで、体が言うことを聞かない。立ち、上がれない。

くそ。こんなところで、もたもたして居られない。帰らなくては家に、帰らなくては。帰って、今度は私が父さんと母さんを助けるんだ。

地に這ったまま、身体を必死に動かす。

もう誰にも頼らない。私が助ける。だから早く早く帰るんだ。

「く、そ」

誰か、誰か助けてください。

「父さん……母さん………」

祈りは叶わず、願いはとどかない。

家、に、

でも。

総ては遅すぎた。

家に帰り着いた時には、総ては終わっていて。

虫の息の父と、ぼろぼろの母だけが遺されて。

私に出来る事など無かった。最早薬でどうこうなる傷では無く、ここには水メイジも、現代日本の医療設備もなかった。

私に出来たのは、唯2人を看取る事だけ。

最初、その日の内に父さんが逝った。最後まで、私と母に愛していると、守れなくてすまないと言いながら。

その三日後には母さんが。母さんも同じように、私に愛していると
言って死んで逝った。一人にしてすまないと詫びながら。

2人とも、最期の最期、今わの際まで、私を案じながら死んで逝った。

ねえ、私は貴方達が私に注いでくれたその愛を、少しでも返せただろうか。貴方達に相応しい子供だっただろうか。

喪って始めて、こんなにも愛されていたのだと知った私は愚かでしょうか。

それでも、これほどに貴方達が恋しい。

愛しています。

この世界に生まれ落ちた私に、限り無い愛情を注いでくれた貴方達を。

愛しています。

双月の浮かぶ夜空に怯える私を抱き締めてくれた貴方達を。

愛しています。

この記憶も命も、総ては偽りなのではないかと恐れる私を支えてくれた貴方達を。

愛しています。愛しています。

心から、愛していました

その4

一人で両親の埋葬を終えた私は、次に向かって動き出した。

ああ、勿論犯人達の事だ。

報いをね、受けさせたかったんだよ。きちんと裁かれて、犯した罪に相応しい処罰を下して欲しかった。

いくら私でも、最初からこの手で敵を討ってやろうとか、殺してやろうとか、そんな事を思ったわけじゃない。なんだ、その顔は。

当たり前だろう。私の精神のベースは現代日本人だぞ。どんなに憎かったところで、そんなに一足飛びに突き抜けるものか。

然るべき場所に訴え出て、処断を下してもらう。それが、そのときの私の指針だった。

その然るべき場所がラ・ウ”アリエール公爵だったのは、当時の私としてはそれ以外に選択肢が無かったのだ。

とにかく、一番偉い人に言えば何とかなるだろうとな。

つまりは、私が平和ボケしていたと言うだけだ。

未だこの世界の事を、何一つ知らなかったのだと、唯それだけの話。

その5

両親の埋葬を終えて、私は今ヴァリエール公爵の屋敷のある町に向かっている。

幸い、父さんに何度か連れて行って貰ったこともあったから、道に迷う心配は無い。

確か村からは半日程だったか。

荷物は母さんと父さんが遺してくれた40エキューの内、20エキューを懐に入れていただけ。残りの金は、万が一盗賊やスリなどにあつ事を考えて、2人の遺髪と、母さんの形見の指輪と共に服に縫い込んである。

理由は勿論、私の両親を殺したメイジ、マントを着けていたから恐らくは貴族だろう、を訴える為だ。村の人達もダメ、ブリミル教も当てにならないとなればもう、貴族、それも奴等よりも上位の存在に訴えるしかない。

ヴァリエール公爵ならばその点申し分ないだろう。確か国一番の貴族だった筈だ。

数年前に代替りしたとも聞いたし。新公爵夫人の名前はカリィヌと言うらしいし。

悲しみに浸るのは、犯人が裁かれてからでも遅くは無いだろう。

その一念で、痛む身体に鞭を打ち、必死に町を目指した。

ああ、くそ、身体中、どこも言う事を聞かない。

結局、丸一日かけて町の前にたどり着いた。思った以上に身体がボロボロになっていたか。

だけど、そんな事はどうでもいい。一刻でも早く、公爵に会って、奴等に罰を……。

だが。

「あの、公爵様に会わせてくださ……」

「ええい、ここはお前のような薄汚い子供が来て良い場所では無い……」

「そんな……！少しで良いんです、おねがいします！」

「しつこい……！」

普通こんないたいけな子供に杖抜くか！？門番め。

くそ。門前払いか。想定内とは言え、やはり腹立たしい。

まあ、良い。終わった事をいつまでも言っても仕方無し。

こうなった以上は、屋敷から出て来たところを狙つての直訴しかないだろう。町での噂話を聞くだに、公爵は屋敷にいるようだし。屋敷の周りを張っていればその内機会も巡つて来るだろうし。

問題は会うまでの滞在場所か。まさか子供一人で宿には泊れない。

仕方が無い、野宿しかないか。

私が両親を殺した犯人を捕まえるのにヴァリエール公爵を頼ろうと思つたのは幾つか理由がある。まず第一に、私の住む場所の領主だと言う事。第二に、前にも言つたが、確実に犯人達よりも格上の貴族である事。そして第三に、『ゼロの使い魔』シリーズのヒロインであるルイズの親で、いわゆる『まとも』な貴族であるように描写されていたからだ。まあ確かに才人にはだいがキツく当たっていたが、あれは平民云々以上に可愛い娘につく害虫つて事が大きかったし、大丈夫だろう。

少なくとも、自分の領民が殺されたのだ。話くらいは聞いて貰えるだろう、と。そう思っていたのだが。

三日ほど街中に滞在している内に、私の思いは揺らいで行つた。

表面は綺麗な町だが、一步裏に入れば、その様相は一変する。

薄汚い路地に痩せこけた貧民や浮浪者、ゴロツキに孤児と思しきみすばらしい子供達。自領、それもお膝元の町がこんな状態の公爵が、果たして私の訴えに耳を貸してくれるのか。

だが、私にはもうこれしか取れる道は無い。

ここまで来て、引く訳にはいかない。

そろそろ日が暮れそうだ。今日はもう帰るか。
私が腰を上げかけた時、轍の音がした。

来たか！？

道の先に、小さく馬車が見える。公爵家の門にあったのと同じ紋章。
間違いない。

ヴァリエール公爵の馬車だ。

もう少し引きつけて……………もう少し、もう……………今だ！

「お待ち下さいっ！」

馬車の前に立ちただかり、大きく両手を広げる。

御者の驚愕した顔。手綱を引き絞られた馬が苦しげな鳴き声を上げ、
馬車は私の鼻先で停まった。

「何奴！此がヴァリエール公爵の御馬車と知つての狼藉か！？」

「無礼は重々承知ながら、ヴァリエール公爵閣下に申し上げたき儀
がございます。どうかお取り次ぎ戴たい」

御者が汚いものを見るような目で私を見下した。

「身の程を弁えろ。公爵様には貴様の様な者に割く様なお時間は無い」

取り付く島も無いその態度に、目に、このままでは望みは叶わない
事を悟った。

ならば。

「なっ！？貴様つつ！？」

強行突破在るのみっ！

御者の腕を掻い潜り、馬車の扉に手を延ばしかけたところで、内側から覗き窓が開いた。

「何をしている、早く出せ」

あのモノクルに髪の色。間違ない。ヴァリエール公爵だ！

「はっ、申し訳ございません」

馬車から引き離そうとする御者に、そうはさせまいと必死に馬車に縋り付く。

「公爵閣下！数日前にこの先の農村でメイジに若い夫婦が殺されました！殺されたのみならず妻の……………」

え……………？

顔から石畳に叩き付けられ、己が公爵の魔法で弾き飛ばされたのだと知る。

「黙れ無礼者。そのような話を聞いている暇は無い、馬車を出せ！」

ただただ、去って行く馬車を呆然と見送るしかなかった。

「あ……」

頭の中、公爵の台詞が何度も何度も巡る。

「……あ……あ……」

そんな事、父さんと母さんの死を、人2人の命を、そんな事だと？

「あは、」

高々下賤の1人や2人、どうなろうと知った事ではないとでも言うのか。

「あはは」

母を凌辱し、父を殺した貴族共が、私達を売った村人達、助けを求める手を振り払った神官。冷たい目でこちらを見るヴァリエール公爵の家臣、そして両親の死をそんな事と言った公爵自身。

「あははははははは」

ブリミルも貴族も、民もこの腐り切った国も、総て呪われる。

「あは、あははははははは」

この身をかけて、貴様らに復讐してやろう。
滅ぼしてやろうよ。

ただ幸せに、その日を待っているが良い。

必ずやこの私が、貴様らの総てを奪い去ってやる。

馬が止まるのを待つのもどこかしく、馬車から転げる様にして飛び降りた。そのままフライで二階まで飛ぶ。

「カリーヌ、エレオノールは?!」

妻が微笑んで抱いていたわが子をみせる。それだけで答えを悟り、ほっと息を吐いた。

出先で幼い娘が階段から落ちたと聞いた時は心臓が止まるかと思っただけ、無事で良かった。本当に良かった。

「余り心配をかけないでくれ、エレオノール」

幼い娘の顔を眺め、無事で在った事を心から喜ぶ。ふと、先程馬車にすがりついてきた小汚ない子供の事を思い出した。先程はエレオノールのことで焦っていたとは言え、魔法で吹き飛ばしてしまった。話も聞いてやらなかったし。何かを熱心に言っていたが、何だったか。屋敷を尋ねて来たら入れてやる様に門番に言っておいてやるか。

きつと、これが始まりだった。

この時が総ての始まりだったのだと、知ったのは後になってから。

その6

私は今、教会に身を寄せている。公爵の攻撃によりできた傷を、母と2人で道を歩いている時に亜人に襲われたと偽り、はぐれた母がここで落ち合う約束をしている叔母が来るまでとめてくれ無いかと頼むと、一晚1エキューで快く止めて下さると言う事だった。金額が足りなかったら即放り出されるらしいが。

庶民が泊るそこそのランクの宿が、飯（温かいスープとパン）付きで2泊1エキュー。ここでは板に申し訳程度の藁と小汚ないシーツ一枚、かちかちのパンが一切れ。
全く、ブリミル教の精神は素晴らしい限りだ。

粗末な寝台に起き上がって、左目の前に手を翳す。

……。やっぱり見えない、か。

あの時　　ウ”アリエール公爵に地面に叩き付けられた時、どうやら打ち所が悪かったらしく、左目は殆ど光を失っていた。

一過性のものかと思っていたが、あれから数日経っても一向に回復の兆しが見えない。　　本当に、駄目かもしれない。

「あーあ」

全く、運が無い。両親を亡くして、更に視力までなんて。どうやらこの世界は、ブリミルは相当に私の事が気に食わない様だ。

もっとも私の方も憎んでいるけど。ある意味おあいこなのか、これ。

……アホな事考えて無いで着替えるか。

『お仕事』もある事だし。

昨日のうちに汲んでおいた水で顔と口を洗い、服を着替える。

よし、と。じゃあ行きますか。

建物の端に在る部屋から出て、中心部へと向かって歩く。途中すれ違う人のうち、女性や数人の男性は蔑みの目で、残りの男性陣は何処か欲を宿した目でこちらを見て来る。

まあ、当然だろうなあ。

一際大きな、そして装飾の施された扉を叩く。

「失礼致します、猥下」

「おお、セレナか。入りなさい」

部屋の中には、豪華な寝台に腰掛ける一人の老人。

促されるままに側により、かさついた手が頬を撫ぜるのに微笑む。

「おはようございます、猥下。今日もご奉仕させていただきますね」

笑顔を浮かべたまま、老人の前に跪いた。

この老人はクザーヌ・ゲルジオ枢機卿。ゲルマニアの首都ウィンド

ボナにいつもは居るらしいが、ロマリアからの帰りにこちらに寄ったらしい。

で、この爺さん子供好き、ってかロリコンで、いつも孤児とかにこういう事させてたらしく。今回旅で溜まってたところに私を見つけて、まあちょうど良いから性欲処理に使おう、てな事に相成ったらしい。万が一何かあっても平民の子供一人の死くらいもみ消せるし、てな事で。

本当に、腐り切ってるよなあ。

私も最初この老人の前に出された時は怖くて気持ち悪くて嫌で嫌で嫌で堪らなかったけど。どう足掻いても逃げ出せなくて。いつそ舌でも噛んで、父さん達のところに逝こうかなあ、なんて思ったりしたけど。

その時気付いたんだ。これは上手く使えばとんでもないチャンスになると。

私は両親を殺した貴族や、助けを無視した村人や神官、訴えを振り払ったウ”アリエール公爵に復讐したい。

でも、それは何一つ力を持たない私には困難な事。

目的のためには力がある。

その力を手にする大きなチャンスが、今目の前に在るんじゃないのか？

この老人、高位の聖職者で在るこの爺さんに取り入る……、せめ

て使い捨ての道具じゃなく、お気に入りの玩具か、愛人くらいになれたら…………。

そうして私は抵抗を止め、ただひたすら従順に、気に入られる様に振る舞った。

前世でも性的な体験なんて殆ど無かったが、情報だけは溢れ返っていた世界の、それも私は日本人のオタクだったのだ。小説もエロゲも漫画もアニメも、人気のものは一通り目を通した。

萌えポイントもしっかり押さえて在る。

その知識を総動員して…………。

あとは私のこの十人並みの顔でどこまで通用するかだったが。

断言しよう。

日本のサブカルは素晴らしいと。

世界共通どころか異世界のエロジジイの心もがっちりだ。

クザー又は毎日私を抱いている。

まあ、演技だけじゃなくて、行為の時に私の特製媚薬オイルを使ってるから、それが気持ち良くて、って事もあるんだらうけど。

催淫効果のある植物をオイルにつけ込んで作成した物だが、クザー又がその事に気付いた様子はまるで無い。

まあ、この世界、特に貴族やブリミル教の神官にとっては薬「メイジ」の作った秘薬であり、平民の手による物など、薬として認識していないのだろう。

おかげで何の警戒心も無く使う事が出来た。
用意できしだい、別の薬や香なども使って行く予定だ。

多少心臓に負担がかかったりするかもしれないけど。でもあんただって私を犯し殺してもかまわないと思ってたんだし、おあいこだよな？

大人だったら取り入ろうとしているのではとか、色々と勘ぐられただろうが、幸いにも私の外見は子供。この男、子供を犯すくせに子供は純粹だと思っているらしく、警戒心はまるで無かった。

確かそろそろここから出発するらしいが、連れて行こうと思われる程度に気に入られる事が出来ただろうか？

考えながら、口に含んだクザーヌのモノを思いっきり吸い上げた。
口の中に苦い味が広がる。正直気持ちが悪くて仕方が無いが、そんなものの微塵も見せずに飲み下してみせる。

一端口から出し、残滓まで綺麗になめとる。

「ん…………ごちそうさまでした」

上目遣い、目は軽く潤ませ、微笑んで首は微かに傾げる。

どうやらこの仕草は気に入ったらしく、満面の笑顔で頭を撫でられた。

「セレナは本当に良い子じゃのう。ああ、そうだ、今日は服を買っ

てあげよう。そろそろゲルマニアに帰らねばなんからの。お前も連れて行ってやるから、旅に必要な物も揃えると良い。」

良いぞ、計画通りだ。

「え……………私も連れて行って頂けるんですか……………？」

ここはあくまで、ちっともそんな事を考えて無かった様にいう。

「ああ、勿論だとも。セレナは良い子じゃからのう。好きな物をいくらでも買いなさい」

はは、良かった。作戦は成功だ。今まで必死に耐えたかいがあった。

父さん、母さん、きっと今の私を見たら、あなた達はとても悲しむのだろうね。

それでも、かたきは必ずとるから。

例え、どんな手を使っても。

身体くらい、いくらでも売って見せる。

待っているがいい、必ず貴様らに復讐してやる。

その7

「ふ、……ああ、猊下、クザー又さまあ」

大袈裟な嬌声をあげ、老人の背中にすがりつく。

「ぐ………は……あ、いいぞ、セレナ………」

ここはウィンドボナの大聖堂。私はただ今ベットの中でお仕事中。

このジジイと出会ってからもう半年程になるか、私は押しも押されぬ確固たる『枢機卿のお気に入り』の座を手に入れている。

綺麗な服、宝飾、高価な砂糖をふんだんに使った菓子。

欲しいと言わなくてもジジイが腐る程よこす。

下位の神官や出入りの商人、貴族達の中には私に挨拶に來たり付け届けをする者までいる。

こんな子供に、馬鹿らしくないのかと思うが、どうやら『私』という人間は思った以上に重要視されている様だ。

ああ、そう言えばジジイがそのうちどっかの貴族の位置つてやるとか言ってた様な気がするな。

私の今の身分はジジイの遠縁の娘で両親が死んだため引き取られた、と言う事になっている。それが偽りである事をだれもが知りながら、彼らは黙って欺瞞を受け入れる。

ジジイがぐっすりと寝入ったのを確かめ、そつと寝台を抜け出した。

やる前に睡眠薬飲ましてるからちよつとの事じゃ起きないと思うが、そこは気分と言う奴だ。

向かうのは続き間の執務室。個人的な手紙、仕事の書類、密偵から送られて来る報告書などに目を通す。

このジジイ、実は意外と大物で、当代教皇とその座を争い、負けてゲルマニアくんだりまで流されたものの、未だに教会組織全体に隠然たる影響力をもつ大派閥の長なのだ。

奴が私に零す愚痴や自慢、噂話。理解できてないと思っているからだろうが、かなり詳しく深いところまで平気で話して来る。おかげで、ハルゲギニア中の情報が、それも本来なら国家や教会の重要機密に至るまでのものが、かなりの精密さと速さで私の耳に入ってくるのだ。

誰某の息子が婚約したらしいといった事から、教会や宮廷内の権力闘争、聖職者や貴族達の汚職や裏事情、どこそこの貴族の子息は奥方の不義の子らしいと言う様なゴシップまで。

たとえどんな些細な話でも、使い様によっては千金にも優る価値が出る。情報は、『知る』と言う事は力なのだ。だから私は貪欲にそれを収集する。

たとえこのジジイが私に飽きたとしても、生きて行けるだけの力をつけなければ。

そう。私の目的のために。

一通り情報に目を通し、頭の中に叩き込んでから寝台へと戻る。

子供の身体なので睡眠を取らなくては翌日辛くて仕方が無い。

まったくもって、子供とは不便なものだ。

窓から差し込む光に起こされ、身を起こした。隣りでジジイが起き出す気配が無い事を確かめ、枕元に置いてあるマジックアイテムに手を触れて、侍女を呼び出す。

音もなく扉が開き、私付きの侍女であるジョアンナが入って来た。

私を見て、柔らかに微笑む。

このジョアンナ、何を間違えたか私に忠誠なんてモノを誓っていた。だが私はそこまでされる様な事は何一つしていない。

ジョアンナの兄が病におかされた時に、少しでも融通を利かせただけ、それも私自身が何かしたわけじゃなく、ただ教会に出入りする秘薬屋に取り次いでやっただけ。

私は元々彼女の事を気に入っていたのだ。

枢機卿の愛人、それも幼女の侍女等にされたら、仕事に対する意欲も無くなるだろう。だが彼女はそんな仕事でも腐る事無く、また私に対する態度も気持ちの良いものだった。だからこそ貸せるものなら手を貸しても良いと思ったのだ。

だからたいした事はやっていないし、半ば気紛れ。忠誠なんて誓われても困ると言う私に、彼女は頑として譲らず、根負けした形となった。

「おはようございます、セレナ様」

「おはよう、ジョアンナ」

ジョアンナにガウンを着せてもらい、ジジイの部屋の隣りにある私自身の私室へと移る。この部屋はジジイが用意した物で、内装は一言で言うならばメルヘン。こう、如何にも女の子が憧れるお姫様の部屋とでも言おうか。色彩は柔らかなパステルカラーで統一され、部屋中にレースやフリルが溢れかえっている。

私がこの部屋で過ごす事は殆ど無いわけだが。理由はいわずもがな。準備されてある水盆で顔を洗い、その間に用意された紅茶を飲みながら、ジョアンナと共に今日のドレスや装飾品を選ぶ。

「ではこちらの水色にレースをあしらった物で、宝飾は真珠の一揃いでよろしいですね？」

ジョアンナが並べたそれらに、おかしい所が無いのを確認してからうなづく。

「うん、それで良い。後は髪型だけど、そうだな、横の方だけ纏めて、後は流してくれる？」

「かしこまりました」

ジョアンナによって身支度が整えられて行くのを鏡越しに見ながら、見せ方を考える。

従順さや現代日本の萌え知識、媚薬入りのオイルや上達したテクニク。私はそういった物を駆使してあのジジイに取り入った。だが私自身の顔自体は並み。

容姿の優れた子供が見つければ、私はこの地位を追われるかもしれない。

だが顔は変えられない。こんな子供が化粧するのは変だし、第一化粧でどんなに化けても元の顔はしっかり見られているので無意味。

ならばと、私は自分の魅せ方を考える事にした。

笑い方、歩き方、姿勢や作法、それこそ指一本に至るまでのちよつとした仕草に表情、雰囲気。ドレスや髪型と会わせて、自分を最も美しく魅せられる方法を追及する。

「いかがでしょうか、セレナ様」

アクセサリーに合わせ真珠で飾られた眼帯をつける。
全身を点検、最後に鏡に向かって微笑んだ。

「問題なし。じゃ、私はクザーヌ様を起こしに行くよ」

「はい、セレナ様」

高価な調度品に、美しい部屋、袖を通し切れないほどのドレス、忠実な侍女。おなかを空かせる事も、労働も無い毎日。

ここには凡そ、人が思い描くだろう『幸せ』が殆ど揃っている。私と立場を交換したいと思う人間は掃いて捨てるほどいるだろう。

それでも。

それでも私はあの生活が恋しい。父と母と、クタクタになるまで働いた日常。

あの残酷な日に奪い去られたすべて。

叶うことなら、半年前に戻りたいよ。

父さん。母さん。

「おはようございます、猊下。起きて下さいませ」

私は今現在の日常に向かって微笑んだ

その8

ジジイを起こして一緒に食事を取り、ジジイが仕事に向かった後は好きに過ごす。そして帰って来たジジイを出迎え、夕食を共に取り、ベットに入る。

これが凡その私の一日のスケジュールだ。

空いた時間は読書や、得た情報の整理、ゼロの使い魔への考察などをしているが、いい加減厭きた。退屈で死にそうだ。誰か私にネット寄せ。

いい加減に部屋の中に籠るのも限界だ。街にでも出るかな。

ジョアンナを呼ぶ為にマジックアイテムに手を伸ばそうとして、止めた。どうせなら迎えに行ってみよう。

ええと、使用人の控室はこちらだったような。

歩き出すが、廊下の反対側から2人分の足音がする。

顔を上げると、二人が角から出て来たタイミングは同じ。

並んで歩いて来た二人だが、しかし私に対する反応は正反対だった。1人は嫌な物を見たと言わんばかりに苦々しい表情を、1人は笑みを浮かべる。

確か苦い表情の奴がニコル・アクティナス、笑っているのがフランシスコ・サンディト。二人とも助祭の筈だ。

「これは、お嬢様、お久し振りでございます」

フランシスコが立ち止まり、深く礼をした。

「お久し振りでございます、サンディト助祭、アクティナス助祭」

言えば、フランシスコの方は目を輝かせ、ニコルは一瞬驚いたような顔で私を見たが、直ぐに舌打ちすると目を逸らした。

「おい、私は先に行っておく」

言い捨て、さっさと歩き出す。

それを見送り。

「先日は素晴らしい品をありがとうございました、サンディト助祭」

この男、度々私の元に結構な高級品を送って来る。その意図は明白で。

「いえいえ。お嬢様のお気に召したなら幸いです」

「クザーヌ様にも、サンディト助祭から結構な物を頂きましたと申し上げたら、後ほど礼を、とおっしゃってましたわ」

私の言葉に、露骨な笑みを浮かべる。

「お言葉だけで十分でございます。お嬢様や猊下のお喜びがこのわたくしめの喜びでございますれば。もし何かあれば、何時でも声をおかけ下さい。非才なる身ながら、お嬢様の御為に働かせて頂きた

く」

言葉とは裏腹に、その目に浮かぶのは媚びと打算、そして、欲望。フランシスコがかなり前から私をそういう対象として見ている事は気付いていた。

確かこの男の家はロマリアの名門だった筈。取り込めば役立つか。

「あの、助祭、私ウィンドボナの街に行つて見たいのですけれど、どこか良い場所をご存じでして？余り外に出た事が無いもので、いざ出かけようと思うと、どこへ行って良いのやら、サッパリですの」

なるべく無垢そうに見えるよう微笑み、小首をかしげる。

「そうでしたか。今日が休暇であればこのわたくしめがご案内致しましたが……。そうですね、お嬢様がお楽しみなれそうな場所には、幾つか心当たりが御座います」

立ち話も何ですので、と空き部屋へと私を誘導する。特に逆らいもせず入ろうとしたところ

「何をしておる、セレナ」

ちつ。良いところで。

振り替えるさいに隣りを見れば、随分顔を青くしたフランシスコ。仮にも枢機卿の愛人に手を出そうってんだから、もうちょっと度胸があるかと思っていたが。

「お帰りなさいませ、クザーヌ様。今日は随分とお早いんですね」
「まるで儂が早く帰つて来てはいかんでも言いたげだな。セレナよ、ここでその若造と何をしていた」

ジジイの目は嫉妬で歪んでいる。

最近私は少しでも他の男と一緒にいるところだ。最初の頃なんか、同じ趣味の奴らに私を貸したり、3Pやらそれ以上やらを平気でしていたと言っのに。

私への執着心や独占欲が大分強くなっている。

良い傾向だ。

「ウインドボナのお店のことを聞いていただけですね。実は、猥下に贈り物をしたいと思いましたの」

その言葉に、ジジイが嬉しそうな顔になった。嫉妬も霧散したようだ。

「そうか。それならそうと言ってくれれば……」

「だって、こっそり用意して驚かせようと思ったのですもの」

拗ねたように横を向けば、あからさまに慌てる。

「そ、それは俺が悪かったのう。そうじゃ、今度一緒に行かぬか。お互いに贈り物を選びあえば良い」

「私にも何か下さいますの？」

ジジイが大きく首を振る。

「勿論じゃ。どうじゃ、それで許してくれぬか」

「判りましたわ」

ホッとしたように頷くジジイ。

「では猊下、お嬢様、わたくしはこれで失礼致します」

フランシスコが逃げるように立ち去り、ジジイも着替えに寄っただけだったとかで。

「あー。暇だ」

何か疲れたし、今日はもう出かけるような気分じゃないけど。

どうするかなあ。

その9

結局、庭を散策する事にした。

ジオアンナを伴い、裏庭に出る。裏庭と言っても、何種類もの花が植えられとても美しい。

噴水もあれば、常に人が手を入れなくては枯れてしまうような草木も数多い。

ここ滅多に人が来ない場所なんだが。こういう、人から見えない場所でも綺麗に、と言うよりも華美に整えるのは『神の権威』とやらを示すために必要なんだと。

確かに、見えないところまで手を抜かず、というのは間違ってると思うけど、庶民の年収が吹っ飛びそうな額の花を植える必要はあるのだろうか。大体前庭に庭師6人、裏庭に3人専属って、正直大きな無駄遣いにしか思えない。

更に日本人的な感性から言わせてもらうと、些か装飾過多に過ぎる。もっとこう、自然の趣と言うか、そういったものを生かしてだな。

……日本庭園の落ち着きや荘厳さも良いものだと思うんだけどなあ。

それにこの庭を整える金を炊き出したとか、貧民救済に使えば、一体どれだけの人が助かるか。

教会の金で好き勝手贅沢三昧に暮らしてる私が言う事じゃないか。

色々と言ったが、この庭が観賞に値する程見事なのは確かだ。この

一時くらいは、何もかも忘れてのんびりと……ん？なんだ？アレ……、何かおかしな、って人じゃないか！？

「ジョアンナ！」

ちょうど同じものを見たのか、ジョアンナの顔もこわ張る。

2人でソレ……庭の奥で倒れ込んでいる人影に駆け寄る。

「これは……」

ジョアンナが息を飲む。

「酷いですね、直ぐに人を……、セレナ様、お顔の色が！こちらへ……！」

ジョアンナの私を気遣う声すら、どこか遠い。

激しく暴行され、身体中無事なところが無い程のその様は、だって、あまりに……。

「かあ、さん」

あまりに、あの日の母に酷似していて。

あの絶望が、あの日封じた想いが吹き出す。

「う……ああ……」

心のままに泣き叫びそうになった時、彼女の胸が微かに上下してい

る事に気付いた。

生きてる！！

「~~~~っ、ジョアンナ、今すぐ誰か呼んで、彼女を客間に運ばせて。それから秘薬　高級なやつと、水メイジの手配を！！」

彼女が母さんじゃないって、ちゃんと分かっている。母さんはもう既にこの世にいない。

それでも　　それでも。

今ここで彼女を救えたら、いや、彼女を救えなかったら、私はきつとまた後悔する。

だからこれは私の勝手な感傷。

それでも彼女は助けて見せる。

「急がせろ！！」

でき得る限りの手を尽くして、彼女は今眠っている。治療は総て終わり、もう怪我は殆ど治っている。後は目が覚めれば、もう心配は要らないという事だった。

高価だが、最高級とまでは行かない秘薬2、3本に、トライアングルの水メイジが1人。

たった、それだけ。たったのそれだけで、彼女は一命を取り留めた。

あの時、両親が死んだあの時に、私に今と同じだけの力さえあれば
いや、たったこれだけの、私の一声で、半刻もしないだけの
時で集まったコレを、あの時用意さえできていたなら。

父さんも母さんも、死なずにすんだのか。

こんなにも簡単に、助ける事が出来たのか。

高々ジジイ1人にこの身を売るだけで手に入った、こんなもので。

たったこれだけで、あの優しい人達を失わずにいられたのか。

あの日の絶望も、悲しみも、これだけの事で

世界はどこまでも残酷だ。両親が死んだからこそ、私は力を手に入
れようと願った。誰かを簡単に助ける事が出来る程の力を手に入れ
て。それでも、本当に救いたかった人達には、決してこの手は
届かない。

本当に救いたかったのは、父さん、母さん、あなた達なのに！！

もっと早くに、力を目指せば良かったのか。

もっと早くに、この身を売っていれば、あの日2人を助ける事が出来たのか。

もっと、もっと早くに

両の目から、涙が零れ落ちた。

「セレナ様……………」

ジョアンナの暖かな腕に抱かれて。

今はなにも考えずに、ただ泣きたかった。

「う……」

ベットから上がる、微かな呻き声。見れば、先ほどまで固く閉じられていた瞼がうつすらと開き、淡い蒼の瞳が垣間見得る。

「目が覚めた？」

声を掛ければ、目を大きく見開き弾かれたようにこちらを向く。

治療し、顔の腫れや傷が無くなった時も思ったが、何とも美しい女

性だった。

歳は20程か。

流れ落ちる、黄金を紡いだような豪華な金髪に、アイスブルーの瞳。小さな顔にはこれ以上無いと言う程に絶妙なバランスで目鼻が納まっている。体付きはほっそりとして、だが出るところはしっかりと出ている、世の婦人が見れば悔しさに歯がみしそうな程のプロポーシヨン。どこか憂いに満ちた、儂げな雰囲気とあいまって、まさに妖精か天使のような、人ならざる空気を持った美女だった。

良くもまあ、この顔を殴れたものだ。

「どこか痛い場所とかは？」

重ねて問えば、首を大きく横に振る。

「い、痛いところとかは、大丈夫です、けど、あ、あの、私、どうして……………」

「覚えて無い？」

覚えて無いなら、無理して思い出す必要も無いだろう。そう言いかけ、

「あ、あ……………」

真っ青になって震え出す。

思い出したか。

目覚めたばかりなのに、余り刺激を与えるのは体に悪いだろう。薬で眠らせた方が良いか？

睡眠薬に手を伸ばしかけ、震えている彼女の瞳が、それでもしつかりとした芯の強い光を灯しているのが目に入り、やめた。

怯えてこそいるが、恐慌はきたしていない。

こんな目が出るなら大丈夫だろう。

「何があつたのかは、怪我の状態で大体分かつている。無理して説明する必要は無いよ」

「あ、あなたが、助けて下さったのですか？」

「助けたと言うか、私はただ治療の用意を整えたただけだ。実際に治癒させたのは水のメイジ。何より君が助かったのは、動かない体で必死にここまで逃げて来た、決して諦めようとしなかった君自身の力だろう」

実際彼女は身体中ボロボロで、後少し発見が遅かったら死んでただろうって言うてたし。

「そ、そんな事ありません！！あなたに助けていただけなかったら……………」

「そ？まあ、どうでもいいや、そんなのは」

私は彼女と母を重ねて手を差し延べただけだし。そう思いたかったら思えば良い。

「は、はえ？」

そんな事よりも、今するべきなのは。

「ところで君、家族は？連絡したい人とかいる？」

ハッとしたように顔を上げ。

「あの、本当にありがとうございました、お礼にはまた後ほど、改めて寄らせていただきます。それで、その、わ、私帰らなきゃ……」

はい？

「別に礼は要らないけど、もう少し休んで行くと良い」

「でも、私、仕事、仕事」

「はあ？仕事？何言ってるの、君。あのさあ、君さっきまで死にかけてたの。墓穴に片足突っ込んでるような状態だったの。なのに仕事？冗談だろ？2、3日は絶対安静だよ」

立ち上がるうとするのを、ジョアンナに押さえさせる。

「で、でも、帰らなきゃ、旦那様……メルヒオル様に、それにイウアンにも連絡しないと！」

メルヒオル、だって？

「メルヒオルって、君もしかして、『水辺の誘い』の子？」

「メルヒオル様を御存じなのですか?!」

「あー。知り合い? まあ、そう言う事なら、私の方から連絡してるから。で、君は従業員? 愛人じゃなさそうだし」

「ち、違います! 愛人じゃないです!」

真っ赤になって、随分と可愛らしい。

半ば見とれながら、苦々しい思いを噛み下した。暴行されたにしては随分としっかりしているとは思ったが、『水辺の誘い』はこの辺りでも有数の娼館だ。つまりは彼女は、なれていたのだ。その扱いにある程度耐性があっただけ。

何とも救えない。

「あー。わかった。で、イウ”アンってのは?」

益々赤くなったな。恋人か? ん? 今度は青く?

「あの、私やっぱり帰ります! イウ”アンのところの行かないと」

赤くなったり青くなったり慌てたり忙しいな。

「だから待てって。連絡取りたいならこっちから使い走らせるから。で、イウ”アンって誰?」

その10

事情は無理に話さなくて良いと言ったが、どうやら今回の事件の原因は『イウ”アン』にあったらしく、『人様にお聞かせ出来るような話では無いのですが』、そう言いながら話した。

彼女はこのウインドボナの、中堅規模の商會会頭の娘として生を受けた。中堅とは言っても家はなかなか裕福で、何不自由なく、といえる環境の中で育つたらしい。だが彼女が15になった時、知り合いの持つて来た『儲け話』で父親が大損を出して破産。苦しい生活の中、借金のかたとして彼女自身も無理矢理家族と引き離され、商館に売られた。

良くある話だ。

イウ”アンは、父親の商會で丁稚として働いていた少年。彼女の遊び仲間でもあり、長じてからは互いに初恋の相手。真面目で優しく、頭も良いイウ”アンを父親も気に入っており、彼女とイウ”アンを結婚させて店を継がせる、と言い出す程。

ところが、莫大な借金のかたとして彼女は売られてしまった。諦め切れなかった彼は、成り上がる事を誓い、社会の闇に身を沈める。持ち前の優秀さでとんとん拍子に出世して、ところがそれが兄貴分の氣に障って、彼の想い人である彼女を襲った、と言う訳らしい。

どこぞの漫画で見掛けそうな話だ。

話終えた彼女は、どこかホツとした顔をしていた。

話す事で気が楽になったんなら良いさ。いくらでも聞こう。

「話はわかった。ではイウ”アンに気をつける、と伝えればいいのか？」

「はい。おねがいします」

そこで、何より大切な事を未だ聞いていなかった事に気付いた。

「ああ、そう言えば、わたしはセレナと言う。こっちの彼女はジヨアンナ。君の名前は？」

彼女はそれはそれは美しく微笑んだ。

「ナターリエと言います」

「ジヨアンナにイウ”アンと連絡を取るよう言い付ける。

そして一度彼女、ナターリエの寝室から下がり、便箋に筆を走らせた。メルヒオルに宛てて、ナターリエが大怪我を負っているのを助けた。暫くはこちらで静養させたい旨書き付け、後日礼に行くと締める。まあこんなものか。

私とメルヒオルの関係は、ジジイ繋がりだ。メルヒオル・フォン・クルトは、貴族の当主を退いてから、趣味と実益を兼ねた娼館を開

いた。ジジイとメルヒオルは同好の士という奴らしく、私と出会うまでジジイは、自分の趣味にあった幼女の調達をメルヒオルに任せていたらしい。その縁で、ゲルマニアに来たばかりの時に何度か相手をさせられた事がある。ジジイの私に対する執着がひどくなる前までだが。

もつともメルヒオルの方は未だ私に未練があるようで、会う度に話しかけてくる。『おねがい』すれば断るまい。

手紙をメルヒオルに届けるよう言い付け、ナターリエの部屋へと向かう。

なんだ？騒がしいな。

「ジョアンナ、と、誰だ？」

ナターリエの部屋の扉の前で言い争っている男女。もしかして、この男が……。

「ここにナターリエが居るんだろう、通せ」

「ですから、イウ」アン殿、ナターリエ殿は今は眠っていらっしやると」

珍しくジョアンナが声を荒げている。

それはともかく、やはり彼がイウ”アンか。

「落ち着け、2人とも。病人の部屋の前で騒いでどうする。とりあえず、イウ”アン、君には色々と説明しなければならぬ事が有るから、こちらに」

振り返った彼はなるほど、ナターリエと並んで遜色ない程の男前である。だが今は、その端正な顔一杯に焦燥を載せている。

ナターリエが心配で気が気でないのだろう。

とりあえず一度落ち着けようと、別の部屋へ向かおうとした時、扉が開いた、内側から。

「あの、どうか……、イ、イウ”アン!?”」

「ナターリエ! 大丈夫だったか!」

どうやら煩くし過ぎて起こしてしまったらしい。

「申し訳ございません、セレナ様」

起こしてしまった事を気にしているのだろう、ジョアンナが深く頭を下げる。

「ああ、別に君のせいでは無い。あの色男が話を聞かなかったんだろ?」

「ですが、」

「良いつて。ナターリエも嬉しそうだし」

ジョアンナの謝罪を流して、抱き合ってる二人に向き直り。

「ところで少しばかり話があるのだが、構わないかな、そのバカップル」

互いの事しか見えて無いのに水をさすのは心苦しいけど、とりあえず部屋に入ろうか。

「で、君がイウ” アンで間違えないのだな？」

「ああ。ナターリエを助けてくれて、感謝している」

「さっき彼女にも言ったけど、それは別にどうでもいい。私は何もしていないし。問題はそこじゃなくて、どうしてナターリエが襲われたかだろう。君がしっかりしないと同じ事の繰り返しになるぞ」

「どういう事だ？これと……まさか、俺のせいなのか？」

「ち、違うの、イウ” アン、これは私の不注意で、」

必死に言い繕うとするナターリエには悪いが。

「ナターリエ、正直に話す事だ。でなければまた同じ事が起こるぞ。今度は死ぬかもしれない。それに次のターゲットがイウ” アンになるかもしれない」

ナターリエが唇をかねて俯く。

「では、話そうか」

ざっとナターリエから聞いた話を纏め話終える。

「すまない……………、ナターリエ、本当に、すまない……………」

青ざめた顔で、震える唇で。彼は彼女に謝罪する。

まあきつと、許されるつもりなんて無いんだろうけど。

「謝らないで、イウ」アン、私は大丈夫だから」

「大丈夫な筈が無いだろう！こんな、俺のせいで……………」

「あなたのせいじゃないわ。あなたを妬んだあの男のした事よ。それに元を正せば、あなたがこんな道を選んだのは私のせいじゃない。誰かのせいだとしたら、私が一番の原因だわ」

「何を馬鹿な事を！」

「本当だもの。だから、お願いだから、自分をそんなに責めないで」

ナターリエがそつとイウ”アンの手を取る。皮膚が破れ、血が出る程握り締めた手。

「ナターリエ……………」

まさに2人の世界！私たち忘れ去られてるね？

「あー、いい雰囲気の所誠に申し訳ないが、話を進めてもいいか？」

言えば、恐らく互いしか見ていなかった2人が慌てて向き直る。

バカップルって始末に負えないよね。

まあこの場合仕方ないけどさあ。

「ナターリエは完全に治るまで、私が責任持つて預かるよ。だから君、その間に頑張つてその兄貴分とやらと話つけるよ」

「それが出来たら苦労はしない。あの男は小物だが、手を出せばこちらが潰される。それに預かると言つても、ナターリエは稼ぎ頭だ。店が許す筈が無い」

だろうねえ。調べさせた所に依ると、ここら辺り一体を締めてる、いわゆるマフィアの幹部の息子みたいだし？如何に優秀で出世頭つて言つても、組織全体の中でみたらまだまだ地位の低いイウ”アンに対抗措置は無い。

だから。

「手。貸してやるよ。それにメルヒオルの奴とは知り合いなんだ。多少の融通はきく」

イウ”アンはものすごくうさん臭いモノを見る目で私を凝視する。

「何を馬鹿な。お前の様な子供に何が出来る？大体、お前は何者だ

？メルヒオルがそうやすやすとナターリエを手放す筈が……………」

「イウ」 アン、失礼よ？彼女は私を助けてくれたのよ？」

そのタイミングで、先ほどの説明の最中、呼ばれて一度出て行った
ジヨアンナが懷から封筒を取り出した。

「どうぞ、セレナ様」

目を通してから、イウ」 アンに放ってやる。

みるみる内に、目が見開かれた。まあ当然か。だってそこにはナターリエを助けた礼と、心苦しいがよろしく頼むってしたためられているもんねえ。

隣りでナターリエも目を丸くしている。

「馬鹿な……………何者なんだ、お前は。見ず知らずの平民のために惜しげもなく秘薬を使い、メルヒオルにつてまであるとは」

「あれ？君達気付いて無かったの？」

本気で気付かなかったのか。

「君たちも噂くらいは聞いた事あるだろ、枢機卿がどっかから拾って来た幼女に入れあげてるって」

「ま、さか……………」

「噂の『枢機卿の愛人』とはこの私のことだ」

2人の驚愕の表情は大変面白かった、とだけ言うておく。

その11

窓から空を見上げる。

今日も良い天気だ。外に出ようか……。その前にナターリエの所に行くかな？

部屋から出て、ナターリエのいる客間に足を進める。

ん？あれはサンディト？何してるんだ？妙にこそこそして……。興味を引かれ追いかけてみる。

人目を忍びながら彼は、奥の方の部屋に入って行つた。……。あの部屋はジジイがコレクションやら儀式用品やら置いてる所じゃなかったか？

そんな場所に、一体なんの用で……？

お、出て来た。何か盗んだ様子も無いし。

なんだ？何をしていたんだ？

まあ、分からない事をいつまでも考えてもしょうがないか。

「入るよ、ナターリエ」

扉を開ける。

「ああ、大分回復して来たみたいだね」

寝台に半身を起こしたナターリ工がほほえむ。顔色も悪くない。

「全てセレナ様のお陰です。本当に何から何まで、良くして頂いて」

美人の笑顔って良いよね。眼福だ。

見てるだけでこちらも幸せになれる表情。

うん、良いね。

メルヒオルの所に戻る日が近付いて来ても、一切泣き言どころか暗い表情一つ見せない所も気に入った。

それに、彼女は

「うん。やっぱり決めた」

「何がですか？」

「ん？何でもないよ」

不思議そうに首を傾げるのを尻目に部屋から出る。

あー。言ったらびつくりするかなあ？するだろうなあ。ぬか喜びさせるのもあれだから、確定するまでは言わないが。

ん？何だか騒がしいな。何かあったか？

「何と言う、なんと言う事をしてくれたのじゃ貴様は！？」

ジジイの声？いつの間に帰って……………？

それにこの騒ぎ、さっきのコレクションルームの方からじゃないか？

行ってみれば、ジジイが怒りに真っ赤になって、一人の助祭を怒鳴りつけていた。

怒鳴りつけられているのはアクティナス助祭。

その手元には、ヒビの入った杖らしきもの。

「これは先の教皇様から戴いた品じゃ。それに……………一体なんと言う事を……………。おまけに今から王宮で使うと言うに、ええい、貴様なんぞ死刑にしても生温いわ！」

ジジイに頭を下げるアクティナス助祭、そしてそんな2人の様子を、表面上は沈痛な表情を装いながらも愉悦を押さえ切れていない目で見ているサンディト助祭。

把握した。

ジジイがアクティナス助祭に、儀式か何かで使う先代教皇からの下賜品を持って来る様言いつけた。それを知ったサンディト助祭が、先回りしてソレを壊して、上手く罪をなすり付けたんだろう。

何て幼稚な。

子供の嫌がらせかよ。

確かサンディトの家はロマリア有数の名門だったな。対してアクティナスの方は先代、つまり彼の祖父が権力争いに敗れて没落したの

だったか。

でも確かアクティナス助祭自身が、50年に一度の、とか言われるくらいの相当な優秀で、後ろ盾もほとんど無く自力で助祭まで出世したんだっけか。

で、サンデイトの方はそれが気に食わない。

だから何かにつけ嫌がらせをしている様だったが。

アクティナスもなあ。不器用と言うか生真面目と言うか世渡り下手と言うか。

媚び売ったり、歡心を買ったり、付け届けをしたりとか出来なさそうなやつだしな。まあそれが真つ当な人間というやつなんだろうが。

ジジイもジジイだ。そんなに大切なものなら、定期的に固定化と硬化かけとけよ。

でも……。ああ、しょうがないな。

「ごめんなさい、クザーヌ様!!」

「セ、セレナ!？」

3人が目を丸くする。

「なぜ謝るのじゃ、セレナ。お前を怒っているのでは無いぞ」

「ですが、その杖の事なのでしょう?」

「あ、ああ、そうじゃ」

いい感じに気が殺がれてる。

「それを壊してしまったのはきつと私ですもの。この前この部屋に入った時に、間違えてぶつけてしまいましたの。その時に壊れてしまったに違いありませんわ。……私、死罪になってしまいますの？」

嘘だけ。

ジジイとサンディットが慌て出した。アクティナスは訳が分かんないとでも言いたげな。

「な、いや、そんな事はないぞ、セレナや。儂がお前を死刑にする筈が無かるう」

「でも、先程は死刑でも足りないとおっしゃってましたもの。それに……先代様からの御下賜品だったなんて、私、そんな大切なものを……」

ぼろぼろと、涙を流す。

いやまあ、嘘泣きだけ。

おーおー、うるたえてるなあ。

「あ、あのな、セレナ、さっき言ったのは、そう、嘘じゃよ。少しばかり腹が立ったのでな、脅かすつもりで言ったのじゃ」

どこからどう見ても殺すつもりだったけど。

「…………ほ、本当ですか？」

「ああ。いかに大切だとは言え、所詮はものじゃ。お前の命となど代えられる筈が無かるう」

「でも、」

「お嬢様、猊下が本気でそのような事をおっしゃる方でないのは、お嬢様が一番良くご存じでしょう？」

いや、普通に言うと思うが。

「そ、そうですね。クザー又様はとても優しいし、それに慈悲深いお方ですものね」

「うむ。じゃからな、セレナ、余り気に病むでないぞ」

2人ともあからさまにほっとしてるなあ。この辺が引き時か。

「クザー又様、本当にごめんなさい。許して下さい、ありがとうございます」

ぎゅっと抱き付いて笑う。

「いや、儂も驚かせて悪かったの。…………ああ、いかん。もう行かねば。セレナ、儂は仕事に行かねばならぬでな。土産を買って来てやるから、良い子にしておれよ」

「はい、クザー又様。お早いお帰りをお待ちしておりますわ」

ジジイが脂下がった顔で出て行ってから。

「サンデイト助祭はお行きになりませんか？」

見上げれば、そこには苦虫を百匹単位で噛み潰した様な顔。

「私は今回の儀式には不参加だ」

「そうでしたの。……今回は私の不注意でご迷惑をお掛けしてしまつて申し訳ございませんでした。私はこれで失礼致しますわ。お詫びはまた改めて後日にさせて頂きますわ」

部屋に戻つて手紙書かないと。戻ろうと身を翻したところで。

「待て」

と言つかさあ。そんなに嫌そうな顔するなら、呼び止めない方がいいと思うのだが。お互いのために。私が普通の子供ならその顔だけで泣いてるぞ？

「何かございました？」

「なぜ……どうして私を庇つた？」

「何の事ですか？」

「とぼけるな。お前はあの杖を壊してはいないだろう。あの杖は子供がぶつきたくらいでどうこうなる代物ではない」

おや。

「何かしたとしたら、サンディットの方だろう。にやにや笑って……。そんな事より、なぜ嘘を吐いて、自分が壊した事にしてまで私を庇った？」

へえ？ 気付いてたんだ。ってか、それならなんで反論しなかったんだ？

とりあえず。

「私が壊したなんて言ってますんわ」

それはきちんと主張しないと。

「だが先程……。なるほど、そういう事が」

そう。私は『きっと』壊したに『ちがいない』と言っただけで、『私が壊した』と断定はしていない。詭弁だが。

「ええ。そういう事、ですわ。では……」

「待て。だからなぜだ？」

あーもー、しつこいなあ。

ってかそんなに助けられたのが嫌なのか、この男は。あのままじゃ、下手したら本気で殺されてたのに？ 弁明もして無かったところを見ると自殺志望者か？

「まさか、貴方死ぬおつもりでしたの？」

なら悪い事を…………。

「違う!！」

「では、どうして何もおっしゃいませんでしたの？貴方、壊してないのでしょう?。」

「…………なぜそう言い切れる」

「私、少し前にサンディト助祭が、人目を避けてこちらに入って行かれるのを見ましたの。助祭は暫くして何も取らずに出てきて、また人目を避けて戻られましたわ」

ふうん。やはり驚かないか。最初から気付いていたみたいだし、慣れてるのかな？

仲悪いしな、この2人。

「そうか。やはりな」

「気付いていらっしまったなら、それに死ぬおつもりでもなかったとおっしゃるのなら、どうして…………」

「…………ロマリアに、送り返されるかと思ったのだ」

「ロマリアへ?」

「ああ。母が倒れたと…………。だが、聖職に着いている身では簡単移動などできん。ならば、枢機卿の怒りを買えば…………。」

降格でも何でもして、ロマリアに帰れるかと思った、と。まさか本当に殺されそうになるとまでは思わなかったのか。

それにしても、ふうん。母親が病氣、ねえ。

「で？お前はなぜ私を？」

ああ、忘れて無かったか。

でもまあ、良いかな、本音言っても。

「だって、君さあ、私のこと嫌いだよ？」

アクティナス助祭が目を見張る。

「それも、君はこんな年端も行かない幼女を愛人にしている枢機卿、それを許容してる教会、社会、そして何よりもそれに対して何一つ出来ない自分。そういうのを見せつけられるから、私のこと見たくも無いくらい嫌いだよ？」

自分の無力を思い知らされるから。

「そんなまともな人って、珍しいからさ。だから、助けられるなら助けたいなと」

アクティナス助祭が大きく目を見開く。

「なぜ……なぜだ。なぜお前は、愛人などやっている？」

は？そんなの決まってる。

「力が欲しいから」

「力が欲しいなら、もっと別の手段があるだろう？なぜ真つ当に……」

「あのさあ。私孤児なんだよねえ。それも、メイジでも何でもない、ただの貧農の子供。そんなのが、君の言う真つ当な手段とか取れる筈無いだろ？」

「じ、じ…………？」

「そ、両親亡くして、色々あつて教会に身を寄せてたら、クザーヌに無理矢理犯された。魔法も使えない平民の子供が抵抗出来ないだろ？するつもりも無かったけど」

没落したとは言え、貴族のお坊ちやまには想像も付かない世界なのだろう。

だからどうと言うわけでもないが。

「ていうか、君だって力が欲しいから、あのクザーヌに黙って仕えてるんだろ？お互い様じゃないか」

「私は……………腐敗しきったロマリアを、変えたいと……………」

そのために色々なことを見ないふりで上を目指してると。彼みたいな性格だと、色々辛いんだろうな。上役がまともな人格者ならともかく、あのエロジジイだしなあ。

いつそ全て利用し尽くせるまでに割り切れたら良いんだろうけど、そんなタイプでも無いんだろうから。

と言うか、顔色が物凄く悪いのだが、大丈夫だろうか。言い過ぎたか？

「へえ。まあ、ミイラ取りがミイラにならない程度に頑張れよ」

ニーチェだっけ？ええと、何だったか。怪物と闘う課程で自分も怪物にならないように気をつけるみたいだ。ええと。ああ、そうだ！

「怪物と戦うものは、その過程で自分自身も怪物になることのないように気をつけなくてはならない。深淵を覗く時、深淵もまたこちらを覗いているのだ」

「それは」

「昔の偉人が言ったらしいぞ。まあ、私を見るのも嫌だと言う気持ちを持ち続けられるなら、大丈夫だろう？」

私は目的が果たせるのならば、怪物になろうが深淵に溺めとられようが一向に構わないが、この男はそうでは無いのだろう。

なにか言いたげなのを無視して歩き出す。

私には私のやるべき事がある。

その12

「クザー又様」

コトが終わってベットの中。

私は『おねがい』を口にさせる。

「うん？どうしたのじゃ、セレナ」

「あの、少しお願いがありますの」

「なんじゃな？セレナは滅多にお願いなどせぬからのお。何でも言うて見るが良い」

機嫌は良さそうだな。と言うか私から『おねがい』されると嬉しいらしい。今まで頼んだものって、そう言えば薬草園が欲しいって事と、大図書館への出入り、後は服とかを適当にねだっただけだったか。

「今面倒を見ている平民の女が居りますでしょう？メルヒオル様のところの。なかなか気が利くものでして、私の侍女として引き取りたいんですの。侍女がジョアンナ1人と言うのも寂しいでしょう？」

「なんじゃ、そんな事が。好きにきなさい。身受けに金が掛かるなら幾らでも言いなさい」

よし、次だ。

「あともう一つ、あの、アクティナス助祭がいらっしやいますでし

よう？」

「あれがどうかしたのかの？」

「その、私のせいで彼がクザーヌ様に怒られたのだと思えば、少々心苦しく……。あの、出来ましたらその、ロマリアへの使者に任じてはいただけませんか？他の地域ならともかく、枢機卿直々の任でロマリアに行くとなれば、とても栄誉な事と思いますし、暫くしたら私の罪悪感も緩和されると思いますの」

「それで良いのか？何なら、アクティナスはどこぞに飛ばしても良いのだぞ」

おいおい、そりやまずいつてか、私は罪悪感感じてると言ってるんだから飛ばせなんて頼む筈が無いだろう。

「いいえ。とんでもございませんわ。ですが、余りはやく帰って来られると……」

「ふむ。ならば今度の最高議会まで残して置くかの。そうじゃ、お前もロマリアに連れて行ってやろう。大聖堂は一見の価値があるぞ」

最高議会は、年に一度行われる枢機卿と教皇による会議だ。よほど多忙でもない限りは、枢機卿も全員参加と言う事になっている。

それにしてもジジイ上機嫌だな。やはり『おねがい』はベットの中心に限る。

翌朝。書き上げておいた手紙をジョアンナに渡す。

「これ、水辺の誘いのメルヒオルに」

「かしこまりました」

「あ、後、ナターリエのところに行つて、私が後で行くと伝えておいてくれ。イウ”アンにも来るようにと」

「承りました、セレナ様」

「よろしく、ジョアンナ」

ジョアンナの凜とした姿を見送る。本当にジョアンナは優秀だ。主人の行動を妨げる事無く、でも力を貸して欲しい時には素晴らしいタイミングで手を伸ばし、言い付けられた仕事は完璧にこなす。

私には勿体ないほど、と言えばまた怒るのだろうけど。

やれやれ。

頭を振つて思考を切り換える。

ジジイには了解をもらつたし、メルヒオルには言い値を払うつもりだ。ああ、一応店にも言つた方がいいか？
なんにせよ、ナターリエの方は心配ない。

後はイウ”アンだが。

机におかれた報告書に目をやる。

いや、まさかここまで上手く立ち回るとはね。嬉しい誤算だ。

ナターリエを襲った男は、幹部である父親諸共失脚した。

因みに私は何もしていないぞ？

ただ、父親が懇意にしていた、露骨に言っしまえば、金や便宜を計ってもらうのと引き換えに、政敵の暗殺など、後ろ暗い事を引き受けていた貴族との癒着の事情を流しただけ。

イウ”アンはソレをその貴族と反目し合っている貴族のところへ持ち込んだ。

で、後見役だった貴族の当主は失脚。父親も芋蔓式に地位を失った。

何が素晴らしいって、イウ”アン本人はこの件で殆ど動いて無い事。貴族とのつながりは、確かに組織に利益をもたらしていたから、彼が表立って動けばそれは裏切りになる。

だが、貴族同士の権力争いなら話は別。

組織の上の方の奴等も、多分この件でイウ”アンが動いた事に気付いて無いだろう。

それほどに彼の工作は隙の無いものだった。

見事だ。欲しい。と言うかナターリエを手に入れようと思ったの何割かはイウ”アンが欲しかったからでもある。

ナターリエ自身を気に入ってるのも本当だが。

「ふふふ………」

ナターリエを助けてやり、情報を流す。このうえで私がナターリエを身請けしてしまえば、それを恩と感じるか脅迫と捉えるかはともかく　　イウ”アンは私に逆らえない。

私が使う事の出来る、ジジイの息の掛かって無い、それも飛び切り優秀な人材を確保出来る。

出来る事もこれからは段違いに増えるだろう。

あの2人に取っても悪い取引じゃない筈だ。ナターリエを身請けするのに掛かる金額は相当高額な筈。それを用意するのに掛かる時間を考えれば……私に従うだろう。

人の弱みに付け込んで、悪どい事してるなとは思うが、私には誰かを無償で助けてやれるだけの余裕はないんだ。

悪いな、お2人さん。

だが、君達の事も助けてやるから。

だから。

今は私に利用されてくれ。

「失礼致します、セレナ様」

「ああ、ジヨアンナか、入れ」

「メルヒオル様からの手紙を。イウ”アン殿もそろそろ到着なさるようです」

「ご苦労様」

手紙に目を通す。おや、これは随分と吹っ掛けられたものだ。

「2万エキューねえ」

ナターリエの父親の借金は1万エキューに達しなかった筈。取れるだけ取るうと言う事か、私が諦めるだろうと思っているのか。

「ジョアンナ、2万エキュー用意して」

だけど、私のスポンサーは枢機卿……プリミル教なんだよね。宗教って儲るんだ。それが大きければ大きいほど。

私がジジイから毎月貰う金額は、ここに来てから上がり続け、気付けば今や5000エキュー。それ以外にも気が向けば渡して来るし、おまけに欲しいものは別口で買って寄越すから、溜まる一方で減ることはない。

ガキにそんなに渡してどうするんだと思ったが、役に立ったな。

「かしこまりました。あと、メルヒオル様が一度店を訪れて欲しいと」

ああ、そう言えば前回も……。

「そうだな、では金を持って行く時に私も行くと」

しかし良く考えてみると、娼館に子供を招待する貴族のジジイって、相当アレだが。

「よし、そろそろナターリエのところに、」

行こうかと言いかけたところで扉が叩かれた。

「どちらさまでしょう?。」

「ニコル・アクティナスだ」

アクティナス? 一体何の用だ?

「どうぞ」

「失礼する」

入って来たアクティナスに椅子を進める。

「どうぞお座りになって下さいませ。それで、何かございましたの?」

思いつきり眉間に皺が寄る。おや、せつかくの男前が。

「その口調を何とかしろ、気持ちが悪い」

気持ち悪いだと?

「失礼な男だな君は」

いやまあ、時々自分でもそう思わないでもないが。

本来の口調で話したことに、ジョアンナが驚いたようだ。そう言えは、言ってなかったな。

「で? 一体何の用だ? こちらにも少し用事がある。手短に頼みたい

ね」

「私をロマリアへの使者にするよう言ったのはお前か？」

あ、そのことか。

「そうだけど、それが何か？」

んー、ジジイが言ったのかな？

「なぜそんな事を」

「え？母親が病氣なんだろう？」

あんなに会いたがってたくせに、何を言ってるんだ？

「だから、なぜそれがお前が私をロマリアに帰す理由になる？」

「なぜって言われてもね。気分と言っか、気紛れ？」

「ふざけるな！！」

って言われてもね。本当の事だし。

代償行為って言うのか、ナターリエの事もそうだけど、私自身が両親に未練がありすぎるから、こういう話聞いたら手を貸したくなるんだよな。

「枢機卿の怒りを買ってでも、帰りたかったんだろ？何の不満があるんだ？」

言葉に詰まってるが、納得したわけじゃなさそうだな。

あーもー、面倒臭いな。……。いつそこいつも巻き込むか？こいつの性格なら、幾つか恩を売ってやった以上、協力しなくても邪魔することもないだろうし。それに出世したいって言ってたし。

「君、風のメイジだったよな？」

「そうだが、それが？」

うん。丁度良い。それにそろそろ時間だし。

「じゃあ、ついて来るといい」

「何を言っているのだ、私は」

「理由知りたいんだろ？長くなるし、それに今からその事に関連した話をしに行くんだ。良いから黙ってついて来れば良いんだよ」

その13

ナターリエの部屋の応接セット。そこに私とアクティナス、イウ”アンとナターリエが座っている。ジョアンナは私の背後に。

「悪いが、アクティナス助祭、サイレントを頼めるか？」

アクティナスは訳が分からない、と言わんばかりの顔をしながらも、大人しくかけてくれた。

「まずは、ナターリエの身柄を私が買い取る事になったよ」

ナターリエとイウ”アンはポカンとしている。

「え？」

「な……。お前、何を企んでいる?!」

いや、判らんでもないが、いきなりその反応は酷くないか、イウ”アン。

「ただ私のする事に少し協力して欲しいだけだよ。ナターリエには、私の侍女になって貰う。イウ”アン、君にも私の為に働いて欲しい。なに、無茶は言わないさ。

それに、これは決定事項で、枢機卿ともメルヒオルとも話についている。ここで君達は何を言っても覆せないよ」

「脅しのつもりか」

顔が怖いよ、イウ”アン。その通りだけど。

「そう取って貰っても構わない。でもさあ、君達に取っても悪い話じゃ無い筈だ。ナターリエの身請け代は2万エキュー」

2人が目を見開く。

「なんだと!？」

「そんな……………」

「いくら君が優秀だからって、そうそう稼げる額じゃない。一体何年、ナターリエに娼婦をやらせておくつもりだ?それにその間に、誰か別の者に身請けされたらどうする?」

「それは……………」

どうやら痛いところを突いたみたいだな。

「その点私のところなら、安全だし、いかがわしい事をされる心配も無い。勿論いつでも自由に会って構わない。結婚だってしたいならすれば良い。

悪い条件じゃ無いだろ?」

イウ”アンは黙り込む。

「あの、一体どうしてそこまでして頂けるのですか?」

それは、核心を突く言葉。今日はその事を話に来ただけど。君達の全て握っておいてこっちは何も知らせない、って言うのはフェアじゃないし。

「君さあ、私の母に似てるんだよね」

ナターリエは母さんに似てる。容姿もだけど、その雰囲気も。それが私が彼女を気に入ったきっかけ。

さあ、話始めようか。

「私の両親、殺されたんだよね」

あの日何があったか。私が何を見て何を思い、どう行動したのか。今に至る全てを話終える。

「セレナ様……………」

ジョアンナが泣きながら私を抱き締めた。そう言えば話した事無かったつけ。

「これが私の過去。この世に腐る程ある、理不尽な話の一つだ」

ナターリエは涙を流しながら、イウ”アンとアクティナスは痛ましい物を見る目で。

「そんな幾らでもある話でも、私は奴等が憎い。許せない。だからジジイに取り入った。怖くても辛くても、どんな屈辱的な事でも受け入れた。

力が欲しかったから。復讐したいから」

だから私はここに在る。

「その為に、君達の力を借りたい。別に私に忠誠を誓えと言っんじやない。」

ただ互いの目的の為に、利用し合おうと言ってるんだ」

「ナターリエとイウ」アンは2人の生活を手に入れる為、アクティナスはブリミル教を変える為に出世する為、私を利用して良い。自分で言うのもあれだが、私はかなり利用し甲斐のある人間な訳だし。

ジョアンナは……聞くまでもなさそうだな。

「どうだ？」

「……なぜお前は、素直に力を貸して欲しいとか、協力し合おうとかと言えないんだ？」

うーん。流石アクティナス。君は本当に、真っ直ぐな人だね。

世の中、君みたいな人ばかりだったら、きっととても優しい社会なんだろう。

「だって、お互いに信用できないだろう。少なくとも、私は相手の善意とか情とか、そんな目に見えない物で成り立った関係に安心できない。」

私は人を信じるのが怖いんだよ。信じた結果が、両親の死であり、この目だ」

そっと、眼帯の上から光を失った目を押さえる。

「私は人を信じる事が出来ない　　少くとも、今は、まだ」

ジョアンナの事すら疑ってしまっている。理性が信じるべきだと思っても、感情で納得出来ない。

「それに、君達だつて私を信じられないだろ？少くとも私だったら、私みたいなのを信じるのはごめんだ。私は何一つ信じていない。人の心も、思いも、神　　ブリミルも。そんな人間、信頼出来ないだろ？」

それでも、いつかは、とは思っけど。いつか、また人を信じられれば……。

「お前の境遇を思えば仕方ないのかもしれないが、始祖に対して何たる言いざまだ。

だが、私はその話に乗ろう」

以外にも、一番最初にそう言ったのはアクティナス。

「私は既にセレナ様に忠誠を誓っておりますので」

ジョアンナが泣き腫らした目で笑う。

「私は……、その、私に出来る事があるなら、喜んで」

ナターリエが。

「ナターリエを救って貰った借りもあるからな」

イウ”アンも。

「そうか。助かるよ。これからよろしく」

これedyouやく、私の目的の為の最初のステップを踏み出せそうだ。

「次に皆で集まれるのはいつか分からないし、今日のうちで当面の指針を決めておこう」

ジョアンナとナターリエは、侍女として私の世話と、アクティナスとイウ”アンとの連絡係りを。

イウ”アンは今まで通りに組織にいて貰う。そこで私の用意した金や情報を使つての立場の強化。出来れば幹部入りを目指す。後は町や裏社会の情報収集、ジジイに頼らないだけの資金力を身に着ける為の、財源の確保も。

アクティナスにはとにかく出世して貰う。勿論、私もジジイにそれと無く出世させるように後押しする。他にも資金、情報を問わないサポートを。

そして、それらを使って独自の人脈、情報網を築いて貰う。今回のロマリア行きなんて絶好の機会だろう。今は信念を曲げてでも、色々な人に取り入ってくれなくては。

私は勿論各人のサポートと金銭と情報の纏めと中継。それにジジイ

の持つ勢力　特に密偵組織などの取り込みだ。出来ればジジイ以外にも、何人がブリミル教の有力者、貴族などに繋ぎをつけたい。今度の最高議会で探してみるか。

後は原作関係者の調査。出来れば人材　特に技術者の確保が出来れば一番良いのだが。こればかりは地道に探し続けるしかない。

一応皆には、変わった物を研究している、変人と言われるような人間がいれば、知らせるように言っておいたが。ああ、コルベールが欲しい。でも未だアカデミーの実験小隊の隊長してるだろうしなあ。

ダングルテール、どうしよう？

ええい、ひとまずそれは置いておく。

とかく私の持つ力というのは、ジジイに依存している。ジジイに頼らない、私自身の権力を確立しなければならない。

「じゃあ、当面は各自この通りに行動してくれ。情報などは随時渡していく」

その言葉を最後に解散し、部屋から出ようとしたところで、

「言い忘れていた。ロマリアに帰れるようにしてくれた事、感謝している」

まさか君に礼を言われるとはね、アクティナス。

「私はただ、ジジイに君をロマリアに送るよう言ったただけだ」

「それでも、私が帰れるのはお前のお陰だろう」

君がそう思うのならそれで良いさ。

肩をすくめて、部屋を出る。

それにしても、君笑えたんだね、アクティナス。いっつも眉間に皺をよせてるから、てつきり笑い方知らないんだと思ってたよ。せつかくの恵まれたそのご面相を仏頂面にして、笑えば良いのには思ってたけどさ。

.....。

と言つかさ。

私にデレてどうするんだ。

その14

馬車に揺られながらウィンドボナの町を見る。

屋敷の外に出るのも久々だ。すっかり引き籠もり状態だからなあ。

今日の目的地は『水辺の誘い』。ナターリエの身請けの話を付ける為だ。

ジジイは渋ってたが、伊達に愛人をしていない。うまく宥めて煽てて、泣き落として許可をもぎ取った。

一緒にいるのはジョアンナ。ナターリエはお留守番だ。無いとは思うけど、万が一話が拗れた時の為に。

こういうのは身柄を確保していた方が勝ちだし。

お、着いたかな？

歓楽街の中、そこそこの規模を誇る館の前に馬車を止める。

「セレナ様、お手を」

差し出された手を取り、店の前に下り立った。

ふうん。ここがメルヒオルの店か。なかなか立派じゃないか。門の上にはクルト家の家紋。

噂に依ると、メルヒオルは『自分は隠居の身だから』と領地にも王都の屋敷にも寄り付かないらしいが、なるほど、ここで暮らしていた訳か。

なんと言つか、筋金入りの好色振り。いっそこまで来たら褒めるしかないような。

「おお、お久し振りでございますな、セレナお嬢様。本日はこのような所まで足を運んでいただき、まことにありがとうございます」

まさかわざわざ本人が出迎えに来るとは。

「お久し振りでございます、メルヒオル様。本日は私の為に貴重なお時間を割いていただき、感謝の言葉もございませんわ」

「いや何、楽隠居の身ですからな、時間はあり余っておりますわ。ああ、立ち話とは不作法を。どうやらお嬢様に久し振りにお会い出来て、年甲斐も無く浮かれてしまいましたな。さあ、どうぞ中へ」

何々と笑いながら、恰幅の良い初老の男 メルヒオル・フォン・クルトは私を館の中に導いた。

恐らくメルヒオルの執務室であろう場所で、書類を取り交わす。

「こちらがお約束の2万エキューですわ」

ずっしりと、私一人では持ち上げる事が不可能な程の重さの金貨が詰め込まれた袋を引き渡す。

「確かに」

中身を確認もせずに受け取る。

信用されてると取るか。足りなくても、私の身元は判ってるのだから、取り立てれば良いと思っっているのだから。大方後者だろうけど。

「いやしかし、ナターリエがいなくなるとなりますと、些か店も寂

しくなりますなあ」

「彼女はとても美しい方ですから、さぞや沢山の殿方から恋焦がれられていたのでしょうかね」

メルヒオルが得たり、とばかりに頷いた。

「ええ。今までにも何度も身請け話が持ち上がりましてね。貴族の方が後添いや、いつそ正妻に、と言って下さった事もあったのに、一向に首を縦に振りませんでな。一体どんな方ならナターリエの眼鏡にかなうのかと思えば、いやはや、お嬢様でしたとはなあ」

へえ。随分良い話も来てたんだ。

それを全て棒に振ってまで、イヴァンを待ってたのか。

それが愛と言う物なのかね。私には、よく判らないけど。

「まあ、そうでしたの。確かにナターリエはとても美しいし、それに気配りも利きますしね。ああ、メイドさんプレイとか似合いそうですね」

「ええ。確かに。ところで、お嬢様」

こほん、と咳払い1つ。さっきまで好好爺然としていた顔は引き締まっている。

なんだ？ナターリエを引き渡すのに、何か条件でも付けて来る気か？

「何でございましょう、メルヒオル様」

何を言われる？

「その……、『メイドさんプレイ』とは何ですか？」

おいおい、そんな事で真剣になるなよ。というか、知らないのに、良くまあその言葉に興味を持ったな。流石エロジジイ。その嗅覚はいつそ驚嘆に値するよ。

というか、やっぱりこの世界には『萌え』の概念は無いのか？

「メイドさんプレイですか？」

「ええ。なぜかその言葉が、私の中で酷く引つ掛かるのですよ。こう、何だか判らないが、琴線に触れるとでも申しましょるか」

はは、あんた本物だよ。ここまで突き抜けてたらいつそ清々しい。

「そ、そうですか。メイドさんプレイと申しますのは」

メイドになりきり、客をご主人様として扱う事で、普段とはまた違った趣が云々。他にも先生と生徒、巫女さん、お医者さんプレイなど多彩なバリエーションが云々。

途中我に返り、何でこんな話を熱く語っているのだらうと疑問を持つが、暴走しだしたエロジジイは止まらない。根掘り葉掘り、それこそ重箱の隅までつつきまくる勢いで聞いて来る。

娼館で特殊プレイについて老人に解説する少女。何てシユールな図。

気付けば日が傾きかかっていた。

ざっと2刻以上も、エロ話に花を咲かせていたのか私は。

なんだろうか、このとてつもない疲労感と、良く判らない敗北感は。

「あら、もうこんな時間ですね。すっかり話し込んでしまいましたわね…………。」

メルヒオル様、私、そろそろお暇させていただきましたわ。

本日は楽しい一時をありがとうございました。またお逢いしとうございますわ」

ソファーから腰を上げようとして。

「お待ち下さいお嬢様」

今度はなんだ？

「このメルヒオル、お嬢様の発想と知識に感嘆致しました。私自身、この道に関しては一角の者であると自負してきましたが、お嬢様には遠く及びませぬ。いや、比較する事すら出来ぬでしょう」

ねえ、それ言われて私が喜ぶと……………本気で思ってるんだろうなあ、このジジイは。

何か目がマジなものなあ。

「そ、そうですか？メルヒオル様にそこまで言っていただけなんて、大変光栄でございますわ」

ここまで心にも無い台詞を吐くハメになるとは、人生とは分からぬモノだな。

「いやいや。ご謙遜めされるな」

して無いよ。

「そこで、ですな。お嬢様を見込んでこのメルヒオル、是非ともお願い申し上げたき事がございます」

「何でしょう？」

「お暇な時だけで結構でございます。どうかこの店に足を運んで、その素晴らしい知識と発想を、私どもにご教授いただけませんか」
.....。

「はい？」

「いえ、無論無償で等とは申しません。謝礼は致しますし、そうですな、この店の全てをお嬢様にお任せ致します。店の権利も総てお譲り致します。

老い先短い哀れな年寄りの、最後の願いでございます。どうか、どうか.....」

そうまでして色事に耽りたいか。

いや待てよ。娼館、娼館か。これはなかなか.....。

「判りましたわ、メルヒオル様。私などで良ければ、そのお役目喜んで果たさせていただきますわ」

メルヒオルの顔が輝く。

「本当ですか！！ありがとうございます、本当にありがとうございます！！」

正に喜色満面を体現したメルヒオルに見送られて、娼館『水辺の誘い』を後にする。

「それにしても、宜しかったのですか、セレナ様。あのような事を引き受けてしまわれて」

ああ、娼館のアドバイザーのことが。

「もちろんだ、ジョアンナ。確かにそれなりに面倒は増えるが……」

主にジジイとかジジイとかジジイの説得とか。後はメルヒオルのあしらいとか。

「だがそれら全てを考慮しても、得る利益の方が遥かに多い」

まずは純粹に金銭面。ジジイに依らない資金が出来るというのは大きい。

そして、男と言うモノは、寝台の中では口も頭も軽くなるものだ。

つつい、重要機密を漏らしてしまったり、また聞かれた事に口を滑らせてしまう。

こちらに分かる訳が無いと、単純に侮っていると言うのも大きいだろうが。

それに噂も流しやすいし。寝台を共にした女に言われた事って、ついつい信じてしまうものだしねえ。

もし私が『娼館』と言う舞台を上手く使いこなせたら、それがもらす利益は計り知れない。

「だからまあ、ジジイをなんとか説得して、了解をもぎ取らないと」

そして夜。共に寝台に入ったジジイに、メルヒオルの娼館で助言者のな仕事をしたい、と願い出た。

「だめじゃ」

「でも、クザー又様……………」

つい先ほどまで脂下がっていた表情が一変、青筋すら浮かんでいる。

「大体、なぜそのような事を言う。まさか、今日メルヒオルの奴に抱かれたのではあるまいな」

「そんな事ございませんわ！ー！」

あー、やはり、分かってはいたが、その方向に向かうか。

「ではなぜ、メルヒオルなどの所に行きたがるのじゃ！ー！」

完全に嫉妬で頭に血が上ってるな。

「そんな……違いますわ、クザー又様……。私は、私はただ……」

はらはらと、目から涙を零す。

ジジイがぎよっとしてる。少しは話を聞く気になったか？

「わた、私はただ、クザー又様に捨てられないために……」

「な、泣くでない、セレナよ」

「……わ、私、不安なのですわ。私、なんて……かわいくもないですし、クザー又様に飽きられてしまったらと……」

「儂がそなたを捨てるはずが無かるう」

「でも……でも、幾らそう言っていたいても不安で……。これは、私の弱さですわ。ですから、メルヒオル様の所で、クザー又様にお楽しみいただけるように、色々な事を覚えて来るつもりでしたの……」

言えば、一瞬でジジイの鼻の下が伸びた。
一体、何を妄想したのやら。

「ク、クザー又様？やっぱいいけませんか？」

「いや、少し儂が言い過ぎたようじゃのう。セレナよ」

「なんですの？」

「メルヒオルのところの行くのは許可してやるう」

「本当ですよ？」

「もちろんじゃ。ただし、条件が有るがのう」

ここまではまずは予想通り。

「条件とは？」

「まずは、必ず侍女を連れて行くこと。決してメルヒオルと2人きりにならぬ事、そして日暮れまでには帰って来る事じゃ。どうじゃ？約束出来るかの？」

思ったのより随分簡単な条件だな。

「判りましたわ、クザーヌ様。このセレナ、クザーヌ様とお約束は、決して破りませんわ」

「うむ。約束を守ってくれるのなら、儂も許可しようではないか」

よし。言質はとった。

メルヒオルも、私が枢機卿の『お気に入り』の愛人』である事を知っているのだ。馬鹿な真似はしないだろう。

「ありがとうございます、クザーヌ様」

さて、明日からは仕事も増えるな。

ナタリーエはジョアンナから侍女の仕事を教わっているし、イヴァンも命をはって町で頑張ってる。

アクティナスはロマリアへ行ってしまった。

皆、それぞれの場所で、自分にしか出来ない事を頑張っているのだ。

言い出しっぺの私が負ける訳にはいかない。

私も、明日から頑張らなくては。

その15

あーあ、外れか。

書類を見ながら溜め息を付く。

異端者がいると言う事だったから少しばかり期待していたのだが。

ここゲルマニアでも1、2ヶ月に1度程は異端者が出る。というか、誰かが異端者として訴えられる。

だが、その殆どは新教徒。

私が探しているのは同じ異端者でも、コルベールの様な技術者だ。

でも、殆どいないし、たまに見つかっても、冤罪か、このハルケギニアの既存の技術に毛が生えた程度の研究。

それに彼らは異端審問の過程で、殆どが自分の研究を捨てる事を始祖に誓って無罪となる。

まあ、ゲルマニアには狂信的な聖職者が少ないからだろうけど。これがロマリアやトリステインなど、始祖の教えとやらが骨の髄まで染み込んだお国柄では、処刑されてしまうのだろうが。

そもそもゲルマニアはジジイからして、狂信者じゃ無いからな。その辺は甘くなる。

やれやれ。どっかに転がって無いかなあ、技術系異端者。

コルベールがどこまで得がたい存在か良く分かる。と言うか、あれはチートだ。流石は原作キャラ。

1人産業革命は伊達じゃない。

うーん。ダメもとで声かけてみるか？でも、アカデミーって国家機関だよな。今、国から目をつけられる訳には…………。

でも。

ちらり、と手の中の報告書に目を落す。

以前にイヴァンに、最優先で調査しろと言った件が上がってきたのだ。

「折角佐々木武雄が未だ生きていると言っのに」

そう。ここハルケギニアに、原作で才人が使うゼロ戦を持込んだ人物、シエスタの曾祖父が、未だ生きているのだ。

今なら、ゼロ戦の使い方も教わる事が出来る。

それに何よりも、この世界にたった1人の同胞だ。会って見たい。

会うのはともかく、ゼロ戦関係はなあ。技術者いなくてはしようがないし。

この件は保留にしよう。

もしロマリア行きまでに見つからなければ、とりあえず佐々木氏にだけでも会いに行こう。

さて、次に向かわなくては。

「よろしいですか。この場合は潤んだ上目遣いがポイントになります。ですが、決してわざとらしくてはいけませんわ。あくまで自然に」

『水辺の誘い』の一室に娼婦達を集めて講義中。

最初の頃こそ、こんな子供に何を教わる事がある、と真面目に聞いている者は殆どいなかった。

その気持ちは痛い程良く分かる。

だが、私のアドバイスをダメで元々、と落ち目の娼婦が試し、見事その月の売り上げ上位者に名を連ねた。そこから彼女達の態度は一変、今や真剣その物だ。

必死にメモをとる者までいる。きつとナターリエのように、ある程度裕福な家の令嬢だったのが、没落して売られたのだろう。

「さて、今日の講義はここまでです。課題は明日までにしておいて下さいませ」

「「「ありがとうございます」」」

一斉に頭が下げられる。

「これでお終いでしたら、少々お茶を飲んでいかれませんこと?」

「先日、お客様から珍しいお茶をいただきましたの」

「よろしいのですか?」

「お嬢様のご都合がよろしければ、是非に」

華やかな美女に囲まれて、優雅なお茶の時間を過ごす。

彼女達は、流石に情報通で、下町のあれこれから貴族の事情まで、実に様々な話題で楽しませてくれる。

勿論、最初から彼女達とこんな関係が築けた訳じゃない。

きっかけは、ここに来だして10日程すぎた頃。

1人の娼婦が、講義中に倒れてしまったのだ。

私はジョアンナにすぐさま水メイジと秘薬を手配させ、治療させた。勿論、治療費用は私持ちで。

夜通し働いた上に、私の役に立ちそうも無い講義を受けさせ、体調を崩させてしまったせめてもの償いの気持ちだったのだが。

倒れた彼女は、ランクで言えば中の下。

年は18。整ってこそいるが、ただそれだけの印象の薄い顔立ちの上に、未だここに来て日が浅いものだから、技術も持っていない。

若さが衰えたら、あっという間に淘汰されてしまっただろう、そんな少女。

『水辺の誘い』が、いくらこの地区でも有数の娼館と言っても、全体から見ればそのレベルは上の下。

客層も、成り上がりの金だけは持っている下級貴族や、商人。

上級貴族御用達の最高級娼館には、一步も二歩も及ばない。

専用の水メイジも抱えていない。だからこの店では普通、娼婦が病気にかかれば、よほどの売れっ子で無い限り、低級の秘薬を与える。それで治らなくても、それ以上の治療を施してもらえるのは、店側が『それだけの価値あり』と見なしたものだ。

そつでない者は、見捨てられて死んでいく。

何故なら、彼女達は『商品』だから。商品に、その価値以上の投資をすることは出来ない。

もちろん、治療に使った代金は借金として店に返さなければならぬ。

だからこそ、私の行動は異常であり。

彼女達が私に心を開くのに十分な程の出来ごとだった。

確かにこの店にいる限りは、彼女達は皆、売り上げを競いあっている。

だからといって、同じ屋根の下で暮らす仲間が病に倒れるのを喜ぶ程、冷たい関係でもない。

いつかそれが自分の身にも襲いかかって来るかもしれないと思えば、尚の事。

そのことを、ナターリエから知らされてからは、定期的に水メイジを派遣して健康診断と、疾患の治療をさせている。もちろん、料金等は一切とらない。

なんだかなあ。ジジイに犯されていなければ、今ごろ私もこの中に居たのかもしれないと思えば、他人事とも思えないし。

いや、まあ、体売り物にしてる私の境遇も似た様な物だ。だけど、それでも、私には身体的にも、金銭的にも、彼女達以上の自由がある。できる限りの事はしたい。

まあ、これも偽善だけだね。

本当に何とかしたいなら、ジジイを通じてでも、メルヒオルを通じてでも、人身売買を無くす様に働きかけていくべきなのだ。

でも私はそれをしない。どうせ出来っこないとか、いくら規制しても、法の網を掻い潜って存続していくに決まってるとか。そうしたら、きつと今までよりもっと悲惨な事になるからとか。そんな言い訳をして。

私の目的のために彼女達は利用出来るから。

なんて汚い。

それを自覚しながらも、何も感じない。

あまつさえ、誰かにどうにかして貰おうなんて、甘ったれた事を考えるな、なんて思ってしまう。

私だって、確かに枢機卿と言う最高級の獲物に出会ったのは運もあるけど、彼を虜にしたのは、私が死ぬ程の努力を重ねたからだ、なんて。

そう、思ってしまう。

きつと前世の私なら、助けようと思った。

父と母が生きてた頃の私なら、社会を変えようとしたのかもしれない。

でも、私は動かない。

今の私は、彼女達の利用価値をはかり、味方につけた方が利益になるからと、どこかでそんな事を考えながら、彼女達の健康に気を配っている。

そして、そんな生き方を変えようとも思わないんだ。

父さん、母さん。あなた達が死の間際まで案じていた娘が、こんな人でなしでごめん。

きつとあの日死ぬべきは、私だった。

でも、もう変えられないから。

あなたが嘆くのを知っていても、引き返せないから。

きつと、お人好しなあなた達は、復讐なんてこれっぽっちも望んで無いのだろうけど。

でも、ごめんね。

私は、止める気は無いから。

止めたいんだったら、生き返ってよ、父さん、母さん。

あなた達のためではなく、私は私のために、奴等に復讐するでしよう。

そのために、どれほどの罪を犯したとしても。

その先に、何があるのかは、未だ見えないけれど。

総てが終わった時、その罪によって裁かれても。

あなた達の敵を討てるのならば、私は笑って、地獄に墜ちよう。

その16

最近の私は多忙を極めている。

ジジイの相手だの、娼館等の仕事だの、暇だ暇だと言っていた頃が
いつそ懐かしい程に忙しい。

趣味の薬草園もいじれない程だ。

特に娼館関連。メルヒオルのやつ、経営を全て私に任せると言った
のはどうやら本気だったらしい。
娼婦達の買い入れに、その彼女達の教育から経理、健康管理（これ
は私が始めた事だが）、諸問題への対応。全て私に投げっ放し。

本人は毎日女達と戯れている。

現代知識によって編み出された様々なプレイが、楽しくて楽しくて
仕方がないようだ。

見る度に、肌もツヤツヤして、とても元気そうである。

こちらは日暮れまでにとんでもないが仕事を終わらせきれず、屋敷
に帰ってから書類におわれて日々寝不足だと言っのに。

だが、その甲斐あって、娼館の売り上げは着実に伸びている。町の
方でも話題になっている様だし、広報活動にも余念はない。

今後もどんどん新しい試みを試すつもりだし、客足が衰える事は当
分無いだろう。

だがしかし。

頭の中に花でも咲いているのではないかと思う程、幸せに満ち溢れているメルヒオル様子を見る度、うっかり絞め殺したくなる衝動が沸いて来るのだが。

こちらが寝不足になるほど働いている間、奴が奴が淫行に耽つてい
ると思えば……………っ。

だけど、そのお陰で私がやりたい放題出来ているのもたしか。

今取り組んでいるのは、娼婦達への教育。

それも性技だけではなく、一流の講師を手配して、読み書き算盤、歌舞音曲等の教養から政治経済の知識まで。

そんじょそこらの貴族の令嬢には、太刀打ちが出来ない程の知性を身に付けさせる。

やっぱり、一流の客を掴もうと思ったら、女だって一流にならなければならぬ。

大貴族が利用するような最高級の店になろうと思えば、やはりこれくらいはしなくては。

それに知識は有って邪魔になる物では無いし。彼女達が娼婦から足を洗っても、ここで身に付けた知識は助けになるだろう。

ちなみにこの授業には私も参加させて貰っている。

特に力を入れているのが礼儀作法だ。

元々が農民の出だから、こういった事に疎いのだ。

両親が昔教えてくれた事もあるが、それもやはり使用人レベル。

前世の知識もあるにはあるが、細かい所がやはり違っている。基礎

からきちんと習うにこした事は無い。

他の歴史やなんかの知識は、自分でも学習可能だし、この幼さでは知らなくとも恥ずかしい事ではない。

だが作法は違う。

やはり立ち居振る舞いはその人の育ちが、最も滲み出る場所だ。

どんなに幼くても、それが優美ならば感嘆され、不作法なら眉をかめられる。

最近は大分マシになって来ただろう。

ジジイにも作法が美しくなったと言われたし。

何処に出ても恥ずかしくないだけのものを身に付けなくては。

ああ、やっと一通り終わった。これで少しは休憩をとれる。

手元のマジックアイテムに手をやり、紅茶を持って来るよう言い付けて大きく伸びをした。

……今ちよつと、人体から鳴ってはいけないような音が聞こえて来たような。

何が悲しくて、こんな子供のうちから凝りに悩ませられないのなら

ないんだ。

「失礼致します」

ナターリエがしずしずと入って来る。

すっかり侍女姿も板に付いてきた。儚げな雰囲気こそそのままだが、出会ったばかりの頃は憂いの色の濃かった表情は、今は幸せそうな色に満ちている。

イヴァンとは上手くいっているようで何より。

「セレナ様、どうぞ」

「ありがとう。」

ふわぁ、美味しい……………」

いれたての紅茶と、砂糖を贅沢に使ったケーキに舌鼓をうつ。

ああぁ、生き返るつつ。

そんな私に。

「セレナ様、もう少しお体を休めなくては。あまり根を詰められましたら、体調を崩してしまう事になりますよ?」

うわ。来たよ。最近顔を合わす度にこれを言われる。

今はナターリエが私の世話全般を受け持っているものだから、ほぼ一日中言われているわけだ。

「しょうがないだろ。やらないといけない事が山積みなんだから」

はあ、とナターリエの可憐な唇から溜め息が1つ零れ落ちる。

「ジョアンナさんが目を離れた途端にこれでは。」

私ではやはり力不足なのでしょうが」

「あ、それは違うよ、ナターリエ。私はジョアンナがいろいろがいが、好きな事を好きな時に好きなようにするから」

誰がいるとかいないとかは関係ない。私はやりたいようにやるのだ。

はあ、ともう一つ溜め息。

「そうですか……。ですが、何はともかく、本当にお体にはけは氣をつけて下さいませ」

「判ってるよ。私には寝込んでいる暇なんてないし」

そう。倒れている暇などない。万が一にも私が倒れてしまえば、今でさえ目を逸らしたくなる程の書類の山が、恐ろしい事になるにちがいない。

そんな恐怖体験はごめん被りたい。

ナターリエは未だ言い足りなさそうな顔をしていたが、私が再び書類に目をやるのを見ると、仕方なさそうに部屋から出ていく。

やれやれ、まさかナターリエがここまで世話焼き体質だったとは思

いもしなかった。

でも、実家が商家だった事を考えると、不思議じゃないのか？
イヴァンの話では、昔から子供好きだったと言っし。

ナターリエから逃げるためだけに手に取った書類を、元の場所に戻そうとして。

覚えの有る名に目を止めた。

「あれ……………」

ああ、この書類はジョアンナからの物だったのか。

ジョアンナは今、一時的に私の侍女の仕事から外れて、別の事をし
て貰っている。

情報網を構築しようと思えば、まずは情報源を確保しなければなら
ない。

このハルケギニアにはラジオもテレビもネットも無いので、この場
合、情報源とは人に限られる事となる。

と言う事は、有る程度は人と直接接触しなくてはいけないわけで。
さて、私の見た目は幼女である。見た目だけでなく、実際、7才の
幼児であるのだ。精神年齢は30をとうに越しているが。

この子供の姿には、確かに利点もある。
相手は油断してくれるし、何をしても怪しまれる事はほとんど無い
し。

だが、その反面、大きな短所も付いて来る。

まず、大人にはほぼ相手にされない。こちらがどんな情報を持っていたとしても、どれだけの報酬を提示しようとも、姿が幼女では、それだけで誰もまともに取り合ってはくれない。

想像してみろ。

いきなり出て来た、全く見も知らぬ幼女に、

『貴方に仕事を頼みたい。もちろん十分な報酬は約束しよう』

こんな事を言われて頷く人間がいるか？

答はノーだ。というか、いたらそいつの神経を疑う。

対等な立場ですら話す事が出来ない。

それが当たり前なのだが。

下手に動けばジジイに注進される事になりかねない。

それでは、全てが台無しになってしまう。

でもこのままでは、いつまで経っても私自身の勢力を築くことができない。

いつそ誰かの弱みを握って、傀儡に仕立てあげようか、等と考えていた時。

それを知ったジョアンナが、自分がやると立候補してきたのだ。

あの時は本当に驚いた。

もちろん、最初は反対した。というか、今だって本当は反対なのだ。やはり危険もあるわけだから。

でも、あの頑固なジョアンナに、私が敵うはずも無い。

大体、ジョアンナの提案は、正に私にとって渡りに船だったのだ。

誰かの弱みを握って動かすにしても、それは危うい。

何かで均衡が崩れれば、私に牙を剥く事になりかねない。

やはり情報という、切り札になり得る物を扱うのだから、気心の知れた、私の目に入る範囲にいる人材にやって貰うにこした事はない。

その点、ジョアンナなら私を裏切らないだろうし、何か有った時の報告もしやすい。

何せ私の侍女だ。私の所に来て、何一つおかしい事がないのだから。

理想的な配置だった。

こうして、ジョアンナは今、私が手に入れた情報を元に様々な工作を行っている。

私の側にいないのもそのためだ。

1日に1度、報告も兼ねて話しているが、どうやらジョアンナはこの手の仕事に適性があつたらしい。

毎日がとても楽しそうなのだ。

元々頭の回転も早いから、今は思う存分その能力を発揮できて、充

実しているのだろう。

恐らく私の数倍の仕事をこなしているだろうが、忙しさも全く苦になっていないようだ。

やれやれ。未だ子供の体だと言う事を差し引いても、日々疲れ果てている己が軟弱に思えて来るな。

ふと見れば、窓の外は夜に染まりはじめている。

ジジイが帰ってたら、また相手をしなくてはならない。たとえどんなに疲れていても。

だがそれまでにはまだ多少時間が有りそうだ。暫く寝て、少しでも体を休めておく事にしよう。

その17

テオドール・ド・ナーディスト。

トリステイン辺境、森を切り開いて開拓した領地を持つ、ナーディスト子爵家の第4子としてこの世に生を受ける。

軍人の家系であるナーディスト子爵家で、厳しくはあるものの何不自由ない幼少時代を過ごした。

森林の辺に位置するナーディスト領には、亜人が多く出る。

その亜人を退治し、領内を安定させる事は、ナーディスト子爵家の重大な責務であった。

傭兵を募り大規模な亜人狩りを行うのもままある事。

テオドールが10才になったある日、1つ上の兄と共に亜人狩りに同行することとなった。

もちろん、誰1人として彼らを戦力として考えておらず、ただたんに、彼の父親の「そろそろ戦いの空気という物を知っていても良い頃だ」という、いかにもな軍人らしい考えの元に、いわば『見学者』として付いて行ったのだ。

だが、そこで彼は運命の出会いをはたす。

全てを拒絶するような、冷たく冴え冴えとしたどこか危うげな雰囲気。

鋭角的でありながら、どこかなまめかしいその姿。

武骨な手の中にすっぽりと納まる華奢な姿態は、庇護欲すら沸き起

こる程。

攻撃と共に進む叫びは、官能すら感じさせる。

その姿を見るだけで、胸の奥からせり上がって来る熱い塊。それは間違いなく、彼が生まれて始めて感じる欲情だった。

彼は一目でソレ 傭兵の手にした銃の虜となった。

どこからどう見ても紛う事なき変態である。

私は鉄格子の向こう、イツちゃった目をしながら『運命の出会い』を語る男を見ていた。

.....。

何がどうしてこうなった。

「やった、見つけた」

思わず声が出ていた。
ついに、ついに見つけた。

頬が勝手に緩むのを押さえ切れない。
しょうがないだろ？

だつてついに見つけたんだ。

テオドール・ド・ナーディスト。

書類に依れば、トリステインの貴族の出。

13才の時に実家を出奔。ゲルマニアに渡り、あちこちを転々としながら銃等の平民の使う武器を作り続ける。

森の中に仕掛けた『踏むと爆発する地中式爆弾』によって、狩りに来ていた貴族を負傷させ、異端者として告発を受ける。

教会側のあらゆる尋問や、始祖へ研究を捨てる事を誓うのも拒絶し、貴族という事も鑑みて、ウィンドボナに移送後、クザーヌ立ち会いの元での処刑が決まった。

何て素晴らしい。

彼こそ私が求めていた人材だ。

独力で地雷を作り上げる発想。

『地中式爆弾』の報告を見る限り、原始的ではあるものの、恐らく信管に類する物を作り上げたその技術力。

そして命がかかってなお曲げなかった、研究への思い。

正に理想的だ。

絶対に手に入れて見せる。

さて。

まずはジジイをだまぐらかすか。

『願い事はベットの途中で』

バカの一つ覚えのようだが、一番効果があるのもまた事実。

「クザー又様。異端者が告発されたのですってね？何でも始祖に逆らう異端の技術を研究しているとか」

「おお、そんな事もあったのう。それがどうかしたかの？」

何の興味もなさそうな声。

この男は俗物だ。

教会の頂点に近い地位に付きながら、始祖への信仰心は薄い。

たとえば異端者だって、それ相応の見返りがあれば見逃す程に。

「その方、私に預けていただけませんか？」

「……………、なんじゃと？」

「クザー又様。私は、何の力も持たない平民でございます」

俯いて、今にも泣きそうな程の愁いを漂わせながら言えば、ジジイから狼狽した様子が見て取れる。

そこからはもうこちらの物。

身を守る力がほしいだとか、迷惑をかけたくないだとか。

私でも使う事の出来る武器を開発させたい。

そう切々と訴えれば。

「そうか、そうか。ならば、あ奴はそなたに任せようかの」

『愛人』の気を引きたい奴がそう言うのは、決まり切った事だった。

そうして、ウインドボナに移送され、大聖堂の地下に収容された『異端者』に会いに来たのだが。

最初は何を言ってもだんまりだった。

だが、私が彼の研究 『地雷』の事を褒めれば空気は一変。

滔々と、『運命の出会い（あくまで彼視点）』を、頬を上気させ、明らかにイツちゃった目で語りだし、今に至る。

見なかった事にして帰っても良いだろうか。

つかさあ。

銃に発情する10才児って…………。

私じゃなくても引くだろ。

まさかジジイやメルヒオル以上の変態を目にする事になるとは。人生とは分からない物だ。

というか、私の周り、妙に変態の多い気が。

……。やはりこの男、私の精神安定のためにも処刑させるか。

だがしかし。

変態とはいえ いや、変態だからこそ、彼の才能と技術力は確かで。

おまけに、コルベールのように、人々の暮らしを良くしたいだとか、役に立ちたいといった理想のために研究しているわけではなく、全てはひたすら『私の最愛の人（銃）』のため。
そのためならば、どんな事もするだろう。

いわゆる『マッドサイエンティスト』タイプの研究者だ。

ある意味ではこの上なく厄介だが、上手くコントロール出来れば、兵器の開発もためらわないだろうし、大きな力になるだろう。

それに、銃だけでなく、いわゆる『絡繰り』全般に興味があるようだし。

少し いやだいぶ かなり、否、凄まじく変態だが、そこに目を瞑りさえすれば、というか目を瞑る事ができれば、これ以上無い程の人材である。

そう。目を瞑ることが出来るのなら。

この男から変態を取ったら何一つ残らないような気がするのだが。

『理想の銃』について語りながら悶える大の男。
はつきり言って気持ち悪い。

こいつはこのまま殺した方が私の為ではないだろうか。

割りと真剣にそう思ったが。

彼程の技術力を持つ人間はそうそう転がってないだろうし。

しかたがないか。

「ねえ、ちょっと、君、テオドル・ド・ナーディスト！」

「ナーディストの名は捨てた。今の僕はただのテオドルだ」

へえ。実家を勘当されたみたいだって書類に書いてあったけど、本当だったんだ。

まあ、あのプライドが高く平民を見下しているトリスティン貴族にとって、自分の息子が『平民の扱う下賤な』武器に夢中なのは、とてもではないが許せる事ではないのだろう。

バカバカしい。

いや、だがその愚かな矜持のお陰で、この男は実家と縁を切り、ゲルマニアに渡って私と出会うことになった。

少しでも彼と、彼の技術の価値が分かるのなら、決して手放さないだろうに。

少くとも私なら、どんな手を使ってもつなぎ止める。

ならば私はその愚かさ感謝するべきなのだろうか？
いずれ彼らを滅ぼす、その愚かさ。

「あつそ。じゃ、テオドール」

「なんだ」

「君を助けてあげよう。ここから出してあげる」

不審そうな目。

ふうん。

普通なら、処刑が決まっている場所から助け出してやるって言えば、もつとよろこんで感謝するものだと思うけど。

「そんな事をして、あなたに何の得がある」

その言葉はとりあえず無視して。

「君の研究に援助もしてやるよ」

「本当に!？」

おー。一気に反応が変わったな。

まああちこちで借金してみたいだし。

研究っていうのは金かかる割りに、よっぽど上手くしないと金が入って来るような事はほとんど無いからな。

「ただし条件が有る」

「なに!？」

「私の依頼する物や事を研究開発すること。そこで結果を出してくれるなら、大抵の事には目を瞑ってやるよ。研究費用だってだしてやる」

「あなたの依頼？」

「なに。君がつまらないと思うような物ではない。むしろ君が絶対に興味を引かれるような物だ」

ゼロ戦とかね。

そうだ。今度のロマリア行きには彼も連れて行くことにしよう。もしかしたら『場違いな工芸品』を見る事が出来るかもしれないのだし。

「それなら、僕で良いのならよこんで」

「そうか。では君には私の監視下で生活して貰うことになる。といっても、君の自由を損なうことはない。ただし。」

もし逃げ出すような事があれば、聖堂騎士をけしかける事になるかもしれないから、決して逃げないように」

これは脅しじゃなく、彼が告発された異端者である以上、ほとぼりが冷めるまではどうしようも無い措置なのだ。

「分かってる。それから、ありがとう」

.....。

「何の事？」

くすり、と笑って。

「監視下つて、要するに僕を守ってくれるつもりなんでしょう？」

気付いていたのか。

彼が傷を負わせたのは、ゲルマニアの大貴族と呼ばれる家の者。
もし生きている事が分かれれば、暗殺されかねない。

というか、銃に関わりのない時は普通……否、かなり優秀なんだな。

勿体ないと言うか、何と言うか。

というか、天才と言うものはここまで突き抜けているものなのだろうか。

それともここまで突き抜けているからこそ、天才たりえるのか。

「君が私の役に立ってくれる限り、私は君に対してあらゆる援助を惜しまない」

「あなたが僕を助け、守ってくれると言うのなら、僕はあなたの求める全てを造り出して捧げましょう」

交渉成立。

鉄格子の扉の鍵を開ける。

出て来た彼に腕を差し出す。

「これからよろしく」

「よろしくおねがいします」

私たちは、しっかりと握手を交わした。

「杖は直ぐに返す。

あと、君の荷物は全て取り寄せてある。後で確認してくれ。足りないものがあれば何でも言ってくれて構わない。できる限り用意するから」

「はい」

「家が用意出来るまで、君には私と一緒に住んで貰う。ただしそこでは研究も実験も一切禁止。家の準備が整うまで待っていてくれ」

まさか枢機卿の屋敷で異端の研究をする訳にもいかない。

彼の研究は火薬を扱う物も多いようだし、万が一にも屋敷を爆破でました日には……。

笑えない事になるのだけは確実だ。

「判りました」

「よし、じゃあ、こんな暗いところからはとっと出ようか」

「はい」

私と彼

テオドールは、共に地下からの出口へと歩きだした。

その18

豪華なシャンデリアから光が降り注ぎ、色とりどりの衣服に身を包んだ男女が行き交う。

『光の国』ロマリアの名に相応しい、それは光景だった。

ただそれだけを、切り取るのならば。

ウィンドボナを出て、ツエルプストー領を抜け、トリステインゆ經由してからガリア、そしてロマリアへ。

そのまま素直にガリアに入ってからロマリアに行った方が良いのでは？

そう思ったが、何でもトリステインに派遣されている枢機卿とジジイは友人らしい。

今は互いにめったに会えるような立場ではないので、このような時を利用して会っている、そうだ。

なるほど。だからあの時 初めて会った日に ラ・ヴァリエール領にいたのか。

それにしても、ロマリアとは素晴らしい国だ。

窓硝子にうつる私自身の唇が嘲笑を形どって歪む。

「うん？セレナや、何か面白い物でもあったのかのう？」

「何でもございませんわ、クザーヌ様。旅が楽しくて、少々浮かれているだけですわ」

「そうか、そうか。旅は楽しいか」

「はい。何よりも、いつもはお仕事でお忙しいクザーヌ様と、ずっと一緒にいられますもの」

いかにも子供らしく、無邪気に微笑んで言ってやれば。

「そ、そうか。まあ、余り頻繁には言えぬが、これからもなるべく色々な所に連れて行ってやろう」

「本当ですか？」

「ありがとうございます、クザーヌ様。とても楽しみですわ」

トリステインで友人の枢機卿の屋敷で一泊、ガリアを3日かけて通り過ぎ、ロマリアに入った。

そこで私が見たのは、道端にたむろする貧民や孤児。今にも崩れそうな程に痛み切った家々。

そしてそれとは対照的なきらびやかな貴族街や大聖堂。

民は貧困に喘ぎ、貴族や一部の神官は彼らから搾り取った金で贅沢にふける。

そこに広がっていたのは、『光の国』とは名ばかりの、トリステイン以上に差別と格差がまかり通った世界。

そんな貴族街でも、一際立派な館が立ち並ぶ一角に、私たちの目的地はあった。

うわ、凄いな。流石宗教国家の枢機卿の屋敷。

ジジイの本宅は、ゲルマニアで暮らしている屋敷以上に大きく、豪華なものだった。

ロマリアに到着した翌日には、その屋敷で大々的な夜会が開かれた。日が暮れるにつれ、続々と集まって来る人々。

窓から列をなす馬車の数々を見下ろす。

ん。

というか。

先ほどから思っていたのだが。

何か、やけに人が多くないか？

いくらジジイが権力者だとは言っても、当代教皇とのその座を巡って争い、負けてゲルマニアに島流しも同然に送り出されたのではなかったのか？

権力争いのライバルの力は、地位を継いだ方に取っては目障りこの上ない物だ。

己の権力基盤を揺るがしかねないと、様々な手で奪い去ろうとする物だと思っただが。

周りの奴等も、そういう最高権力者の意向に従って距離を置くものじゃないのか？

それなのに、なんだ、この人の多さは。

身分の高い男女が、ひっきりなしに出入りするホール。

如何にもな偉そうな格好をして、ジジイの元に挨拶に来る奴等の列が途切れることはない。

今まで威張りくさっていた奴等が、ジジイの前に出た途端に、借りて来た猫のように礼儀正しくなり、少しでも気に入られようと媚びを売り出すのは見ていて面白い。

だが。

どうやらジジイは未だに強大な権力を所持しているようだ。

ロマリアに帰ってきた早々に、自分の支持者達を集めて夜会を開ける程。

つまりは、教皇もおいそれとは手出し出来ない程の権力を持っているのだということか。

勝手に『当代教皇とのその座を巡る権力争いに負けてゲルマニアに飛ばされた』と思っていたのだが、どうやらそれだけではないようです。

良いね。好奇心が刺激されるよ。

ちよつとばかり、調べてみようか。

大広間、着飾った紳士淑女の間をあっちに行ったり、こっちに來たり。

うゝん。この子供の姿では踊れもしない。

あとは食べるくらいか？

幸い、料理はかなり旨い。コックの腕は相当良いらしい。

ゲルマニアでは食べたことのないような料理も数多く出される。

だが、私が料理に舌鼓を打っていると、必ずジジイに媚びを売りたい奴等が、下心みえみえの笑みを浮かべて話しかけて來るのだ。

はつきり言つて、食事を邪魔される事程気に食わないことはない。

だが、まさか怒り出す訳にも、罵る訳にもいかない。

出来ることと言えば、奴等と同じように愛想笑いを浮かべて猫を被つて、話を合わせるくらい。

あああ、鬱陶しい。

食事くらい静かに食べさせろよ。

美味しいモノは美味しく食べたいんだよ、私はさあ。

そんないかにもな打算に満ちた目をされると、ご飯が不味くなるじゃないか。

逃げてても逃げてても追いかけて來る奴等から逃れようと、人気の無い隅の方の柱の影に隠れると。

声がする。

誰だ、こんな所で。

おや？これは

「それを考えれば、やはり明日は、教皇のところに挨拶に行かねばなるまいな。先ほど使者も来たことであるしな」

やはり。ジジイの声だったか。

「クザー又様を呼び付けるとは、あ奴　　ホルツアナドの奴も随分偉くなったモノですな」

もう1人は誰だ？

言葉の様子ではどうやらクザー又の派閥に属している神官だとは分かるのだが。

「これ。仮にも教皇に向かって、何と言う事を」

嗜める声が笑っているぞ、ジジイ。

「何が教皇ですか。あれは、たまたまあのホルツアナドの奴の運が善かっただけでしょ」

運、だって？

「あの時、クザー又様はガリアとの折衝でとてもではありませんが、手が離せなかったではありませんか。その隙にあの小僧が教皇の座をかすめ取って。

大体、先代様がお決めたになっていた後継者はあなた様の方でしたのに」

「巡り合わせが悪かったと言う事じゃろう」

「しかし、先代様の御崩御が、後少しでもずれていれば。そもそも、先代様はあの日お倒れになるまではお元気でいらしたのです。それが、あのタイミングで体調をお崩しに　　やはり、」

「やめい。それは有り得ぬ事だと結論が出たじゃろうが。恐れ多くも、先代様の御遺体にディテクト・マジックまでかけさせていただいたのじゃぞ。それでも何も起こらなんだ」

ジジイの声が一変、厳しいものになる。

「…………。判りました。詮無き事を申しました。申し訳ございません」

「良い。じゃが、暫くは言動に注意を払うがいい」

先ほどの話が教皇派の耳に入ればどうなるか分からない。

そう氣遣われた男は、心からの感謝をのべてその場を去って行った。

ふうん。以外と兄貴肌なのか、このジジイ。

でも、だいぶん分かって来た。

本来なら当代教皇の座にはジジイが座っているはずだったのだろう。だが、突然の先代の死にロマリアは混乱。

次期教皇と見なされていたガリアとの外交に追われていたジジイは、その問題で手が離せず、結果的に『教皇』の座を逃したと言う事か。

勢力自体はジジイの方が有力だったのだろうな。

だから、今でも　結果として負けた形になっている今でさえ、これ程までに力を握っているのだろう。支持者も相当いるみたいだし。

……。

このジジイ、当代教皇にとってはさぞかし腹立たしいんだろうな。至高の座に着きながらも、自分以上に力があると、自他ともに認めなければいけない存在があるというのは。

それに、聞いた限りでは、暗殺したのではないかと疑われたみたいだし。

この権威主義者たちが、ディテクト・マジックを遺体にかけて言うのだから、相当疑われていたのだろう。

つまりは、彼が『教皇』になれる可能性は、本来ならばそれ程に低かったと言っ事。

……。

当代、会ってみたいな。

ジジイへの反発だとか憎しみだとか劣等感だとか。多分あるだろう。そっというもの、上手く利用する術は無いだろうか？

その19

フラフラと、人目につかない場所を選びながら大広間を徘徊しながら人々の噂に聞き耳を立てる。

その殆どは下らないゴシップだった。

なかなかおもしろい話題はないか。

そろそろジジイのところに戻るか。

踵を返しかけたとき。

「それではやはり、オルレアン公の方が？」

オルレアン公。

『無能王』ジョゼフの弟で12才にしてスクウェアに到達した天才。原作ではジョゼフによって暗殺され、彼が狂気の淵へと転がり落ちるきっかけとなった存在。

こちらでも、原作と変わらずにガリア国内はオルレアン公派とジョゼフ派に分かれているらしい。

でもなあ。あの兄弟はなあ。

本来の兄弟仲じたいは悪くないんだよな。

ただお互いに相手に対する劣等感や、嫉妬でがんじがらめになっているだけで。

可愛さ余って……、って事で余計拗れてるんだろうけど。

何か一つ、切っ掛けさえあれば仲は修復出来そうなのだが。

実際、原作でもシャルルの内心知ったジョゼフは速攻で改心してたし。

いやもう本当に、そこまでしといてそのあっさりぶりはどうなのかと、突っ込みをいれなくなる程に簡単に。

というか。私はシャルルのほうが王に向いてると思うんだよな。

確かにジョゼフは、恐らくハルケギニアでも1、2を争う程に優秀だが、王向きでは無いと思うのだ。

むしろ、本人が原作で言っていたように、シャルルの下で大臣なり宰相なりしているのがあっているだろう。

本人の性質的にも、陽の当たる場所で王サマしてるよりも、陰でこそそ謀略練ってる方が楽しいだろうし。

それに、ジョゼフには王として国を良くしていこうとか、そう言う気がまるで無い。

総てシャルルありきで

だからこそ、シャルルを殺した後、国も民も顧みず、面白ければそれでいいと世界すら滅ぼそうとしたのだ。

そんな彼に王としての資質があるとは、私には思えない。

国を想えない者に　　国などどうでもいいと思っている者に、玉座につく資格は無い。

そんな王を戴く民が可哀相だ。

金を使って裏工作していたとは言え、シャルルの方がなんぼかマシだろう。

というかなあ。

あの狂王止められるのって、実質シャルルだけだし。

暴走すると何しでかすかわかんないしなあ。しかも下手に優秀なもんだから被害が馬鹿にならない。

実際、ハルケギニア中が巻き込まれた戦乱 原作のゴタゴタの大半はあの人の差金なわけで。

シャルルには弟として責任を持って管理していただきたいものだ。

それに。

復讐という目的がある私は、不安要素はなるべく排除したい。

私が国をどうこう出来るレベルの實力を付けて、行動を開始したとして。

原作のジョゼフ、あの『無能王』は、絶対に興味をもってちよつかにかけて来るに決まっている。

私ははつきり言ってあの狂才と謀略勝負したくない。

絶対勝てない。

いやだよ。

虚無という反則技にミヨズニトニルン、加えてあの頭脳。

おまけにあらゆるものに執着ないわ、面白ければそれで良いわ。一体何をしでかすか。

ヴィットーリオと違って明確な目的も無いから、その行動を予測する事も、何らかの取引を持ち掛ける事も出来ない。

そんな危険物はとつと鎖に繋いでしまうに限る。

それに、上手くすれば恩売れるだろうし。

恐らくは、ヴィットーリオとタメを張れる人材だ。

敵にはしたくない。

味方になってくれるなら。

やっぱ、なんか嫌だ。

アレ味方にしたらいらん所で疲れそう。

ええい、とにかくアレが敵に回らなければ良いんだ。

そのためにガリア王家のゴタゴタ、何とかしたいものだが……。

どうにかする方法はさっぱり思い付かない。

まず彼らとは会った事すらないわけで。

会えたところでなあ。私に何ができる？

というか、要はあの2人の問題で、他人が口出しできるようなモノじゃないんだよな。

いつそ素直になって一度互いに対する思いをぶちまけちゃえば解決するんだけどな。

どうしようねえ。

ん？

ジジイが手を振って……ああ、来いって事か。

とりあえずガリア関連は保留にしておこう。

「どうかなさいましたの、クザーヌ様」

「ああ、そなたを一通り紹介しておこうと思っているの」
なるほど。

ジジイの派閥の幹部やら友人やらに紹介される。

勿論私は、ジジイの遠縁の娘として。

まあ、それが嘘だと言う事は皆分かってるのだろうけど。

そう言えば、さっき話しかけて来た奴等もそうだが、なんで皆私の顔の左側を……………。

ああ、そう言えば左目には眼帯をしているのだったか。
もうすっかり当たり前になっていたから忘れてたけど。

それに、今日のドレスと同じ緋色に宝石やら刺繍やらで派手な物だから、目立ってるだろうし。人目を引くのは仕方が無いか。

入れ替わり立ち替わり、20人程と挨拶を交わしただろうか。

いい加減疲れて来たしな。でも人も随分減って来たし、そろそろ終わるか？

ああ、まだ来たよ。

うんざりで見つめる先には、まだ若い男と、赤子を抱いた女。

ん？あの女の方、どこかで…………。

「お久し振りでございます。ゲルジオ枢機卿」

「おお、セレヴァレのところの倅か」

セレヴァレ？セレヴァレって……………まさか！？

「その節は大変お世話になりました。お礼も申せませんで」

「なに。そなたの父親には儂も世話になったからのう。

ああ、紹介を忘れておったの。これがセレナじゃ。儂の遠縁の娘でな。両親が死んでもうたので儂が引き取ったのじゃ」

「お初にお目にかかります。セレナと申します」

「これはこれはご丁寧に。お嬢様。

私の名は、ステファノ・セレヴァレ。こちらは妻のヴィットーリアと、息子のヴィットーリオと申します」

「よろしくお願いいたしますね、お嬢様」

2人に微笑んでそう言われて。

「……………」

というか、やっぱりかよ。

この母親の腕の中で、スヤスヤ安心して眠っている赤ん坊が、聖戦を発動する後の聖エイジス32世か。

そして、大切そうに赤ん坊を抱くこの人は、息子の力に怯えてロマリアをでて新教徒となり、そして数年の内にダングルテールで惨殺される。

原作キャラとの遭遇はこれで3人目。

でもさあ、よりにもよって、この2人って……。

どうしろって言うのさ。

あなたの息子は虚無の使い手ですよ、とか言ってみるか？証拠もないのに？一笑にふされて終わりだろう。

ダングルテール事件をほのめかす。

同じ理由で信じられるわけが無い。

どう考えても怪しい。

それにまだ改宗しても無いだろうからなあ。

新教徒になって新教徒狩りで殺されますとか、下手しなくても侮辱していると取られるだろうし。

息子さんを大事にして、どんな事があっても信じてあげて下さいとか言ってみる？

慈愛に満ちた目でヴィットーリオを見てるところからすると、言われなくてもそのつもりだろうな。

少くとも、今はまだ。

どうする？どうしたらいい？

……だめだ。

何も思い付かない。

とうかさあ。新教徒になるにせよ、息子の事にせよ、初対面の、それも子供の私は何言っても届かないだろ。せめて、少しでも親しければまた違ったのだろうが。

「ヴィットーリオも大きくなったのう」

「ありがたくも猊下が名前を付けて下さいましたお陰か、大きな病気もせずに育ちまして」

ジジイが名付け親だと？

ちょっと苦しいが、何とか繋がりができるか？

「クザーヌ様がお名前をお付けになりましたの？」

「ああ。ステーファノの父親は僕の従兄弟でな。それに子供の頃から一緒に遊び回ったものだしなの」

「そうなんですか？」

へへえ？それは初耳。と言う事は、ジジイとヴィットーリオは親戚って事か。

階級社会で同じ国の上級貴族となれば、血が繋がっているのはむしろ当然か。

とはいえ、これは使えそうだ。

「赤ちゃん、可愛らしいですね」

「抱っこしてみますか？」

「よろしいのですか？」

「勿論でございます」

ヴィットーリアが、私の腕にそっと赤ん坊を抱かせる。

というか、間近で見るとやっぱり凄まじい美人だな。

……。君も将来は彼女に瓜二つの美形になるのか、ヴィットーリオよ。

何かこう、私よりよっぽど綺麗になるのだろうか、なんて思えば、羨ましいというか。なんと言うか。

暫く抱かせてもらってから、彼らは離れて行った。

いやしかし。まさかヴィットーリオを抱っこする事になるとは。想像もしていなかった。

だけど、お陰で。

「ヴィットーリオ君可愛かったですわ。また抱っこしたい……………」

「そうかそうか。」

気に入ったのであればまた会うがよい。

なに、どうせロマリアには一カ月はおるのだ。ヴィットーリアとヴィットーリオは時間はあるであろうし、屋敷に招待するなり、向こうに遊びに行くなりすればよい」

「よろしいのですの？」

「セレナが楽しいのであればかまわぬよ。それに儂の方も色々と仕事があるでな。そなたに寂しい思いをさせてしまう事になるやもしれぬでな。」

ヴィットーリオ達と会えば少しは気持ちも紛れよう」

流石に相手が赤ん坊と女性では嫉妬はしないか。

「ありがとうございます、クザーヌ様」

ロマリアを去るまで後一カ月か……。

それまでに何か良い案を思い付けば良いのだが。

当面はヴィットーリオとヴィットーリオとの仲を深めるか。

目標は、ヴィットーリアがヴィットーリアの力に怯えてる事を相談できるくらい……、は無理だとしても、せめて文通が出来るぐらいには仲良くなりたい。

来年　もしジジイが来年まで私に飽きていなければ、だが

ロマリアに来る時までに文通で親しくなつて。実際に会って、を繰り返せば、いつかは相談してくれるようになるはず。

果たしてそれで間に合うかどうかはともかく。

出奔が止められない事だとしても、せめてダングルテールではなく、ゲルマニアの私の所を頼って逃げて来てくれれば。

そうすれば少くとも彼女は助ける事が出来る。

ダングルテールの他の住民には申し訳ないが。

でも、出会ってしまった人の、分かっている最悪の未来を見て見ぬ振りをするのはさすがになあ。

これがどこからどう見ても極悪人だとか、彼女を助ければ沢山の人
が死ぬ事になるとかならともかく、ヴィットーリアは原作を見た限
りとても良い人だし。

実際に優しそうな人だったしなあ。

いやまあ、彼女がダングルテールに行かないならアニエスとコルベ
ールはどうなる、と思わないでもないのだが。

それでも。

たとえこれでその2人の運命が大きく歪む事になっても。

彼女を見殺しにするのはちょっと、と思ってしまった。

そのためにも、明日から頑張って接近してみるとしましょうか。

たとえその決断が、歴史を変える事に繋がるのだとしても。

だって私は、トリスティンに栄光をもたらす歴史に従う気など、最
初から有りはしないのだから。

その20

踏めば足首まで埋もれてしまいそうな絨毯は、精緻な模様が織り込まれている。

目を上げれば美しい天井画。

置いてある家具の細工と言い風格と言い、恐らくは超一流の職人が渾身の技で持って作り上げたのだろう。

売ればいったいいくらになるのか、想像もつかない。

目の前のテーブルには、前世でいうヴェネツィア・ガラスのような美しい硝子細工の花器に大輪の花々がいけられ。

ジジイの屋敷も凄かったが、ここはなんと言うか、ケタが違う。

流石はハルケギニアで6000年続いた宗教の、その総本山。

教皇に挨拶に行くと言うジジイに連れて来られたのだ。だが奴は先程この広く豪華な控え室に、私1人残して謁見の間へと行ってしまった。

後で私の事も教皇に会わせてやるとか言ってたが、はっきり言って会いたくない。

面倒事は嫌いだし。

だいたい私は、ブリミル教が大っ嫌いだと言うのに。

そんな事言えないから黙って笑つといたが。

ああ、でもやっぱりこの部屋はとても綺麗だ。

ぐるり。と改めて部屋を見渡して、感嘆の溜め息が漏れる。

部屋全体が、まるで一つの芸術作品のよう。

座っていた長椅子から滑り降りて、壁際の飾り棚やかけられている絵画を鑑賞する。

前世でも現世でも、芸術性が優れているとはいいたい。

だが、そんな私にも、ここにある物が素晴らしい出来栄であると言う事だけはわかる。

やっぱり芸術関連の教養も磨いた方がいいだろうな。

今は私1人だから良いが、これが誰かと一緒に鑑賞するとなった時に、『これは誰某の作品ですね』とか、『何時代の物です』とか『どこそこの品だ』とか言う会話について行けなかったら、とんでもない恥をかくことになるかもしれない。

しっかり勉強しておかねば。

ん？なんだ？この扉は。

私の入って来た、ちょうど反対側の壁に、同じような扉。

この扉の奥には、何があるんだろう？

開けて良いだろうか。ジジイはこの部屋の中だったら好きにしているとか言ってたな。

それに、人が、恐らくは頻繁に入るような場所に重要な物は無いだろうし、危険な仕掛けなんてしないだろ。

見つかりそうになったら逃げれば良いのだ。それに見つかった所で私の外見は幼女なんだ。よっぽどマズい事が起きなければ大丈夫だろ。

よし、開けて見よう。

後から考えれば、この時の私のテンションはエラく高かった。ノリと勢いだけで行動を決めるなんて、両親が死んでからはほとんど無かったというのに。

ロマリアまでの長旅に、慣れない夜会、ジジイの相手をする疲労と、この部屋の内装。

もう一度言おう。

この時の私はおかしかったのだ、と。

私の庇護者であるジジイの敵の本拠地に来ている以上、いつもより更に慎重にならなければいけなかったのに。それなのに。

ただ好奇心の赴くままに、扉に手をかけた。

……………なんだ。

開けた先は、ただの廊下。そういえばこの部屋、窓無いな。なるほど、2本の廊下に挟まれるようにしてあるわけか。

ん。でも、私が通って来た廊下も色々飾られてたけど、ここは輪をかけて凄いやつな。

！

やばい、足音……。

誰かこっちに来る。

部屋の中に引っ込み、扉が完全に閉まる、その直前に。

「……………だか……………」

微かに聞こえて来る声。

それにほんの少しだけ考えて。

せつかく綺麗に咲いてるのにごめん。後ここ掃除する人もすまん。

机の前に引き返し、花器をひっくり返して水と花を捨てる。

空っぽになった花瓶をドアに当て、耳を付けた。

さすがに扉が分厚くて聞こえにくい。

『……………本当に、大丈夫なのだろうな』

『ええ。気付かれた様子はありません。もっとも、アレはディテクト・マジックにも反応致しません故、気付かれる筈も御座いません』

……………。なんだ？この会話……………。

『だが万が一にも……………疑惑すら持たれる訳にはいかぬのだ。ほんの少しでも疑いを持たれば……………。私は破滅だ！！』

『落ち着いて下さいませ。ゲルジオ枢機卿の前で取り乱した様子を見せる訳には参りませぬ。』

さあ、何もご心配はいりませんから、……………聖下』

聖下、だと？

ではこの扉の向こうにいるのは、教皇。
もう1人は誰だ………？

っと、もう聞こえないか。

花瓶を机のそばに倒し、暫く時間をおいてから人を呼んで片付けさせる。

しかし、さっきの会話は………。

内容的には、先代の暗殺の事だろう。
やっぱり現教皇が暗殺したのか。

それはひとまず置いておくにしても、だ。

どうも、妙だ。

いったいどうやって暗殺した？

クザーヌ・ゲルジオ枢機卿は、私の前ではただのエロジジイだし、
基本的に俗物だが、有能な政治家ではある。

そのジジイ共が事細かに調べても死因は分からなかったそうだし………。

平民の………魔法を使わずに作られた毒でも使ったか？

いや、無いな。

恐らく念入りだったであろう、死後の検分を誤魔化せたとはいえずらい。

それに、ディテクト・マジックに反応しないって……。

これ、どこかで聞いた事があるような気がする。
多分原作知識だったとは思うのだが。

なんだったか。

確か、どこかで……。

あああ、だめだ。思い出せない。

とりあえずはおいておこう。

次に、教皇のあの怯えっぷり。

事実上の権力者はジジイの方なわけだから、付け入る隙を与えまいと気を配るのならわかるが。

あれは、ちよつと異常じゃないか？

それに、疑惑を持たれただけで終わりって……。

彼は教皇で。

教皇は、このハルケギニアではその地位は諸王より上とされている、形式上ではあるが、最高権威者なわけで。

その教皇が、疑惑だけで破滅？

いくらジジイの権力が強大だからって……。

普通に考えておかしいだろう。

だって事実、先代の暗殺疑惑はとっくにかけられているわけで。

それでも、明確な証拠が無かったからって、ジジイ達は攻めあぐねてるんだぞ？

それを知らないのか？

まさか、自分が先代暗殺で疑われているのを気付いて無い、とか？

……。

いや、流石にそれは無いだろ。

会話的に、ジジイ共が先代の遺体にディテクト・マジック使ったのも知ってるみたいだったし。

それでなお気付いて無い、若しくは自分が疑われているとは思って無い？

いや、無いな。そこまで無能なら、ジジイにとくに潰されている。

いくら暗殺という手段を使ったといっても、ジジイを出し抜いて教皇にまでなっているのだ。それは無い。

じゃあ、やはり知られたらマズいのは、手段の方か？

ご禁制の何かを使ったとか。

後は禁呪を使用して殺したとか？

でもそれってディテクト・マジックで判らないか？

判らない物だったとして、それにジジイ達は気付かないのか？

ジジイ達が知らない何かを当代だけが知ってた？代々家に伝わる秘伝の魔法とか？

バカバカしい。

いや、もしかしたら？

だがそんな都合の良い話が有るのか………？

それに禁呪の疑いの疑惑だけで、教皇の地位に在る者が破滅するか？

あー。くそ。

だめだ。秘薬とかならともかく、魔法関連になってくるとお手上げだ。

そもそもディテクト・マジックでどの程度の事が判るのかも私には

わからないしなあ。

自分が使えないからと、魔法関連の勉強をほとんどしなかったのがまずかったか。

使えないと言えど、知識は有るに越した事はない。

幸い、ここはロマリア。魔法関連でも様々な知識が眠っているだろう。

帰るまでに一通り調べるとして。

さて。思考はすっかり手詰まり。

考えを転換して見よう。

自分で推理するのではなく、相手から聞き出すとかはどうだろうか。ん。誘ってみるか？でもなあ。のって来るか？

ジジイみたくりコンならありがたいんだが。

そんな変態がごろごろしてるか？

それに、その疑惑だけで身の破滅だという内容を、高々抱いた相手にうっかりばらすか？

うん。時間があれば完全に籠絡できるかもしれないけど、教皇に私を触らせるのはジジイが許さないだろうし。ジジイの目を盗んで………ってなると、2、3回が限界だろ。

どう考えても足りない。

いつそ私が絶世の美女だったりしたら、いけるのかもしれないけど。

適当にカマかけてみるのは………私が殺されて終わりだろうな。

それに、教皇って絶対護衛とか取り巻きとかに囲まれてるだろうか、やっぱ接触は難しいだろうな。

そう言えば、会話の相手は誰だったんだ？

かなり深いところまで事情を知っていそうだったが、共犯者だろうか。

ならば、そちらから切り崩せないか？

教皇と仲違いさせてみるとか。

でもなあ。私じゃ難しい。

まずどここの誰かも分からないわけだし。教皇の側近は誰か、後でそれとなく聞いてみよう。

ああ、もう。

いつその事ジジイに今の事話して調べさせるか。

私よりよっぽど上手くやるだろうし。

ただ、ジジイに話すにしても、ある程度までは掴んでから話したかったんだけどな。

今後のためにも、ただ愛人としてでは無く、それなりに使える人材だと思わせたいんだが。

だが、まあ欲張っても仕方が無いか。

この会話だけでも結構な手柄になるだろ。

それからしばらく待たされて。

「失礼致します」

扉が開かれ、入って来たのは若い神官。

なんだ？

「どうかいたしまして？」

「ゲルジオ枢機卿より、セレナ様を謁見の間へと連れて来る様にと」

そう言えば、教皇に会わせてやるとか言ってたっけ。

さっきまでは特に会いたくもなかった。

だが。

ちょうど良い。

1度くらいは顔を見ておこう。

「分かりましたわ。案内をよろしくお願い致します」

「はい。では、こちらへ」

さてさて。

教皇サマとやらはどんなお顔をしているのやら。

その21

「セレナ様をお連れいたしました」

あの部屋から廊下を延々歩いて、連れて行かれたのは、大きな両開きの扉の前。

左右に1人ずつ、聖堂騎士が立って警備しているその扉は、人が10人、横並びでも通れそうなほど。

その広さ一杯に、びっしりと彫刻が施されている。

騎士達が私を見て1つ頷き、扉の端に手を翳す。

滑るように開いた先は。

広い広い、千人単位で人が入りそうな広間を、大きく取られた窓からたつぷりと入り込む陽光が柔らかく照らし。

見上げた天井一杯が、一枚画で覆われて。

入口から、広い室内を真っ直ぐに貫いて、足を置くのをためらう程に純白の絨毯が敷かれている。

この時は知らなかったのだが、この絨毯は一回きりの使い捨て。

この部屋が使われる度に新調しているのだとか。

勿論、安い物ではない。

熟練の職人が10人、3年がかりで織り上げるものだ。

下手をすれば屋敷が一軒買える金額。

それが、使い捨て。

使い終わったものは処分されるそうだが、庶民をなめているのかと、いや、そういう消費が大切なのも分るし、これを廃止するとなると、職人達に大きな打撃となる事も理解できる。

だがしかし。

外では子供達が道端で夜をあかし、飢えと寒さに凍えてるんだぞ？
こんなの金使うのは、せめて足下の国民を救済してやってからにしるよ。

……これは、原作でヴィットーリオの人気が出るわけだ。

で、その絨毯が続く先。玉座に着く男と、その横に1人。

彼らの前、一段下がった場所にジジイが立っている。

「来たか。セレナ、こっちに」

ジジイが、こちらを振り向いて、って、おいおいおいおい。

仮にも謁見の間で、玉座に座る教皇に尻向けるなよ。

壇上にいる2人の顔も引きつってエラい事になってるぞ。

でも、何も言わないって事は、それがジジイと彼らの権力の差を表してるんだろ？

教皇も可哀相に。

深々と一礼して、ジジイの元に向かう。

「この子が先に申しました子でしてな。

本日は、聖下にもお目通りをと思いまして連れて来たのですよ」

「そうか。大恩あるゲルジオ枢機卿に引き取られるのならば、私に取ってもまた娘のようなもの。

セレナとか言っただな。困った事があれば何時でも来るが良い」

玉座に座っている男は、50才程だろうか。

私がジジイの愛人と言う事はとうに知っているのだろつ。こちらを見る目には欲望が見て取れる。

だけど。

おかしい。

絶対におかしい。

表情が判りやすすぎる。

ジジイを出し抜いて教皇になれたとは思えないほど。

油断しているのか。

それとも。

「私の事も何時でもお頼りください」

玉座の隣り、寄り添うように立つ男が声を上げる。

この声、さっきのつっ。

くすんだ蒼の髪、壮年の男。

整った顔に、柔らかな笑顔を乗せている。

「ありがたきお言葉、恐悦至極に存じます」

「そう言えば、ゲルジオ枢機卿は、お嬢様をとて可愛がっていらつしやるそうですね。片時もお話しにならない程だとか」

穏やかに笑いながら言った言葉に、空気が冷えた。

つまりは、ジジイが『愛人である幼女』、つまりこの私に入れ上げている事をあてこすってくれたわけだ、この男は。

「ああ。本当の娘のように思っておるからの。家族とは縁遠いそなたには判らぬかもしれぬがの」

笑顔の中で、目が僅かに細められる。

どういう意味だ？
孤児とか？

と、いうか。

絶対、こいつだ。

絶対こいつが黒幕だ。

だってあの教皇どっからどう見ても小物だもん！！

帰りの馬車の中。

「クザー又様。今日は本当にありがとうございました。
私のような者が、教皇様にお会いできるなんて。
全てクザー又様のお陰ですわ」

「嬉しかったか？」

「とても光栄でしたけど、緊張してしまいましたわ」

屋敷まではもう少しかかるな。
今の内に聞いとくか。

「あの、クザー又様」

「ん？どうかしたかの？」

「教皇様のお隣りに立っていらっしゃった方は、どなたですの？」

ジジイが一気に苦虫を噛み潰した様な顔になった。
よっぽど嫌いらしい。

「あ奴はホルツァナドの小僧の側近じゃ」

教皇を小僧って。

ジジイの話から愚痴やら中傷やらを取り去ってまとめると。

ピエール・アダム・マルティノツジ枢機卿。

ロマリアの有力な名家の出で、母親がガリア王族。

能力値はジジイと張り合える程度には有能。教皇はホルツァナドだ

が、実質的な権限をほぼ握っている。

因みにその事にホルツァナドが気付いているのかどうかは不明。

上に兄がいたのだが、両親共々事故死して、彼が家を継ぐ事になったらしい。

その事故は彼が仕込んだと言われているとかいないとか。

なるほど。そんな噂が流れているのであれば、それが本当の事だとせよ事実無根にせよ。

ジジイが言った『家族に縁遠い』云々は、結構な皮肉だったわけか。

それにしても。ふうん。

あのくすんだ蒼い髪は、ガリア王家の血が入っているからだったのか。

うーん。それよりも、だ。

ガリア…ジョゼフ……ガリア王家、ディテクト・マジックに反応しない…………。

何かが一本に繋がりそうではあるんだが。

うん？ジョゼフ、ジョゼフか！！

っ！そうだ！！

エルフだ。

確か先住魔法はディテクト・マジックに反応しないと原作にも書いてあったはず。

ビダーシャルが『人が聖地に近付くのを止めてくれ』と依頼したの

はガリア王ジョゼフ。

ガリア王家は、元々エルフとある程度の繋がりがあった、そう考えれば…………。

ガリアはサハラに面しているし、おかしくは無いだろう。

その繋がりが、果たして良い関係かそうでないかはとりあえず置いておくにせよだ。

ここでは恐らく繋がりがあ、と言っのが大事。

そうだとするなら…………。

エルフから秘薬を入手して、先代にもって殺したのか。

ふうん。

ブリミル教の総元締め、教皇がエルフの秘薬を使って先代を殺した。

それが一番しつくり来るな。

それにしても、エルフを毛嫌いし、何度も何度も『聖地奪還』のために聖戦を起こしているブリミル教。

その頂点に立つ男がエルフの技術に手を出したのか。

確かに、疑いを持たただけで全てを失い、破滅へと一直線に繋がっているような道だ。

だが、あの小者、もとい教皇がそんな御大層な事を一人で考え付き、実行する。なんて事が出来るはずが無い。

先代暗殺事件、裏で糸引いていたのはマルティノッジと 下手したら、ガリア王家も絡んでいるかもしれない。

今は情報が足りないからそれは置いておくとして。

それにしても。

あの2人の会話を聞いたからとは言え、私があっさりと辿り着けた答えに、今まで誰も到達しなかったのはなぜだ？

少し考えれば判りそうな事だが。

それとも分かつていて放って置いたのか？

いやいや、それは無いだろ。

気付いてたなら早々に告発するだろう。

もし何らかの事情で黙っていたとしても、今度は教皇達ですらばれたという事実を知らない事が判らない。

気付いて黙ってる目的って、普通は恐喝とかだろ。

教会の権威のためだとしても、いや、それなら余計に気付いている事を知らせて、これ以上やらないようにと釘をさしそうなものだが。知りはしたが、何もせずに黙っている。

あるかもしれないが、いったい何の目的で？

第一、この程度の事ならもっと大勢の人が気付くだろうし。

気付いた人間を片っ端から消して行った、は無理があるか。

うーん。なんでだ？

この時はまだ知らなかったが、エルフと言えば悪魔であり人の宿敵であり恐怖の象徴だ。

ロマリアでは、特にその傾向が強い。

もはや遺伝子レベルで『エルフは敵である』と刷り込まれているのだ。

まさか、そのエルフと、権力を握るためとは言え、手を結ぶ者がいるなんて。

ロマリアの聖職者にとっては、考え付きもしない　　むしろ考えたら、その事実自体が異端であると言う程の　　事であったのだ。それは、教会という組織の中で強大な権力を握りながら、信仰心の薄く俗物であるクザーヌ・ゲルジオすら『エルフ』という単語を思いもつかなかった程に。

私が気付けたのは、先入観のなさ、前世の記憶と、ジョゼフはエルフと手を組んでやりたい放題やってたなあ、という原作知識のお陰だった。

でも、この時はまだその事に　　大多数の人は、エルフと手を組もうと思いつく事すらないのだと。

気付いていなかったから。

因みに、私がそれに気付くのは、私の推測を聞きながらエラく過剰な反応をするジジイを見てからの事だったりする。

で、この時の私はと言えば。

さて、この情報をどうするか。
ジジイに話すか？

うん。でも、やっぱりもつと情報が欲しいなあ。

たぶん証拠なんて物は出てこないだろうが、それでももう少しだけ調べてから、ジジイには話すでしょうか。

そんな事を、延々と考えていたわけだが。

「うん？どうしたのじゃ、セレナよ。

急に黙り込んで。

どこか具合でも悪いか？馬車に酔ってしもつたのかの？

どこかで休憩するか？それとも馬車を急がせた方がよいかの？」

心配そうになジジイの声に我にかえった。

覗き込んで来る顔に微笑む。

「具合が悪いところなどございませんわ、クザーヌ様。

そう見えのでしたら、今日はとても緊張してしまったので、少々疲れちゃっただけですわ。

ご心配をお掛けして、申し訳ございません」

「何。そなたが大丈夫ならばそれで良い。

あー、それでじゃな、セレナよ」

ん？言いくそうに口ごもるなんて珍しいな。

いつもは立板に水の如く、ペラペラ話すのだが。

聖職者だから話も上手いし。

「どうかなさいましたの？クザーヌ様」

「その、のう。僕は一旦屋敷に帰った後で、また出かけねばならぬのだ。2、3日屋敷をあける。寂しいと思うが、我慢してくれるか

のう？」

「判りましたわ。

でも、早く帰って来てくださいませね。クザー又様がいなくては、私不安ですもの」

「うむ。何、どうせ下らぬ事を延々話すだけじゃ。直ぐに帰って来るから、良い子で待っておるのじゃよ？」

「わかりましたわ」

なんて素晴らしいタイミングだろうか。

よし、これで調査のための時間が出来そうだ。ジジイが出かけてる間にすませるとしようか。

その22

曇り一つ無い窓から光が差し込み、吹き込む風がカーテンを優しく揺らす。

爽やかな朝である。

うーん。久々に自分の部屋で寝た気がする。

ジジイは本人が言っていたとおり帰って来なかったし。

後3日も1人で、ゆつくりと眠れる。

自由ってなんて素晴らしい！！

ゆつくりと体を起こし、部屋を見渡す。

部屋の中は、ゲルマニアの屋敷の私の部屋に負けず劣らずの豪華な少女趣味の部屋となっていた。

私が今いる寝台の上からして、フリルとレース、ピンクで溢れている。

しかもこの部屋、客間では無いのだ。

私がロマリアに同行すると決まってから、急遽整えられた私専用の部屋。勿論内装も全て1から整えられ、家具はオーダーメイド。

それをこの屋敷について、さらにこの部屋の前に案内されてから、ジジイに得意気に聞かされたのだ。

やつとしてはちょっとしたプレゼントのつもりで用意したらしいが。

それを聞いた時、改めて思ったよ。

金持ちにはついて行けない、って。

なんで長くても1カ月いない、場合によってはこの屋敷に来る事は2度と無いかもしれない私のためにそこまでするんだ？

本人としては愛情表現の一環かもしれない。だが、前世は一般人、この世界に生まれ落ちてからの時間、そのほとんどを貧農の娘として過ごした私にとっては、まるっきり理解出来なかった。

ジジイが『喜ぶにちがない』みたいな目でこっち見てたから、にっこり笑って『ありがとうございます。とても素敵なお部屋ですね』とかなんとか言っといったけどさあ。

『光の国』ロマリアの現状を見てしまった今では、余計に心苦しくなると言うか。

寝台から降りて、窓に近寄る。

貴族の屋敷が屋根を連ね、その奥には一際存在感を放つ大聖堂。全てが清々しい朝の光に照らされて光り輝いているが。見えないところでは、いったいどれだけの人々が……。

いや、私も同類か。

扉を叩く音。

ん？誰だろうか。

「どうぞ」

「失礼致します」

入って来たのはジョアンナ。

テキパキと手際良く私に身支度をさせて、衣装箆笥を開いた。

「本日はお外に出かけられる用事も無く、また枢機卿猊下もお帰りにはならないとのことでしたから、シンプルなドレスでよろしいでしょうか」

「うん。それで良いよ……それにしても、久し振りだね」

「本当にそうですね」

ジョアンナはここしばらく私のそばから離れて、色々動きまわってもらっていた。

精々離れていた期間は1カ月半ほどだが、それまでは四六時中一緒だったからか、こんな当たり前のやり取りも、どこか懐かしく感じる。

因みに、ジョアンナの代わりに私の身の回りの世話をしてくれていたナターリエは、ロマリアには同行していない。

彼女とその恋人のイヴァンには、今回別の用事を頼んでいるのだ。青を基調に、ほとんど飾りもついていないシンプルな部屋着に着替える。

「昨夜、ニコル殿からお手紙が届いておりました」

ジョアンナが手紙を差し出す。

アクティナスからか。聞いた話によると、彼の母君の体調はだいぶ良くなっているとのことだったが。

手紙を開けば、母親が良くなったことの報告や、今回しばらくロマリアに滞在できたおかげで、すっかり看病する事が出来たことに対する礼が述べられていた。

そして私がロマリアにいる間に、一度きちんと会ってから話したいと。

「ふうん。

ジョアンナ、手紙書くから、準備をお願い。

後、一番上質なレターセットも一揃いお願い」

アクティナス、いや、ニコル　　ロマリア出発前に私たちは名前
で呼ぶ許可を得た、と言うか押しつけてきた　　への手紙には、
母君が健康を回復した事へのお祝いと、出来れば明後日に来て欲しい
という事を書いて封を閉じた。

さて。本命の方と行くか。

私が持つ中で1番上質なレターセットに、先日のお礼から始まって、
ヴィットリオの可愛らしさやら何やらを褒めて、最後は時間がある
のであれば、ぜひこちらの屋敷にお越し願いたい。と結ぶ。

「うん。こんな物で良いだろ。ジョアンナ、悪いが、この2通を出
して来てもらえるかい？後は」

手招きして近くまで寄るように伝える。どこで誰が聞いているかわ
からない。

この屋敷にはジジイ側の密偵も何人かはいるだろうし、ジジイの政

敵の奴等も沢山いるのだろっ。

まあ、気にしたら負けだが。今さらだ今さら。

近付いて来たジョアンナに膝を突かせて、聞こえるか聞こえないかほどの声で囁く。

「当代の教皇がその地位についた頃のロマリアやクザーヌの動きを、おおざっぱにでも良いが、調べておいてくれ」

「かしこまりました」

一礼して、ジョアンナは出て行つて。

さて、私も情報収集を頑張りますかね。

楽しい時間がすぎるのはあっという間なもので。

私は1人長椅子に座り、ニコルを待っていた。
やがて。

扉が叩かれ。

「どうぞ」

「失礼する」

実に数ヶ月ぶりに、私たちは顔を合わせることと相成ったのだ。

ニコルに『サイレント』をかけてもらってから、お互いに向かい合
わせに座る。

「久し振りだね。元気そうで何より」

「そちらも。」

セレナ、まずは礼を言わせてくれ。

おかげで母の看病をする事が出来、病も癒えた。
本当にありがとう」

深々と頭が下げられる。

「止めてくれ。」

そもそも、私はただジジイに君をロマリアに送るように言っただけ
だ。

母君が治ったのは、彼女自身の頑張りと、君の献身の結果であって、
私は何一つしていないが」

「いや、お前がいなければ、ロマリアに行くことも出来なかっただ
ろう。だからこそ……」

あーもー、ニコルの奴もしつこいからな。こうなったら絶対に意見
かえないぞ。

まったく。

「君がそう思いたいのならばそれで良いさ」
本当に頑固なのだから。

「ああ。本当に、感謝する」

真摯な目でそう言われて。

「ところで、君なんか進展は有ったの？コネとかツテとか作れそう？」

何だか照れくさいと言うか、こそばゆいと言うか、そんな妙な気持ちになって、つい話を逸らしてしまう。

「ああ。お前から渡された情報を元に、司教に何人が繋ぎをつけた。ロマリアだけでなく、他の国に基盤を持っている者もいくらかは取り込めそうだ」

さすがはニコルだね。仕事が早い。

「後、これは取り込む云々では無いのだが、私と同期で、同じようにロマリアとブリミル教の未来を憂いている者がいてな。なかなか優秀な奴なのだが」

へえ。そんなのいたんだ。
ならぜひこちら側に引き込んで……

「名前はマザリーニと言って……」

「ブハアッ」

「なっつ、おい、大丈夫か？」

「ゲホッ、ガハゴホッ」

ちょうど紅茶を口に含んだところで、思いもがけない名を耳にして
思いっきり吹いてしまった。

ってか、気管とか鼻とかに紅茶がつつ。
苦しい。

「グ…………ケホツ、ああ、大丈夫だ。すまない。
マザリーニ、マザリーニねえ」

まさかその名を聞くことになるとは。
さすがロマリア。

原作キャラがゴロゴロしてるな。

「何か引つ掛かる事でも有るのか？」

「いや、特に無いよ。」

そのマザリーニって彼とは仲良くしておくの良いよ。優秀なのは確
かなんだからさ」

なんせ、後のトリステインの国策を一手に担う宰相だ。

鳥の骨だが。

そっか。マザリーニってニコルと同期なのか。

「そっか？それなら良いのだが」

うん。未来の、とはいえ、トリステイン上層部に伝を作っておくの
は悪くはないだろ。

ただし、私が会って下手に記憶に残ったりするのは不味いから会えないけど。

ニコルを通してなら。

それからしばらく、他愛も無い雑談をかわして。

「ところで、ニコル、ちょっと聞きたい事が有るんだけど」

聞きたかった事を、聞くことにした。

「なんだ？」

「先代教皇の死の状況って、どうだったの？」

ニコルは、何かに思い至ったように頷く。

「ああ。現教皇聖下とゲルジオ枢機卿猊下の事を聞いたのか」

「ああ」

「当時は私も学生で、詳しい事までは判らないが、それで良いのなら」

「もちろん」

私が頷くと、それを合図に話始めた。

「前教皇聖下が亡くなられた時に、その後継者候補の筆頭だったゲルジオ枢機卿が、外交折衝でガリアに赴いていた事は知っているな？」

普段なら、なんと言う事もない、拗れる訳もない交渉だったのだが、ガリア側が妙にかたくなでな。

拗れに拗れ、最後には両方とも軍まで出す騒ぎになった。前教皇がお倒れになったのはその時だ。

だが、現場はゲルジオ枢機卿が抜ければ戦争になり兼ねないほど張り詰めていたらしくてな。あれであの人はかなり優秀だから、それを1人で押さえていて。

その隙に、当時のホルツアナド枢機卿と、その側近だったマルティノッジ大司教が多数派派工作を行い、教皇の座を得た」

紅茶を口に含み、一息入れ。

「マルティノッジ枢機卿はガリアと近いお方だ。

そのせいで、ガリアとホルツアナド枢機卿が手を組んだのではないかと噂が流れてな。

収集をつけるため、もしくは証拠を見つけるために、前教皇聖下のご遺体はしつこい程に調べられた。

だが、何一つ証拠は出てこなくて、ホルツアナド枢機卿はそのまま教皇の座についた。

ガリアのかたくなさも、王が交替したばかりで、臣下や諸外国へ、引く事ない姿勢を見せていただけだと解釈も出来なくもなかったしな。

だが、現教皇聖下の御政策は、大事にところではことごとくガリアより。

国境を接している大国を刺激する訳にはいかないとか、色々と言われているが、正直、かなり疑わしいと言うのが本音だ」

ニコルの話しは、私がこれまで耳にした内容と同じものだった。そして私の仮説との矛盾も無い。

それにしても。

そんなにあからさまに親ガリア政権なのか。
もう少し考えていると思ったのだが。

自分の策が、ばれるはずが無いと高を括っているのだろうか。

「あのさあ。私少し思い付いた事が有るんだけど」

私の話を聞いたニコルが、否定し、怒鳴り、最後には真っ青になつて出て行ってから数刻。

「失礼いたしましたす、セレナ様。

枢機卿猊下より、今夜はお帰りになるとの御連絡が」

「そう」

ちょうど良い。

仮説はまとまった。

それにしても、教皇を疑っていたニコルまであんなに感情的に否定しようとするなんてね。

やはり、エルフと言つのは相当に恐れられているのか。

やがてどっぷりと日が暮れて。

「今帰ったぞ、セレナよ。

寂しい思いをさせてしまつて悪かつたのう」

「おかえりなさいませ、クザーヌ様。

お仕事お疲れ様でした。

後ほど、少々お話ししたい事がございますの「

その23

広い食堂で夕食をとって後、ジジイの執務室で顔を合わせている。

「それで、話とはなんじゃ、セレナよ。誰かに何かされたのか？」

「いいえ、そうではございませんわ」

ワインを一口含み、唇を湿らせた。

さて、どうもって行こうか。

「その、先日の夜会で、先代の教皇様の事をお聞きしましたの」

「ああ。その事が。」

あれはもう解決しておる。そなたが心配するような事は何一つ無いのだぞ？」

「その、ですが、先日教皇様にお目通りした日、私、少しの間部屋に1人で居ましたでしょう？」

そこで聞いた教皇と枢機卿の会話。

ディテクト・マジックと先住魔法の関係。

そしてガリアとサハラ、の関係。

ガリアの息がかかっているだろうマルティノッジ枢機卿。

話す内に、ジジイの顔が徐々に険しくなっていく。

「ですから、恐らくガリアと現教皇聖下が手を組み、クザーヌ様をロマリアから引き離している隙に、先代様をエルフの秘薬を使って、

「

「馬鹿な!!」

いくらなんでもそんな事が有るはずが無かるうつつ!!」

私に向けられる鋭い目。

うわ、私ジジイに怒鳴られるのなんて何気に始めてじゃないか？

「落ち着いて下さいませ、クザーヌ様」

「落ち着けるものかッッ！そなたはホルツァナドの小僧どころか、ロマリア、いや、ブリミル教全体を侮辱しておるのだぞ!!」

老いた手が机に叩き付けられ、ワイングラスが倒れて赤い染みが広がる。

「クザーヌ様。まずはお座りになって下さいませ。

私はなにも、そうであったと決め付けている訳ではございませんわ。ただ、このような可能性もあると申し上げているだけ」

ジジイを長椅子に座らせ、ワインを渡す。

それを口に運ぶのを見ながら、溜め息を零す。

あの生真面目なニコルがエラく過剰反応してたのはまだ解ったけど、まさかジジイもだとはね。

どうやらロマリアとエルフの関係を甘く見ていたらしい。

少し考えれば分かりそうなものだと思い、なぜ誰も疑わないのかと

疑問だった、これが宗教の怖さと言うものか。

ワインを飲み干し、少しばかり冷静さを取り戻したらしいジジイが俯く。

「セレナよ。マルティノッジとホルツァナドの会話は確かか？」

両手に顔を埋め、力無くうなだれたジジイの、かすれた声。

「この耳ではつきりと聞きましたわ」

小さな呻き声。

彼も、本当は解っているのだ。

全ての矛盾に説明をつけるとしたら、それ以外は無い事を。

「馬鹿な……。あのエンツォがそのような事を、するはずが……」

エンツォって、確か教皇の。

「クザーヌ様、もしかして、教皇聖下とは親しくいらっしゃったのですか？」

「……………ああ。

儂の母と、あれの祖母が従姉妹でな……。あれが幼い頃などはよく面倒を見てやったものだが……。その、エンツォが……。そんな事をするなど……。信じ、られるはずが……。」

やっぱりかよ。

このジジイ、他人にはとことんまで冷酷で、人を使い捨てにする事など何とも思つて無い。

だが、私に対しての甘さを見ても分かるように、身内にはかなり甘い。

だから、先代が死んだ後、素直にゲルマニアに流されたのか。

あの夜会で話していたように、あくまでも先代の死の真相を探ろうとする派閥の者達を押さえ付けて。

それでも、自分がいては派閥の者達も先走るかもしれないからと、『自分が負けた』事を示すために。

ジジイなら、ロマリアでいくらでも権勢をふるえただろうに。

ただ、自分をはめた身内を守るためだけに。

弱つたな。

これは、厄介だ。

何せジジイは、『ブリミル教の教皇が国外勢力と手を結び、先代をエルフの秘薬で暗殺した事』を否定したいのではなく、『幼い頃から知る身内が、そんな事をするはずがない、信じたくない』と言う気持ちが強いものだから。

さて、どうしたものか。

ああ、そうか。

ようはさ、教皇なんだよ。
だから。

「ねえ、クザー又様。私も、教皇聖下がそのような恐ろしい事を自
らなしたとは考えておりませんわ」

なら、矛先をずらしてやれば良い。

「きつと、聖下も、ガリアやマルティノッジ枢機卿に騙されていたに違いありませんわ」

まあ、多分本当にあの教皇を唆したのはこの2人だろうから、嘘でもないし。

ハッと、ジジイが目を見開いた。

あんたは身内を糾弾しないですむ言い訳が欲しいんだろ？

ならくれてやるよ。

「教皇聖下も、被害者の1人なのですわ。

無理矢理陰謀に荷担させられて………おかわいそうに」

救って差し上げる事が出来るのは、クザーヌ様だけですわと、耳元で囁いた。

怒鳴り声や、罵声が引つ切り無しに飛び交うのも、徐々に下火になっていき。

「エンツォよ。そなたも騙されておったのだろっ？」

「な、私は……………」

「良い。言わなくとも分かっておるわ。マルティノッジとガリアの小僧は、そなたの人の良い性格を利用して、そなたを嵌めたのじやな」

本当はあのような事、したくなかったのだろう、可哀相に、と。

「わた、しは、利用されて……………」

どうしたら良いのか判らないと言つように揺れる声。

「これを見るが良い。ガリアからマルティノッジに流れておつた金や利権じや」

「なつ、これは……………こんなに……………」

「これで分かつたじやろ？」

あ奴はそなたを利用して、好き放題に甘い汁を吸つておつたと言う事じや」

「そんな……………馬鹿な……………」

「じゃから、もうあ奴を庇つてやる必要もありはせぬ。

そなたは被害者なのじや。

正直に言うが良い。

証拠もあるのじやし。

例の計画を持ち掛けて来たのも、マルティノッジじやな？」

「……ああ。そうだ。マルティノッジが」

「エルフの秘薬を用意したのもか？」

「ああ。全てはマルティノッジがしたことだ」

ついに、言ったな。

隣りの部屋から、微かに開けた扉越しに聞こえてきた会話に、笑い出したくなるのをこらえる。

言っちゃったねえ、聖下。

もう取り返しはつかないよ。

なんせその部屋のなかの会話は、映像も含め全てマジック・アイテムに記憶されているのだから。

普段は常にマルティノッジが側について、手を貸してやっていたのだろう。

マルティノッジから引き離された教皇は、やはり小者で。

実に簡単にこちらの誘導にのってくれた。

まあ、もちろん身内大事のジジイが、心の底から奴を救いたい、守ってやりたい一心で必死に説得した事もあるのだろうけど。

「ほら、言っちゃったよ？君の教皇は。

せっかく頑張って証拠もなにもかも消しただろうに、台無しになっちゃったね」

床の上。

四肢を縛られ、杖を取り上げられ、目隠しをされて。ついでに大声を出して邪魔をする事が出来ないように『サイレント』をかけられている男に笑ってやる。

見えないだろうけど。

おや、本当に顔が般若のようだ。怖いね。

そう。最初から証拠などどこにもありはしなかった。

この件に関しては、精々、教皇がその地位に就いた頃にマルティノツジの屋敷に来客が増えたとか、その程度の事くらいしか痕跡は残っていないかった。

さすがと、いつそ称賛しても良いと思うほどに、決定的なものは何一つ残されていなかったのだ。

でも、教皇が認めたんだから、証拠とかいらないよね。

だって、ブリミル教も異端者だとか何とか言って、『疑わしきは罰せよ』の精神で証拠一つ無いのに裁いてるのだから。

「本当に、残念だったね」

でもさあ、こつちもあんまり大事にする訳にもいかない理由って奴が有る訳で。

ブリミル教の教皇がエルフの物を使っただなんて、ばれたら教会の威信が傷付く程度ではすまない。下手をしたら、宗教改革を招きかねないほどのスキャンダル。

だから、何が有ったのかなどと勘ぐられないためにも、エンツォ・ホルツアナドは何事も無かったかのように教皇でいなければならぬ。

それにうつかりつくと、ガリアが出て来るかもしれない。

それだけは避けなくてはいけないんだ。

今のロマリアに、ガリアを正面きって押さえ切るだけの力はないからな。

有耶無耶の内に方を付けなければいけないのだ。

「君にはそのために協力してもらうよ、マルティノッジ枢機卿」

つまりはさあ、君1人がスケープ・ゴートとなって死んでくれたら、全てが丸く収まるんだよね。

悪いけど、ブリミル教とロマリア、そして教皇聖下のために、1人寂しく死んでくれ。

そう言つて、私は書類の上では既に病で死ぬことが決定している男にあてがわれた部屋を　　といつても四肢をがんじがらめに縛られていては動く事も出来ないだろうが　　後にした。

そしてその3日後。

若くして枢機卿まで上り詰めた偉才、ピエール・アダム・マルティノッジの突然の訃報がロマリア中を駆け巡った。

急な病に倒れ、手の施しようが無かったのだと言う。

葬儀は、ロマリアの大聖堂で大々的に執り行われた。

教皇自らが取り仕切り、各国から重鎮が駆け付けた、正に『教皇の無二の忠臣』に相応しい葬儀となる。

まだまだ働き盛りの年のこと。

このままであれば、次期教皇も夢では無いと言われていたほどの男の、あまりにもあっけない終わりだった。

その24

ジジイがガリアとの戦争を恐れたのには、幾つかの理由が有る。その中の一つに、援軍が期待出来ない、と言う事が有った。

ガリアやガリア王を異端だとか、ブリミル教への反逆者として、諸外国の援助を募ろうにも、そうはいかない理由がある。

まず第一に、単純に教皇の力が足りない。

ガリアはこのハルケギニア一の大国。

その大国の王を破門したり、異端認定をするには、ロマリアの力は足りなさすぎる。かの有名な『カノッサの屈辱』 教皇グレゴ

リウス七世に破門された皇帝ハインリヒ四世が諸候の反乱を恐れて、カノッサに教皇を訪ね悔悛を示し、破門を解かれたと言う事件

のようにするには、この世界、と言うよりもこの時代の教皇はあまりに無力だ。

第二に、今現在諸外国はそれどころでは無いのだ。

現トリステイン王は、英雄王と呼ばれたフィリップ3世だが、最近体調を崩しがちだと聞く。

そして次期王はアルビオンからの入り婿。

これでは他国のごたごたに關与している余裕は無い。

アルビオンは、数年前に即位したジェームズ一世による、先王が傾けた国の立て直しが急ピッチで進められている真っ最中。

先代の時代の宮廷は腐敗を極め、貴族達も私利私欲に走り、それはひどいものだったと言う。

ジェームズ一世は貴族の処断やら、空に近い国庫の補填やらに奔走

していると聞く。

それに対する貴族側の反攻もあるようで、あの国も当分落ち着かないだろう。

次にゲルマニア。

まず、始祖の血を受け継いでいない事から信仰心が薄く、彼等に援軍を要請するようなものなら、見返りとして何を要求されるか分からない、と言うのが一つ。

そして、現皇帝は若い頃はそれなりに上手く国政を取っていたのだが、年をとるにつけ猜疑心が強くなり、些細な事で臣下を罷免し、ひどい時は処刑する。皇帝と貴族達の権力が危うい均衡を保っているあの国では、今や皇帝は殆ど老害と化している。おまけに皇位継承者争いの気配まである。

他の小国たちは味方につけたところで、ほとんど戦力の足しにはならない。

それに対してガリアは、ジョゼフ王子とオルレアン公の兄弟の派閥に分かれているとはいえ、優秀な手腕を持った王が健在で、派閥争いにしても国政に影を落とすほどの問題にはなっていない。

原作を知る私としては、今はまだ、という注釈をいれなくなるが。

『大国』とされる国の中で、最も安定しているのがガリアなのだ。おまけにガリアと事を構えれば最悪の場合、教皇がエルフの薬を用いて先代教皇を暗殺した事を暴露されかねない。

それだけは避けなければならぬ訳で。

だからこそジジイは、マルティノッジの死で全てを手打ちとした。ガリア王もそれは理解しているのだろう。

弔問の使者がジジイのところ到手紙置いて行ったし。

内容は普通にお悔やみと、これからも教皇の下、ブリミルの僕であるとか何とか。それが美辞麗句に溢れた長ったらしい文章で綴られ

ていた。

これをジジイのところに送って来るあたり、今回の顛末はほとんどばれてるんだろうな。

さすがはジョゼフの父親と言すべきか、ガリア王の政治的な手腕は並のものではない。

無能だと言われ、国内での評価はシャルルとは比べ物にならないほどに低かったジョゼフを後継者に指名したのも、2人の能力を正確に把握していたからだろう。

まあもつともジョゼフの狂気までは見抜けなかったようであるが。

ジジイはガリア王に対処すべく奔走している。

まあ、そのおかげで私の時間はぽっかりと空いてしまい。

今素晴らしい美貌のご婦人と、度々顔を突き合わせてお茶を楽しむ関係になったのだが。

「どうかなさいましたのセレナ様、難しいお顔をされて」

おっと。顔に出てたか。

「いいえ。何でもございせんわ、ヴィットーリア様。

それより、本日のお茶菓子はとても美味しいですわね」

これは本当。

セレヴァレ家の料理人が作る菓子は最高である。

今日の菓子はシンプルなベリーケーキだが、ベリーの爽やかな酸味が、控え目な甘さの生クリームによってひき立ち、スポンジは口の中でほろりと溶けるほどフワフワしている。

ジジイの屋敷でも菓子はもちろん出るのだが、元はジジイ1人で暮らしていて、菓子など出す事はほとんど無かったためか、セレヴァ

レ家の菓子と比べると一段落ちる。

と言うかこの屋敷の菓子職人の腕が良いのか。
いっそゲルマニアに連れて帰りたい。

ヴィットーリアが、花がほころぶように微笑む。

「そう言っていただけでは光栄ですわ。
料理人も喜ぶことでしょう」

ヴィットーリアの夫、ステファノ・セレヴァレはジジイの親戚であり、派閥の重鎮であり、ジジイも信頼を寄せている1人である。
ゆえに彼もジジイの下で忙しい時間を送っており、ほとんど妻子に構ってやれない。

私もやりたい事はあるが、ジジイが帰って来て、その許可をとって
からで無ければ迂闊に動く事が出来ない。

暇を持て余した私たちは、1度の茶会をきっかけに、互いの屋敷を
頻繁に出入りする関係になっていた。

思わぬ副産物だ。

居心地のいい室内で、美味しいケーキとお茶を飲みながら午後の一
時を過ごす。

目の前には素晴らしい美人と

「あらあら、ヴィットーリオ、起きちゃったの？」

長椅子の側に置いてあったゆりかごから微かな泣き声上がり、ヴ
ィットーリアがわが子を抱き上げる。

「おはよう、ヴィットーリオ君」

赤子ながら、母親によく似た整った顔が私を見て笑う。

うーん。可愛いなあ。

最初の頃は少しばかり人見知りされていたが、今は結構懐いてくれているのだ。

「だっこさせて頂いてもよろしいでしょうか？」

「勿論ですわ」

柔らかな生き物を、母親の腕から受け取る。

「よしよし。本当にヴィットーリオ君は可愛いですわね。きっとお母様にそっくりになりますわ」

「ふふふ。」

セレナ様はそればかりですね」

「だって本当に可愛らしいのですもの。」

失礼ながら男の子というのが信じられませんか」

くすくすと、ヴィットーリアが鈴を鳴らすような声で笑う。

「いつも女の子に間違えられますのよ」

「それはそうですわ。男の子だと知っている私でも、戸惑いそうになるほどのもの」

この赤ん坊が、散々謀略を巡らすあの教皇になるんだよな。まったく、時の流れとは無情だなと思うよ。

「大きくなれば、間違われることもなくなると思いますけど」

「ヴィットーリオ君の大きくなった姿ですか？それも見たくはありますが、やはりずっと小さなままできて欲しいですわ」

ねえ、と腕の中で私の髪を弄って遊ぶヴィットーリオに言う。

いや、本気でさ。

彼がどうなるかを知っている身からすれば、このまま大人になって欲しくない。

ずっとこの可愛らしい生き物のままでいて欲しい。

それが無理なことは嫌と言うほど分かっているが、それでも。

腕の中できゃらきゃらとご機嫌な笑い声を上げる赤子に、そう願わずにはいられなくなる。

虚無の事も世界の事も、何も知らなければこの赤ん坊は幸せな幼子のままでいられるのではないかと

だめだ。

情が移ってるよなあ。

将来的に敵対する可能性があるんだが。

いつそ本気で介入して、ヴィットーリアさん何とかしようか。

確か彼女が逃げた理由が息子の力に怯えてだったな。
なら、虚無に覚醒しなければ良いんじゃないか？

炎のルビーと始祖の円鏡を、なんとかヴィットーリオから遠ざける
事が出来れば……。

いや、魔法が使えないというのは、ある一定の年齢になれば知れ渡るだろう。

虚無についての情報を数多く持つロマリアだ。誰かがヴィットーリオの系統に気付かない保証はない。

そうすれば、やはり虚無の系統を発現させる事になる。

ある程度成長していれば恐怖も和らぐのではないかとも思うが、確証はないしなあ。

やはり、ヴィットーリアがロマリアを出奔する前後で確保、または接触するのが一番堅実だろうか。

ヴィットーリアとお茶会を終え、屋敷に戻ると、珍しい事にジジイが帰っていた。

「ただ今帰りましたわ、クザーヌ様。

お戻りになるのですたら、連絡してくださればどこにも行かずお待ちしておりますのに」

「うん？ ああ、急に時間が空いての。連絡する暇もなかったのじゃ。悪かったのう」

「悪かっただなんて……」。

お仕事の方は如何ですの？お疲れではございませんこと。」

ジジイは緩く首を振る。

「いや、もう忙しさの峠はこしたでな。

そのうち、きちんと帰ってこれるようになるう。

それよりも、せっかくロマリアに來たと言つのにろくに構ってやれておらぬな。何かしたいことはないか？

何でも言つが良いぞ」

何でも？

やりたい事はあるが。

まず言つてみるかな？

「何でも、ですの？」

「ああ。何より今回の事はそなたの手柄だと言つに、ろくに褒美も与えてやつておらぬからのう。

この際そなたの望みは何でも叶えてやるぞ？」

「それなら……」

それを告げれば、ジジイは怪訝な顔になった。

「そのような事で良いのならば、好きにするが良いぞ。じゃが、本当にそれだけで良いのか？」

「ええ。充分ですわ」

よし。

やったぞ。許可が下りた。

これで私がロマリアに来た目的の大半は達成出来る。

「本当に、ありがとうございます、クザーヌ様」

今回ばかりは心の底から、そう囁いた。

その25

どうしてハルケギニアでは、いわゆる『科学技術』が発展しなかったのだろうか。

魔法が有るから？

だが、この世界で魔法が使えるのはほんの一握り。その他大勢は魔法が使えない人々だ。

彼は魔法に変わる『何か』を、開発しようとはしなかったのだろうか？

恐らくしただろう。

人間と言うものは、好奇心旺盛で、欲深く、そして怠惰な生き物だ。自分達の身の回りにある現象を解析しようと研究したり、より楽に、より楽しく、より便利な生活を求め技術を磨こうとする生き物なのだ。

ならばなぜ、6000年以上の長きにわたってこの世界の文明は停滞しているのだろうか？

プラトンやソクラテスのような思想家も、アレキサンダー大王やカエサルのような軍人も、エジソンやワットのような発明家も、アインシュタインやニュートンのような科学者も、もしくはその素養を持ち得る者達も、存在しなかったのだろうか？

そんな筈はない。

ならばなぜ？

答えは簡単。

『存在しても潰された』から。

鬼才も天才も神童も、総て貴族や、そしてロマリアという宗教組織によって消されて来たのだ。

『魔法』をこえる技術を生まないように。

『魔法』に優る兵器を生まないように。

偏執狂じみた、いや、偏執狂その物のこのかたくなさによって、このハルケギニアに『魔法』以外を認めない。

それは『メイジ』が支配者であるために。

それは『ブリミル』が絶対であるために。

彼らは『科学』を拒み続ける。

そうして、『魔法』以外の可能性を総て排除した末に出来上がったのが、今のハルケギニア。

6000年もの長い長い時間を、停滞したままにあり続けた、奇妙に歪んだ世界である。

ここまでのするのは、かつてブリミルの時代に故郷を追われ、流浪を強いられた事が関係しているのではないだろうか。

もう二度とあはなりたくない、この生活を、地位を失いたくない。その強い思いが、きっと彼らの原動力。

そもそも少数の者だけが持つ不思議な力とか、普通に考えて迫害の元以外の何物でもない。

それを民衆を宗教で丸め込み、技術の萌芽の芽を摘み続け、『メイジ』を支配者として確立した手腕に敬服する。

彼らは本当に『平民』を恐れ、細心の注意をもって世界を管理していたのだろう。

でなければ、かなりの量の『地球』 彼らより遥かに高次の技術体系をもつ存在 からの工芸品の流入という、高確立でブリークスルーを誘導し得る事象が有り、『鍊金』と言うある程度の技術格差を無視し得るチートがあると言うのに、未だに文明が中世レベルだということの説明がつかない。

まあ、すべては私の想像にすぎないわけで。

はあ。

現実逃避はこの辺にしておこう。

私は現実を見据えなくてはならない。

それがどんなに正視に耐えない物だったとしても。

それが、私の成した事に対する結果だと言うのならば。

それを受け止めなければならぬのだ。

ああ、そうだ。

その現実が、たとえ足下で場違いな工芸品 ガンダールヴの『槍』として『召喚』された武器に、頼ずりしながら恍惚の表情で身悶えたり、時々ピクリピクリと痙攣している男であったとしても！
！私は受け入れなければならぬんだ。

それがこの男 テオドールをこちらに引き入れた私が取るべき道

もうこの男ここで埋めちゃダメ？

ちようど良く武器もあるし。

今なら人1人、いや、テオドールくらいなら軽く殺せそうだ。

だって、耳を澄ませば聞こえて来るのは、大の男の荒い息遣いと喘ぎ声だぞ？

はつきり言つて、気色悪いとかそういう次元を遥かに突破しているような。

「テオドール」

「はあはあはあ」

「…………… テオドール」

「はあはあ、あああ、も、もう」

ビクンビクン、と体が波打つ。

「…………… テオドール・ド・ナーディスト」

「う、あああ」

ピチャピチャという水音が

「貴様、いい加減にしろよ……………？ 終いにゃ土に返すぞ？」

適当に私でも持てる銃を突き付ければ。

「こ、これで殺されるならむしろ本望うううう」

腰が引けた。

むしろ抜けた。

やばい。本物の変態を侮っていた。

どうしよう、コレ。

やっぱ異端審問にかけて異端者認定して、サクッと殺してしまった方が良いのではないだろうか。

主に私の精神衛生上。

しかし、何で私はいいつを助けたかな。

助けなければ良かった。

いやもう、本気で。

私は『場違いな工芸品』と変態に囲まれ、ただひたすらに途方に暮れた。

私がジジイに『褒美』として求めたのは、ロマリアが数多く保管する『場違いな工芸品』を置いてある場所に自由に出入りする権利と、そしてロマリアから帰る時に幾つかの『場違いな工芸品』を私個人に譲渡すること。

ジジイは二つ返事で許可をくれた。

当初は、いくらジジイがそれなりの高位にあるとはいっても、見た
り触ったりするところまではともかく、教皇や他の者の手前、貰う
事は出来ないだろうと半ば諦めていた。だが、ジジイが私の想像以
上の権力を所持していたこと、そして例の事件によって、今や教皇
はジジイに逆らえないことなど、予想外にうまくことが運んでくれ
たおかげで、幾つかを持ち帰ることまで出来る事になったのだ。

とはいえ、武器関連に関しては私は完全に素人だ。

整備やら構造やらはおろか、使い方すら分からない。

だがまあ、出来ない事は出来る奴にやらせてしまえばいいのだ。
そのために、人材を集めているのだから。

と、いうことで。

ジジイから許可をとった翌日、ロマリアに連れて来ていたテオドー
ルを呼び出した。

ジジイはまたしばらくは帰って来ないらしいし。
今のうちに行動して置いた方が良さだろう。

「今日は何のご用ですか、お嬢様」

「ちょっとついて来て貰いたい場所があつてね」

不思議そうな顔。

「僕がですか？」

「ああ」

と言うか、君以外に適役がないんだよね。
そもそも君をロマリアに連れて来たのはそのためな訳だし。

「どこに、と言うか何しに行くんですか？」

「ついて来れば分かるさ。」

少くとも、君にとつては悪い場所ではないだろう」

あれだけ銃が好きなんだから、きっとあれだけの『場違いな工芸品』
を見ればきつと驚くんだろうなあ、なんて、エラく気楽かつ、常識
的かつ、一般的な事を考えていたのだが。

正直変態をなめていたとしか言いようがない。

最初は、ぽかんとしていた。

だが、ソレらが何なのか理解した瞬間に、奇声を上げてそちらへと
駆け寄る。

思う存分に見て、触って撫でくり回して。

悶えて鼻血を吹き出し、とんでもない痴態まで披露してくれた。

これっぽちも見たくはなかったが。

いや、だがこれは、テオドールにここを見せたらこうなるだろう、
という予想が出来なかった私が悪かったに違いない。

ここまで変態だと思わなかったとか、むしろ思ってたまるかとか、
それはすべて言い訳にすぎないのだろう。

最初に会った時の彼の言動から、こうなる事を予測し、覚悟を決め
ていなければ

そんな事出来るものか、畜生め。

とりあえずはテオドールを張り飛ばして蹴って脅して宥めて、なんとかこちら側の世界にサルベージすることに成功。

にしても、『いいかげんにしないと殺すよ』という脅しよりも、『死んだら二度とここに入りに出来ないし、これらに触れることも出来ないよ』って言葉の方に反応するとは。
筋金入りだな。

これが己の部下かと思えば、余りに情けなくて笑いしかでてこないいや、ある意味では、テオドールが現実世界に戻って来れたことに對する喜びの笑いなのかもしれないが。

「ともかく、君にはここにある武器の解析と研究を任せるから」

「本当ですか?!

あああ、あなたについて来て良かったですお嬢様ああああ」

「やかましい。あんまり五月蠅いと追い出すよ。

とにかく、君はこれらを参考に武器が作れないか考えて。ここにあるのは、もう入手出来ない物ばかりだから」

「かしこまりましたあああ。お任せください!!--!このテオドール、命に代えても研究し尽くしてみせます!!--!」

だから五月蠅いつての。

こいつ、何か気付いたらここでミイラになってるような気がする。気を配ってやらないと。

って、あああああああ、何で私が変態の心配をしてやらないといけないんだ！？

「そう。ああ、幾つかはゲルマニアの方に持って行くつもりだから、そちらの選定もよろしく。」

全部とか言ったらここにある武器すべて壊すから」

嘘だけど。

ショック受けた顔してるな。

なんて分かりやすい。というか、言つつもりだったのかよ。

はあ。

「じゃ、くれぐれもあんまりアホな事はしないように」

次来た時に、ここが跡形もなかったとかはさすがにやめて欲しい。

どこまで効果があるのかは不明だが、そう釘をさしてその場を後にした。

いや、分からないなりに一通り見ておくつもりだったけど、今日はもうダメだ。

ありとあらゆるエネルギーを根こそぎ持って行かれた感じ。

帰って寝よう。寝て、美味しいお菓子を用意させよう。それを食べて、すべてを忘れよう。

そうだ、そうしよう。

ふふふ。

変態なんて滅びれば良いのに。

その26

薫り高い紅茶を口に運ぶ。

「それにしても、セレナ様とお茶をするのもこれが最後になるなんて寂しくなりますわね」

ヴィットーリアが、ほう、とため息を漏らす。

「そうですね・・・」

これでヴィットーリア様にもしばらく会えないとなると、私も寂しいですわ」

そう。大波乱のロマリア旅行もそろそろ終わり。

当初の予定では1カ月程度の滞在の予定だったのが、マルティノッジ枢機卿の突然の『病死』、そしてそれに伴う葬式や、仕事の引継ぎや、新枢機卿の選定、ガリアとの折衝。気付けば、ロマリアに来てから優に2カ月以上が経過していた。

私としてはその間に魔法 特に虚無について や、ロマリアのあれこれを調べたり、『場違いな工芸品』を研究したり、ヴィットーリアと親しくなったりと、大変有意義な時間をすごせて大満足なのだが。

大多数の枢機卿たちが帰還しても、ジジイは仕事が終わらず残っていたのが、ついに明日、私たちもゲルマニアへと戻ることになった。

時を知らせる鉦が鳴り響く。

「ああ、そろそろ帰らなくては。

それでは、さようなら、ヴィットーリア様。またお会いできる日を楽しみにしていますわ。ヴィットーリオ君も、さようなら。元気でね」

最後に一度だけ、赤ん坊を抱きしめて。

「さようなら、セレナ様。道中お気をつけて」

手紙を書くことを約束し、ヴィットーリアとヴィットーリオに見送られてセレヴァレ邸を後にする。

ヴィットーリアは原作に書かれていた通り、本当に慈愛に満ちていて優しい人だった。私がジジイの愛人だってことも、とうに知っているだろうけど、一度も蔑みの目で私のことを見なかったし。

ヴィットーリオについては、『最近幼い子供が、宝石などを飲み込んで、のどに詰まらせるという事故が多いようですわ、ヴィットーリオ君もお気をつけて』とかとりあえず言っておいたものの・・・どこまで効果があるか。

これでヴィットーリアが『火のルビー』をヴィットーリオから遠ざけてくれるといいのだが。

そして翌日。

「ジョアンナ、用意は良い？」

「荷物などは全てまとめておりますが・・・」

さすがジョアンナ、仕事が速い。

ん？何か引つかかることでもあるのか？妙な顔してるが。

「あの、セレナ様、テオドルさんは・・・」

「・・・」

あああああああ、忘れてたよ。

そうだよ、あの変態に今日帰るとか伝えてないよそう言えば！！

「しまった。言い忘れてた。迎えに行かないと」

「一緒にいたしますわ」

ジョアンナと一緒に足早に『場違いな工芸品』置き場へと向かう。

「そういえば、こちらに着いてしばらくしてからテオドルさんのお姿を見てませんでしたけど、この先にいらっしゃるのですか？」

ああ、ジョアンナにはロマリア内での情報収集とかして貰ってたから、そういえば連れて行ったこと無かったっけ。

「言っただろ？『場違いな工芸品』と呼ばれること別の場所から送り込まれるものの中に、このハルケギニアの物とは段違いに進んだ武器が含まれてて、それをロマリアは集めてる。やつがいるのはそれが保管してある場所だよ」

実際は『ガンダールヴの槍』として召喚しているのだが。

『異世界人』との接触も、ロマリアは何度かしたことがあるというから、同郷のものと会えるのではないかと期待していたが、調べてみると最後の接触は百年以上前のこと。

どうやらこの世界に居る『異世界人』は今のところ佐々木武雄氏だけのようだ。

「ああ、ここだ。・・・ジオアンナ、あまり驚くなよ」

「え？驚くって、『場違いな工芸品』にですか？」

「いや、そっちじゃない」

そっちならどれだけ良いことか。

足を踏み入れ、ソレに気付いたジオアンナが鋭く息を呑んだ。それですんだんだから上等だ。

私はソレに向かって声を張り上げた。

「テオドール！帰るよ！」

返事は無い。

「あ、あの、セレナ様、アレは本当にテオドールさんなんでしょうか？」

そこにいたのは、骨と皮ばかりに痩せこけ、一体何日風呂に入っていないのか、髪はぼさぼさ、髭は生え放題、薄汚れ異臭を漂わせた、浮浪者じみた男だった。

「ああ。正真正銘、テオドルだよ」

なにせこの変態、ここに来てからろくに眠らず、運んでやった食事
も殆どとらず、ただひたすら『場違いな工芸品』をいじり続けてい
るのだ。

今も私の声に反応すらせずに、一心不乱に一つの銃器を分解してい
る。

「テオドル！！！！」

聞こえてないな、これは。

意を決して近づき、そばにあった銃身の長い銃でどつく。

「テオドル！！いいかげんにしろよ」

さすがにこれには反応を見せ、やっと手の中にある銃から顔をあげ
る。

「お、お嬢様ですか・・・」

かすれきつた声。

「やっと気付いたか。あのさ、もうロマリアから帰ることになった
から。君もここから出て、準備を・・・」

言葉の途中で、テオドルの充血しきつた目にぶわりと涙が浮いた。

「い、いやだ。僕はずっと彼女たちと一緒に居るんだ。絶対に帰り

たくなんか無い!!」

銃に向かって彼女とか言うんじゃない。

あーもー。これだから変態は……。

見れば、あの気丈なジョアンナが盛大に顔を引きつらせてこちらを見ている。

君の気持ちは本当に良く分かるよ、ジョアンナ。出来れば私も遠くから他人事として見ていたいくらいだ。

「私が帰るっていったら帰るの」

でも、一応これの身柄に責任を持たないといけない立場にあるから、そう言ってられないんだよな。

あーあ、本当にどうしてこれを助けたりしたんだろうか。

「かえ……」

「帰りたくない、とか言ったら、ここにある『場違いな工芸品』を君の目の前で一個一個燃やしていくから」

一応、ブリミル教の所蔵する『ガンダールヴの槍』であるから、私の一存でそんなことは出来ないのだが、そのことを知らないテオドルは盛大に固まった。

「おとなしくこの中からいくつか選んで、それをもってゲルマニアに帰るか、目の前で全て燃やされて何も手に入らないか。どちらかを選んだね」

がくりと、かわいそうなくらい大きく肩が落ちる。

「そんな・・・」

「さあ、どちらを選ぶ？」

聞かなくても答えなんて分かりきってるけどさ。

「分かりました。おとなしく帰ります・・・」

「そう。じゃあさつさところを片付けて、もって帰るもの選んで」

しょんぼりと、こちらに背を向けながら分解していた銃を組み立てなおし、選び始める。

ああでもないこうでもない、かなりの時間をかけて選び出されたのは6丁の銃と、いくつかの弾丸。

「これでいいの？」

「はい」

ふうん。ま、何を基準にこれを選んだんだか私には分からないけど、テオドルが良いと言っのならそれで良いのだろう。

「じゃあ、さつさところから出て、身支度を整えて帰る準備をして」

名残惜しそうに、何度も何度も足を止めて振り返るテオドルを、半ば引きずるように割り当てておいた、おそらくこの2カ月間殆ど使っていないだろう自室に放り込んだ。

「たぶん相当体力も落ちてるだろうから、悪いけどジョアンナ、テ

オドールの準備を手伝ってやってくれる？」

「かしこまりました」

「よろしく」

ジョアンナに後を任せ、自室に戻った。

私の準備は全て終わっているし、挨拶も済んだ。ジジイはまだ帰ってこないし。

暇だなあ。

しばらくぼーっとしていると。

「失礼いたします」

「ジョアンナ、テオドールの準備は終わった？」

「済みました」

「そう。ご苦労様」

何かジョアンナには迷惑ばかりかけているような。

「それで、そろそろ馬車の用意も出来るそうですので」

「そう。ああ、ジジイは？」

いくら全員の用意が整ったところで、この屋敷の主人であるジジイが帰ってこなければ出発は出来ない。

「もうすぐお着きになるとのことでした」

これで本当にこの国ともおさらばか。

何か色々と密度の濃い2カ月間だったな。来るときはこんな事になるなんて思っても見なかったけど。

テオドルが名残惜しさに泣き出したり、直前になって荷馬車が足りなくなつて近くの屋敷から買い取ったり。

些細なトラブルはあったものの、予定通り、私たちはロマリアを後にした。

煌びやかな貴族街を抜け、貧民たちがたむろする大通りを走る。

「セレナや、ロマリアはどうであつたかの」

行きと同じように、ジジイと同じ馬車。

「そうですね。とても楽しかったですわ。教皇聖下にも拝謁が叶いましたし、ヴィットーリア様やヴィットーリオ君とも仲良くなれました。なにより、クザーヌ様と一緒にでしたし。それに、クザーヌ様のお役に立つことも出来ましたもの」

言えば、ジジイは満足げに頷いた。

「そうか、そうか。そなたが楽しんだのであれば良かった。また来年も連れて来てやるからの」

あんたが来年まで私に飽きてなければ、だろ？

「よろしいのです?」

「うむ。今年は色々と忙しくて、ろくにそなたにロマリアを見せてやれなんだからな。来年はもう少しのんびり出来るだろうから、色々なところに連れて行ってやろうと思つてな。アクイレイアなどにも連れて行ってやろう。あそこはなかなか美しい場所じゃからな」

「本当ですの? 楽しみですわ、クザーヌ様」

「楽しみにしておくがよい」

来年、ねえ。

来年の私は、一体どうなっているのだろうか。

まだこの男の愛人を続けているのか、それとももう飽きられ、捨てられているのか。

ん? 捨てられる?

.....

あれ? 今気付いたんだけど、私このジジイに飽きられたらまずくないか?

今まで飽きられても放り出されるだけだろうから、それまでに自分だけでやっていけるだけの力をつけ無いといけない、とかそうでなければまた新しいパトロン探さないといけないのかなあ、とか思っていたわけだが。

先代教皇暗殺の内部事情を知ってしまった私は、はたして飽きられ

たばあい、放り出されるだけで済むのだろうか。

おそらくブリミル教史上、有数の、教会組織全体を揺るがすスキャンダルを知ってしまった　　というより、暴いてしまった私を、放り出してくれるのか？

身の丈を超える物を知りすぎた者の末路が、いったいどうなるのか。前世で散々読んだミステリー小説の記憶が蘇る。

『宗教組織の闇の部分を知ってしまった一般人』って、なにこの死亡フラグは。

冷たい汗が、背筋を走る。

これ、私この男に飽きられたら、確実に口封じのために殺されるんじゃないか・・・？

口封じのために殺す、なんて前世ではそれこそ小説の中でお目にかかったことの無い話な訳だが、ここはその小説の中の世界であるわけで。

それも、私が暴いてしまった秘密は『疑わしきは罰せよ』と冤罪上等な勢いで人を処刑し続けている宗教組織のものなわけで。

まずいますまずいますまずいます。

頭の中を、ロマリアに居る間に見た『異端審問』の記録が凄い勢いで駆け巡る。ああ、くそ、読むんじゃなかった。

あ、あれ？

どうしよう。

明るい未来が見えないよ・・・？

殺される。

このままじゃ、この男に飽きられた瞬間に、確実に殺される。

どうしてこんな事になった？

なんだ？何が悪かったんだ？

調子に乗って、教皇暗殺の事情とか探らなければよかったのか。

それとも、知りえたことを胸にしまってこのジジイに伝えなければよかったのか。

あの時、あの控え室で扉を開けさえ、教皇たちの会話を盗み聞きさえしなれば……。

どうしよう。

本当にどうしよう。

これもう、飽きられなければいいじゃないとかそういう問題じゃないか？

何かの拍子で、ジジイが私に『この事』を知られてるのがまずい、とか思ったらアウトじゃん。

ああああああ、それにそう言えば、ジジイに話す前にすっかりニコルにも話しちゃってるし。

これ、ニコルの命も危ないよね？

ごめん、ニコル。君の命を危険にさらすつもりじゃなかったんだ。本当にごめん。

もしものときは道連れになってね。

・・・何をあほなことを考えてるんだ。

とりあえず、ニコルには後で気をつけるように伝えるとして。

今のところ、『私が知っていること』を知っているのはニコルとジジイだけだけど、これが何処かに漏れたりしたら・・・。

ひょっとして、最悪の場合ブリミル教全体から命を狙われたりとか？
事の顛末を詳しく知っているのは、一部の枢機卿だけだけど・・・。
そんなこと、何の慰めにもならないよなあ。

それこそ私を『異端』認定してしまえば良いわけだし。

『異端者』であるテオドール保護しちゃったからなあ。言い訳できないよなあ。

ジジイが私に飽きない内は、守ってくれるかもしれないけど。
でもこれでジジイに飽きられたり、ジジイが死んだり失脚したりしたら・・・。

私VSブリミル教？

メイジでもなんでもない私一人で、ハルケギニア最大の宗教と戦えと？

え、なにこの無理ゲー。

なんか始まる前からもう既に詰んでるじゃん。

え？あれ？

わたし、どうすれば・・・？

復讐云々の前に、生き残るビジョンが見えないんですけど・・・？

その27

どうしようどうしようどうしよう

ジジイやジョアンナ、ニコルや、あのテオドールにすら心配されながら、私は自分自身の絶対絶命な状況に頭を抱えていた。

とりあえず、ジジイに飽きられないためにも色々と頑張る必要があったと言っのに、一体何をしていたのだから。

私としては、死ぬこと自体はそう恐ろしいことではない。

もちろん、『拷問の末の無惨な死』なんてものはごめんこうむりたいが。

だが、この世には死ぬより恐ろしい、おぞましいことがあることだって知っている。

たとえば、ジジイに初めて犯されたとき、自ら死を選ぼうとしたように。

たとえば、私が死んで父と母が生き返るのなら、喜んでこの命を捧げるように。

でも、私はまだ死ぬわけにはいかない。

父さんと母さんを殺したやつらが、私たちを見捨てたやつらが、父さんと母さんの死を『そんなこと』と言ったあの男が、まだ幸せに生きているんだ。

やつらに復讐を やつらの幸せを、全て打ち崩してやるまでは、私は死ねない。

死んでたまるものか。

そのためなら、どんな屈辱を受けようが、泥水を啜って自分の手足を食いちぎることになるうが、生き抜いてやる。

全てが終わった後なら、喜んで死んでやるさ。

父さんと母さんの居ないこの世界に、未練なんて無いのだから。

でも、今はだめだ。

まだだめだ。

だから、何とか生き延びないと。

やつらが惨めに破滅するさまを、高笑いして見下してやるまでは。

数日間、気分が優れないとジジイの相手をすることも無く1人で考えて。

そして私は開き直った。

もう、こうなってしまったものは仕方が無いのだ、と。

悩んだところでしょうがない。

私が『先代教皇暗殺の真相』を知ってしまったことは今更変えられないんだ。

過去を思い悩んだところでどうにもならないなんて、私が1番分かっていることじゃないか。

だから今は、出来ないことを思い悩むより、出来ることを一歩ずつ。

まずは、ジジイに捨てられる日を少しでも先延ばしに出来るように、

今まで以上に技術やらなにやらに力を入れること。
どんな変態的なプレイだって受け入れてやろうじゃないか。

そうして稼いだ時間で、私自身の力を蓄える。

今回ロマリアから貰ってきた銃なんて、上手く使えばこれ以上ないほどに私の立場を強化してくれる可能性を秘めている道具だろう。これであの変態とは手を切れなくなったわけだが、いいさ。目的のためだ。例えばあいつが銃に欲情する変態でも！！！！我慢しよう。

後は娼館の経営、か？

あれは上手く使えば大きな力になるからな。今まで以上に力を入れて・・・。ああ、そういえば、あそこにもメルヒオルって名前の変態が居たっけ。

あははは。私の周りって本当に変態ばかり。

しかもその変態共が私の力の源泉なわけで、手を切ることも出来ないなんて。

ふふふ。

本当に、なんてろくでもない人生。

この世界の神だかブルミルだかって絶対、私のこと嫌いだよね？
まあ、神様も始祖の恩寵も、信じてなんか居ないけど。

もし仮に、本当に神様が居るなら、私の抱く感情は憎悪以外の何物でもないんだろうけど。

実際、ブリミルのことは殺してやりたい程度には嫌いだし。

それから、出来れば、これは本当に出来ればいいなあ、って程度だが、ジジイに変わる人物を見つける。

ジジイが失脚しようが、私を捨てようが、その代わりにブリミル教に対抗できそうな人材を見つけて繋ぎをつけておく。

でもなあ、そんなこと出来そうなのってそれこそジジイクラスの高位聖職者か、大貴族、どこぞの王族くらいだよなあ。

そんなのに伝手……。あるわけないし。

これは諦めておいたほうがいいだろう。

それにこれって、一番効果があるにはあるが、今と同じように、その人物にとって『私』と言う人間が邪魔になったら殺されかねない、って言うとしてもないリスクが付随してくるしなあ。

結局、自分が力を持たなきゃ良いように使われた拳句に捨てられることに変わりはない。

私が無視できない力を持った上で、どこぞの権力者と手を組むことが出来たら最高なんだけど。

そして、万が一のときのために保険をかけておく。

もしも、私が道半ばで倒れるようなことになったとしても、あいつらに復讐出来るように。

私の基本行動方針はこんなところ。

え？根本的なところで問題は何一つ解決してない上に具体性に欠けるって？

あはははは。

当たり前じゃないか。

そんなに簡単に解決策が浮かんだり、何とかなったりするような問題だったらさあ。

絶体絶命の問題なんて、言うはずがないだろ？

私が沈みこんでいる間も、頭を抱えている時間も、馬車は休まずにからからと進み続ける。

私が気を取り直した　　と言うよりもむしろ、開き直った時には、すでにガリアを通り抜け、トリスティンに差ししかかっていた。

最高級の宿の、最上級の部屋の寝台で身を起こす。

なんか、まともに周囲を認識するのもずいぶん久しぶりのような。

はあ、確か、昨日あたりにガリアの国境を越えたんだっけ？

普通ならば、国境を越えるときには多少検査やらなにやらで足止めを食ったりするのだろうが、私たちは枢機卿の一行だ。
国境も殆どフリーパス。

普通の街道に行くのとあまり変わらない。

さてと、私は一体どれくらい塞ぎこんでたんだろ？
食べ物とかは、差し出されたものを口に入れていたような気はしないでもないんだが。

寝室から出よう、としたところで、向こう側から扉が開いた。

「セレナ？」

「クザー又様？」

「おお、もう起き上がっても大丈夫なのかな？」

心配そうな顔で、私の目を覗き込んでくる。

「ええ、クザー又様、ご心配をおかけしました。もう大丈夫ですわ
そう言ってやれば、ジジイの顔が明るくなる。」

「そうかそうか。それならば良いのじゃ。そうじゃ、食事でも用意させよう。何か欲しいものはあるかな？」

ん。確かに多少空腹を感じるような。

「そうですわね。でしたら、何か軽いものをお願いできますか？」
食事を取りながら話を聞くと、明日の午後遅くにはトリスタニアに入れるだろう、と言うことだった。

「その後なのじゃが、そなたには悪いが、少々立て込んでいてのう
どうやら、マルティノッジの死がまだ響いているらしく、数日間
仕事でトリスタニアに滞在しなければならぬらしい。」

「病み上がりのそなたの様子もろくに見に来れぬと思うのだが」
病み上がりと言うよりも、ただ単に考え込んでいただけなのだが。

「クザー又様は、クザー又様のお仕事を頑張って下さいませ。私はもう大丈夫です。確かに、少々さびしくあります。ですが、私でも私の体調の問題でクザー又様のお仕事に邪魔になってしまいうほうが心苦しいですわ」

それに、ちょうどいいしな。

「そうか？そなたがそう言ってくれるのなら。そなたはほんに、優しい良い子じゃな」

そのことばに、にこり、と微笑んでやる。

その日は久々にジジイと一緒に寝台に入ったのだが。

うん。病み上がりがどうのとか、気にしてた割りにやることは結構遠慮ないよね。

そして、予定通りにトリスタニアに入り。

私を1人にするのをそれなりに心苦しく思っていたらしいジジイから、数日間の外出許可をもぎとって。

私はいま、タルブ村に来ていた。

「セレナ様！！」

「ずいぶん遅かったな、お嬢」

村の入り口で出迎えてくれたのは、先行させておいたナターリエと

イヴァン。

「すまないな、2人とも。ロマリア滞在が色々あって長引いてしまつてな」

「セレナ様、どうしてこの2人がここに？」

「あの、と言うかお嬢様、僕帰っていいですか？こんなところに居るよりもむしろ、宿で彼女たちの手入れをしておきたいと言つか」

「ん？2人にはちよつと人探しを頼んでいてね。

あと、勝手に帰ろうとするなよ、テオドール」

今にも馬車に乗り込んでトリスタニアに向かいそんな変態の襟首をつかみ　もちろん私がじゃない、イヴァンがだ　タルブ村に足を踏み入れる。

ていうか、君を連れてきたのにだって理由があるから勝手に帰られたら困るし。

君も喜ぶことだぞ？

ちなみにニコルは神官であり、私の都合で振り回して良い存在ではないのでトリスタニアでお留守番だ。

マントこそつけていないものの、私の服はどこからどう見ても、貴族が着るような高級品で、村の外に留めてあるとはいえ、立派な馬車に数騎の護衛。

これで目立たないほうがどうかしている。

でも、そんな視線はさくつと無視して、ナターリエたちについてい

く。

「あちらの家です」

何の変哲もない民家。

「失礼いたします。佐々木武雄さんはいらっしゃいますか？」

ナターリエが玄関口で声を張り上げる。

「はいはい、おや、ナターリエさんにイヴァンさんそれに、……お貴族様？どうなさいましたか？」

彼が佐々木武雄なのだと、一目で分かった。

出てきたの彼は、髪は白くなり、年老いているとはいえ。

その黒い瞳と言い、顔立ちと言い。

こちらに生まれ変わってから、一度もお目にかかることのなかった、東洋人特有の容姿だったのだから。

知らず、目が潤んでいた。

……。泣いてる場合じゃないな。

一度目を強く瞑って。

『佐々木武雄さんですね？』

私の口から出た聞きなれない言葉に、ナターリエ達は眉根を寄せ。

『あ……、あなたは……』

佐々木氏は目を見開いて私を見、転がるように駆け寄ってきた。私をかばうように一歩、前に出ようとしたジョアンナを制する。

『はじめまして。すこし、お話をしたいのですが、よろしいでしょうか？』

『も、勿論です。どうぞ、中にお入り下さい』

「私は少し、この人と話しがある。君たちはここで待ってて」

「ですが、」

「いいから」

何か言いたげな視線を無視し、佐々木氏について家に足を踏み入れた。

ああ、何だか懐かしいな。

古びた家に、この世界に生まれてからの幸福だった数年間、両親とともに暮らしていた時の面影を見る。

『どうぞ、お掛け下さい』

2人でテーブル越しに向かい合い、何ともいえない沈黙が流れる。

口火を切ったのは、佐々木氏の方だった。

『あの、あなたは一体……。見たところ、この世界の方のようで

すが、そのあなたが、一体何故・・・』

自分の世界の、自分の国の言葉を話せるか、か。

『私の今の名は、セレナと言います。仰るとおり、私はこの世界で生まれ育ちました・・・。ですが、この世界に生まれる前は、こことは別の世界の、日本と言う国で生まれ育った人間だったのです』

佐々木氏が目を見開く。

『つまり、前世は日本人であると、そう考えればよろしいのですかな？』

『ええ。そう考えるのが一番自然だと思います』

佐々木氏は、しばらく目を瞑った後に、なにやら納得したように頷いた。

やはり、こういったことは現代社会、科学主義に毒されて育った私より、戦前に育った彼の方が受け入れやすかったのだろう。

『お聞きしたいことがあるのです』

佐々木氏が、真剣な目で私を見る。

『何なりと』

『あなたがお生まれになったのは？』

『西暦・・・、と言うか、昭和の終わりです。きっとあなたよりも

大分年下でしょう』

彼は目を見開く。

『昭和の終わりと云うことは、陛下は！！』

『昭和天皇・・・、あなたの陛下は戦争が終わり、日本が再生してから87歳で御崩御されました。私があの世界に居たときの陛下は、当時の皇太子殿下です』

『おお・・・』

震えるような呻き声とともに、彼の目から涙が零れ落ちる。

『お見苦しいところを、お見せしました・・・。あの戦争は、どうなったのでしょうか』

私は話し出した。

南洋諸島の戦いでまけたこと。

東京大空襲。

沖縄戦。

そして長崎と広島への原子爆弾の投下。

日本の無条件降伏。

そしてそこから始まった再生と発展。

『私は、あの世界で何不自由なく生まれ育ちました。いいえ。私だけではありません。あの時代の日本に生まれ育った多くの子供は、飢えを知らずに居られます』

『良い・・・良い、時代になったのですなあ』

『そうですね……。失ったものも数多いながら、得たものも多い』
そうして私は佐々木氏に向き直った。

『全ては、あなた方が頑張ってくださいだから、私たちの手に入った物でしょう。心より、感謝申し上げます』

深々と、頭を下げる。

『何をなさいますか。頭を上げてください』

きつちりと礼をしてから、困りきったような佐々木氏の顔を見る。

『そのような顔をなさらなくても』

『ですが、貴族のご令嬢にそのようなことをされますと』

そういえば、戦前って身分制度があっただけ。

『ご心配なさらず。私は貴族ではありませんよ』

『ですが、その格好は』

『私の世話になっている方から頂いたものです』

ですからお気になさらず、と言えば佐々木氏は困ったように微笑んだ。

日本のこと、この世界のことや、日本食が食べたいなどなど。

たあいがない、でもこの世界で2人だけしか理解することはない雑談に興じて。

『そういえば、竜の羽衣って……。』

この村に来たもう一つの大きな目的 第一の目的は勿論日本人と合うこと に話を向ける。

『おお、アレの話ですか。口でどうこう言うよりも、見てもらった方が早いでしょうな』

『外の者たちも連れて行っても?』

『勿論ですとも。と言うよりも、上がっていただければよかったですなあ。何もない家ですが、外でお待たせしているよりは……』

待っていた4人と合流し、『竜の羽衣』が置いてある場所に向かった。

「さてみなさん、これが『竜の羽衣』です」

原作見て知ってはいたけど、やっぱり驚いた。

まあ、本物のゼロ戦見る機会なんて前世でもなかったしね。

「これって……」

「一体なんですか?」

ナターリエ、ジョアンナ、イヴァンが首をかしげる中。

「ひよ～～～～。こ、これはなななななんですか！？何だかとても僕の心を驚掴み～～～～」

変態が反応を示した。

さすがである。

しかし、メルヒオルといい、この変態といい、知らないはずなのに自分たちの興味の赴くものにはきちんと反応している。

これは変態の本能なのか。それともこの世界の変態には何か特殊な嗅覚でも付いているのか。

ゼロ戦に向かって突進しかけたテオドールを、イヴァンに止めさせる。

あああ、佐々木氏が何だかとても不思議そうにこちらを見てるよ。

「連れのが失礼しました、佐々木さん。ところでこれって、アレですよね？」

「おわかりですか」

「本やテレビ 記録の中でしか見たことはございませんが」

佐々木氏は愛機に近づき、ゆっくりと撫でた。

『できれば陛下にお返ししたかったが・・・』

年老いた男が、ゼロ戦に寄り添う。

それは、まるで一枚の絵のようで。

何だかとても、神聖なもののように感じられた。

『セレナさん』

『何でしょうか』

周りに人が居るのに日本語で話しかけてきた彼に、私も日本語で返す。

『こいつを、貰ってやっていただけないでしょうか』

『え・・・？』

それは思っても見ない申し出だった。

私にとっては渡りに船と言うか、とても都合がいいが・・・。

『私は、こいつを陛下にお返ししなければと、ずっとそう思っておりました。正直申せば、今でも思っております。ですが、あなたの先ほどのお話を聞いて　　なんでしたかな、平和憲法とか言う憲法もできた、戦争をしないと、そして何十年もたったあの国に、これを返すのが、どういう事になるのか　　正直、分からんです』

それに、返したいと思ってもその手段がない。

だから、貰ってくれないかと。

そう、彼は真摯に頼んできた。

返す手段は、ある。

私は『虚無』の『世界扉』でこのゼロ戦を返すことができると知っている。

はたしてそれを、彼に言っただけなのか。
彼は帰りたいと思うのだろうか。

今の時代は誰も使えるものがない系統の魔法を話して、彼を追い詰めることにならないだろうか。

ああ、でも。

『手段は、あります』

その真剣な目に、嘘はつきたくなかった。

『な、んですって!?!』

『今は失われた『虚無』と言う系統の魔法に、世界をつなげるための魔法が記されています』

絶句。

まさに、それ以外に言いようのない顔を見せる。

『お帰りに、なりたいですか?』

何事かを考えるように間を空けて、彼はゆっくりとかぶりを振った。

『いいえ。私にはもうこの世界に家族が居ます、仲間が居ます。おいて行くことのできない沢山のものを、私はここで築きすぎた』

だから、帰りたいとは思わない。

彼は、どこまでも穏やかな顔でそう言った。

『そうですか。ならば、私がこのゼロ戦をあの世界に帰しましょう』

『よろしいのですかな?』

『ええ。必ず』

そう、約束をした。

ただですら、やることが沢山で手一杯、余裕なんてどこにもない。でも、この約束はきちんと果たさなくては。

きっと、何十年も心のどこかに孤独を抱えていたのだろっ、彼のためにも。

その後、彼にニコルにその知識を伝えてもらったり、『ヨシエナヴエ』を味わったり。

数日と言う時間は、あっという間に過ぎていった。

彼の家族とも、大分仲良くなれた。

この子達が原作のジェシカやシエスタの親になるのかと思えば、少し変な感じはしたけど。

「では、さようなら」

「本当に、ありがとうございました。これでもう、思い残すことはありません」

「縁起でもないことを言わないでくださいませ。また会う日までお元気でいていただかなくては」

「ははは。そうですね、では、あなたもお元気で」

見送ってくれた彼と彼の家族に手を振り、ゼロ戦と一緒に送り返して欲しいと頼まれた手紙を懷に、馬車に乗り込んだ。

ゼロ戦は、もうしばらくは残しておくことになったが。

最後に一度、さようならと挨拶して。

馬車は走り出した。

そして。

私が佐々木氏と会う機会は、二度と訪れなかった。

このときより数ヵ月後。

佐々木氏は風邪をこじらせた末、この世を去る。

最後は、なんの憂いも感じられない、穏やかな顔だったという。

タルブから帰れば、ジジイの仕事も切りよく終わったとのことで、

また一路、ゲルマニアへ向かって移動を開始する。

「そういえば、そなたとであつたのはここであつたな」

ラ・ヴァリエール領にあるこのジジイと出会つた教会。馬車に揺られながら、遠ざかつていくそれを見つめる。

「そうですわね」

そうだ。ここが、ある意味で全ての始まりの場所。

教会から目を放し、私が生まれ育つた村　　、両親の墓のある、絶望と幸福の象徴である村の方角へ目をやる。

いつも肌身離さず持っている、首から提げた両親の形見の入った袋を握り締めた。

あの村には、行けない。

ごめん、父さん、母さん。お墓参りにも行けない。

私は弱い。

今あそこに行つたら、私はきつと立ち上がれないから。あなたたちと同じ場所で眠る道を、選んでしまうから。

だから、今は会いに行けない。

全てが終わつたら。

そしたら、絶対に一番に会いに行くから。

それまでもう少しだけ待っててね。
父さん。母さん。

絶対に、会いに行くから

第一章・完

その27（後書き）

ここまで読んでいただいてありがとうございます。

まさかこの作品を読んでくださる方がこんなに居るなんて、感激です。

とりあえず、ここまですが序章的な扱いになります。

次回からは新章に入り、銃の開発だとか、後、いわゆるNAISE I的な成分も入ってくるかと思っています。

BLは……。すごく、後です。新章が、この序章部分より大分長くなるのですが、そのかなり後ろの部分にそれに相当するようなしないような部分がある。

分かりにくい説明ですいません。

それでも読んでやっても良いかな、という方、どうぞこれからもよろしく願います。

とは言うものの、新章に入るまで、少し時間をおかせていただくことになるかと思っています。

感想は遅くなるかとは思いますが、少しずつ返していきますので。

ここまで読んでくださった方に最大級の感謝を。

では。新章でお会いしましょう。

その28（前書き）

ここから第二章になるわけですが、先に言っておきます。

何か中二っぽいキャラが大量に出てきます。

そして銃などについてはだいぶ間違った見解も多いかと。NAIS
E I 的な話もあるし。

きつと二章からは最低物と思われるも仕方がない話になると思います。
す。

それでも読んでやるぜ、という心の広いお方は、どうぞ先に御進み
ください。

その28

「お嬢様~~~~で~~~~きま~~~~した~~~~~~~~できた~~~~~~~~できました~~~~」

「語尾を延ばすなよ語尾をつつ」

まったく、良い年した男に語尾を延ばされても気持ちが悪いだだけだと言っのに。

私たちがあの大波乱のロマリアから帰ってきて、2カ月近くが経過していた。

ロマリアに行っている間もこれでもかとかばかりに怒涛の展開だったが。

帰ってきたら帰ってきたで、溜め込んでいた娼館関連の仕事は軽く死を覚悟する程えらいことになっていて、私の2カ月はそれを処理するためにとんだ。

もう、最初の頃なんて睡眠時間がほとんど取れないほどだった。

メルヒオルのヤツ。『お嬢様のお留守はお任せください』とか言ったくせに、結局殆ど何もしてなかったし。と言っかこの店はもともとヤツのものだったはず、と思いきや、なんと私がロマリアに行っている間に店の所有権が私の名義になっていた。

『お嬢様にはいつもお世話になっておりますから』とか何とか言っていたが、アレは確実に嘘だ。全ての責任やら何やらをうつちゃって女の子たちとイチヤイチャしたいだけに決まってる。

だけど、引退した子とかに私の秘書みたいな仕事をお願いしてからは、大分楽になった。

最近では自分たちでも様々なアイデアを出してくれるようになってるし、私があればこれしないと回らない期間って言うのは、もしかしたら終わりに近づきつつあるのかもしれない。

ジジイはジジイで、アレで結構有能だった故マルティノッジ枢機卿の仕事の一部を引き継いだり、ガリアに対抗するためにゲルマニア宮廷で工作に励んだり、外交に精を出したりして忙しかったらしく、私と夜を共にする回数が減った。

飽きられたら即死の運命が待っている身としては、抱かれる回数が減るのは恐ろしいながら、これで以前と同じペースだったら確実に過労死が待っていたのではないか、と思えるほどの我が身の惨状に少々複雑な気分になったりする。

ナターリエやジョアンナ、イヴァンは特に変わったことはない。

ロマリアに行く前の日常通りの生活を送っている。

ああ、ナターリエの『体を大事にしてください!!』って言う説教は増えたか。

そして、テオドルだが。

たぶん、こいつが一番今を楽しんでいるのだろうなあ。

返ってきたその日から、私が買い取った屋敷に籠もり、研究開発のしたい放題やりたい放題。

金は与えれば与えるだけ使い続ける。

軽い爆発騒ぎは日常茶飯事。

一度なんか、小火騒ぎまで起こしている。

それにも懲りず、と言うか、省みようとせず、にこの男は自分のやりたいことをやり続けた。

退かぬ懲りぬ省みぬってか？

その根性の太さは、ある意味うらやましい。

で、今日この日、新型の銃が完成したと言うことで、忙しい仕事の合間を縫って屋敷へとやって来たのだが。

「で、完成したってのはどれなんだよ？」

「はいはい。こ・れ・で……す」

やっぱり、この変態のテンションがおかしい。

おそらく銃が入っているだろう箱を頭上に掲げて、くるくる踊りだしたし。

いやもう、この男が何したって今更だけどさあ。

……。そう思ってしまう自分が悲しい。

ささつと差し出された銃は、何だか妙な形をしていた。

「これは？」

銃身が、4本？

テオドールの顔が引き締まる。

「説明いたします。銃身が4本になっている理由ですが、やはり僕の『連金』できる鉄では強度が足りませんでした」

それで少しでも長く使えるようにするために、銃身一本あたりにかかる負担を減らそう、と言うことでこの形になったとか。

4本の銃身にそれぞれ弾を込めることで、4連発まで撃つことが可能になった。

銃弾は金属薬莢式。

薬莢を生産できる量にも限りがあるとかで、今日までに用意できたのは10発ほど。

「やっぱり問題は金属の強度か」

「そうですね。僕の生産できる鉄の量にも数限りがありますし」

テオドールは『土』のラインだ。メイジとしては平均クラス。無尽蔵な生産ができるわけではない。

「ふうん。ペースはどれくらいで作れそう？」

「一応、使う部品の型とかは全てとってありますが・・・僕の問題で、1カ月に5丁出来上がれば上出来でしょうねえ」

「そのペースじゃ、販売は難しいよね。どこから人を雇ったほうがいいか？君、職人とかに伝手とかないの？」

「と言いますかあの、問題はそこじゃなくてですね」

言いにくそうに口を開く。

「たぶん、この銃売らないほうがいいです。というか、武人の蛮用に耐えられるような出来じゃないので」

「どういうことだよ？」

「なににせよ、金属の強度なんですよ。僕も精一杯の固定化をかけていますが……。そうですね、戦場で使うとなると　特にこの銃は連射がききますから、一日に十発以上は確実に打つことになります。それも、ろくに整備もしないで何日も。戦場でのんびり銃の手入れとかしてたら死にますしね。でもそうになるとこの銃は、早晩使い物にならなくなるでしょう」

銃身の破裂や、熱による変形で壊れると言う。

「たとえば、簡単な狩猟や、お嬢様の護身用レベルならまあ、騙し騙し使えばそこそこ持ちますが」

それに、と彼はため息をこぼす。

「銃弾の方も、そうそう沢山は揃えられませんしね。武器と言うのは、武人の蛮用に耐えてこそ、と言われますが、その言葉に従うとすれば、これは武器ともいえない欠点だらけの銃ですよ」

「なるほど」

やはり、色々問題は出てくるものだ。

「となるとやはり」

「ええ。鉄のほうは質のよいものを外注できれば、この多銃身式の銃じゃなくて、もっと軍用にも向いた頑丈な銃を作れるのですが」

「鉄、鉄ね。その辺は詳しくないんだよな。君、どこか心当たりはないの？」

テオドルは難しい顔になった。

「あるにはあるのですが。お嬢様はシュペー一族をご存知ですか？」
シュペー？ああ、そういえば、原作でシュペー卿の剣がどうたらとか言う話があったような。

「聞いたことだけは。詳しくは知らないけどね」

「そうですか。では一応、説明を」

シュペー一族は良質の鉄を生み出すことに長けた家系だという。その才が数代前のゲルマニア皇帝の目に留まり、爵位を授かった。軍用装備の鉄の生産を一手に担う一族。

「最近では長男がすばらしい剣を作ると言うことで話題になっていきます。ただ、シュペーの鉄は、確かにすばらしい物なのですが、国に最優先で卸すため、めったに民間にまでは流れてきません。流れてきたとしても、その希少性から値段はすこぶる高くなる」

黄金と同じ値段、とまではさすがにいかないが、それでもそれに準ずるほどの高値がつくらしい。

職人は、生涯に一度はその鉄を使って製品を作りたいと望み、傭兵はシュペーの鉄で作られた装備を手にとりたいと憧れる。

「なるほどね。やっぱり量産は難しいか」

「ええ」

他にも鉄を産している家や土地はあるものの、その質はスーパー産のものには遠く及ばないと言う。

やれやれ。なかなか上手くはいかないものだ。

「どこか他に、心当たりは？」

「うん。そうですねえ、ああ、そうだ。一つだけ、無いことも無いのですが」

歯切れが悪いな？どうしたんだ？

「いえ、これは僕も噂で聞いたことがあるというだけで」

数年前から、武器職人を中心に流れた噂。

何でも、スーパーの鉄に勝るとも劣らない鉄があると言う。

しかもそれは、メイジではなく平民が生産しているものだとか。

「確かに、時々かなり安い値段で良質な鉄が流れてくるようにはなつたんですが」

いかんせん、作り手が名もない平民だと言うことで、その鉄は低く見られるのが一般的だとか。

「へえ、良いじゃないか。いったいどこの誰なんだ？」

なんならこちらで困ってしまってもいいな。

私が乗り気でそう言う。

「ああ、待ってください。何でもその職人、もう召抱えられてしま

ったとかで。実際1、2年前から彼らの作る鉄は見てませんし」

先を越されたか。

「その囲ったっていうのは誰？交渉で何とかならない？」

「たしか、ですねえ。ああ、そうだ。何でもアルブレヒト皇子とか」

ん？アルブレヒト、だって？

「それって、例の第三皇子？」

「そうです。彼です」

アルブレヒト皇子。現帝の第五子にして第三皇子。

帝位継承権は第三位だが、確か貴族や皇族に受けがよくなかったはずだ。

母親である皇后やその一族とも対立しているとか何とか。

だが、軍部の平民や地位の低いメイジ、若手下級貴族などを率いてかなりの軍功を上げ、実際軍部　　といっても上層部ではなく兵士たちや一部の若手貴族からだが　　はかなりの支持を得ている　　と言ったことだった。

今のところ帝位後継者候補の筆頭は、順当に現帝の第一皇子。生まれた順番だけではなく、メイジとしての腕前も、そしてその英明さも並々ならぬものがあるとか。母后はこの出来の良い息子を溺愛し、彼女の実家も惜しめない援助をしているらしい。

そしてそのすぐ下には、国内有数の大貴族から嫁を取り、彼女の実家からの強力な後押しを受ける第二皇子。

何代か前に国外の貴族と婚姻を結び、始祖の血を取り入れた名門に嫁いだ第一皇女も野心家だと聞く。

そんな中で、後ろ盾も何も無いアルブレヒトが帝位をとる可能性は極めて薄い、と言わざるを得ないのだが。

原作知識を持つ私は知っている。

ゲルマニア皇帝の地位に着くのはアルブレヒトだということを。そういえば、親族を幽閉してその地位を手に入れたんだっけ？

一体ここからどんな手を使って逆転に成功したんだろうか。それは分らないが、アルブレヒトの手腕もまた、並大抵のものではないことも分かる。

それに。

「テオドール」

「はい？」

「金に糸目はつけなくて良い。シュペーの鉄でも何でも買って、軍用に耐え得る銃を一本作れ」

勿論お前の持ち得る全ての知識と技術を持って今作り得る最高のものを。

「それと、お前の知り合いの職人仲間にも私のところに来ないかと声をかけておけ」

「了解しました。このテオドール、全てをかけて最高の銃を作り上げて見せます」

さっきまではまともだったが、今はスイッチが入りかけてるな。

「開発するのもいいが、ちゃんと声もかけて置けよ」

「わかりました~~~~。これより早速銃の作成に入りま~~~~す」

言うが早、早速研究室に向かった変態の後姿を見送る。

あゝあ、絶対に後半聞いてなかったな。

仕方が無い。私のほうで情報を集めて職人に声をかけておくか。

それに、アルブレヒト皇子関連や皇室関連の情報も色々と集めなければいけないからな。

ジョアンナには負担をかけることになりそうで心苦しいのだが。

アルブレヒト皇子、後のアルブレヒト三世閣下。

原作では殆ど描写も無い、アンリエッタ王女に振られた中年のおじさんと言っただけの存在だったが。

なかなかどうして、面白そうだな。

それに、やれ格が低いの新興国家だのといったところで、ゲルマニアはガリアと肩を並べることの出来る大国なのだ。
その未来の皇帝閣下。

上手くいけば・・・。

そのためにも、何とかして面会にこぎつけないと。
どうしようか？

素直に会いに行けばジジイに不審がられるに決まってるしなあ。
向こうから来てくれれば一番いいが。

さて。どうにかして私に注意を向かせる策は無いものかな？

会ってしまえばある程度の道筋は付けられると思うのだけれど。

うーん。やっぱり急には思い浮かばないよなあ。

だけど、まあ、上手くいくもいかないも、あの変態の作り出す銃の
出来にかかってくるのだし。

一応はあの分野に関しては間違いなく天才だし。その才能だけは信
用に値するんだけど。

とりあえず、あの変態が銃を完成させるまでは私は何も出来ないん
だ。

それまでにゆっくりと考えるのでしょうか。

その29（前書き）

なんだか気づけばPVもユニークアクセスも総合評価も節目を突破していますね。

記念にこれやってほしい、みたいなものとかありますか？
あるのでしたら一報していただければ善処したいと思います。

これは別の話ですが、人物紹介とか設定とかいりますか？

その29

アルブレヒト第三皇子。

いくら他国より格は落ちるにしても、厳然たる階級主義社会の、その頂点にある皇帝の一族に生まれながら、苛烈なまでの実力主義者として知られる青年。

平民の一兵卒を参謀に任じたとか、名門貴族の息子を無能だと更迭したとか、逸話は数多い。

彼自身、非常に優秀な火のスクウェアメイジで、軍人としてのみならず、為政者としても標準以上に有能だ。

だがその性格は苛烈にして不遜。

そして、支配者然とした傲慢さを持ち合わせた男。

彼の生母である皇后が、彼の幼少のみぎりに『どうしてあんな可愛げのない子に生まれてきたのやら』そう言ったほど。

だがその傲慢さは、決して人に不快感を与えるものではなく、『この人のために働きたい』、そう思わせるものだった。
部下の進言を聞き入れる度量もあり、彼に心酔するものは軍部の若手に数多い。

だが、それ以上に大貴族や皇帝の一族には危険視され、あるいは憎まれ、嫌われていた。

彼自身に才がなければとうに潰され、殺されていただろう。
だがその才こそ、彼が疎まれる原因なのだ。

本人は誰になんと思われようが一向に気にしない男だが。

「俺の周りを嗅ぎまわっているやつがいると？」

アルブレヒトはその身を長いすに沈める。

「お前がわざわざ報告してくると言うことは、わが親愛なる家族たちとは別口と言うことか？」

互いに殺しあう関係だと言うのに『親愛』なる家族とはよく言う。

そんなことを思いながら燃えるような赤毛の青年は頷いた。

「ああ。どうやら教会関連なのはつかんだが」

「あの頭の固いジジいどもに目を付けられるようなことはしていないはずだが？」

今の段階でブリミル教までも敵に回すわけには行かないのだから。

赤毛の男 オスカー・フォン・ツエルプストーは、顎に手をあてる。

それがこの男が考え事をするときの癖だと知っているアルブレヒトは水を向けてやることにした。

「なんだ？何か気になることでもあるのか？」

「いや、な。確かに教会関連ではあるんだが。

なあ、アルブレヒトお前、クザーヌ・ゲルジオ枢機卿の愛人の噂を知っているか？」

ああ、と言うように頷く。

「一年位前から枢機卿が幼女に入れあげているとか何とか言っていたような気がするな。」

はっ、出る場所も出ていない子供を抱いて何が楽しいのか、俺には理解しかねるがな」

傲慢に嘲笑う。

そんなしぐさが似合う男だった。

まあ、そう言う彼にはダース単位で愛人が居るのだが。
オスカーもその点は似たようなもので突っ込まない。

「で、それがどうしたのだ？」

「こちらに探りを入れている大本がその『愛人』ではないか、と言う可能性があるのでな」

「ほお。面白いではないか」

「おいおい、可能性といっても無いに等しいほどのものだぞ。大体その子供、まだ7歳ほどだと言うし」

「何を言う。俺が始めて人を殺したのは7つに上がる前だぞ」

当時侍女だった女が、とある貴族に金で雇われて彼を殺そうとした。

たかが7つの子供と侮り、また、怪しまれること無く近づけるようにとろくに戦闘訓練も受けない侍女を刺客にしたのだが、それがアルブレヒトにとって吉とでた。

飲み物を運んできた侍女の様子がおかしいことに気付いたアルブレ

ヒトは、その場で彼女を詰問。

支離滅裂な弁明を繰り返す彼女にじれて、衛兵を呼ぼうとしたところつたない手つきで刃を持って襲いかかってきた彼女に反撃し、覚えたての魔法で殺した。

その後の第一声は『こんなものか』だったと伝えられている。

その後、彼女の雇い主として三流貴族の一族が処刑され、彼の

と言うよりも王宮全体の警備が厳重になったことで、しばらくは暗殺騒動は無かった。

だがアルブレヒトとしてはあの暗殺騒ぎの主犯は母方の親族であると確信しているのだが。

事実、最近　というよりも彼が成長してから頻繁に送られてくるようになった暗殺者の半分は母と、母の実家の差し金だ。いまだに尻尾を捕らえきれてはいないのだが。

だから彼にとって『7歳になる子供』が自分に興味を抱き、回りを探ろうとすると言つのは珍しいことであつてもありえないことではなく。

そして彼は珍しいことや面白いことに目が無い男でもあつた。

「よし、その女に会ってみよう」

おまけに常識にとらわれない。

その行動は時に周囲に甚大な影響や迷惑を与え　その後、それ
を処理する役目はたいていオスカーにまわってくるのだ。

何せ彼はアルブレヒトの副官であり、彼の旗下の中でも古株で、そ

して有能であつた。

何よりも一番の理由として挙げられるのは。

朱に交われば赤くなるように、たいそう優秀ではあるものの奇人変人が多いアルブレヒトの主だった部下の中で、数少ない常識人である、と言つことだろうか。

紛う事なき苦勞人である。

胃痛止めの秘薬を携帯しているとかいないとか。

彼自身もアルブレヒトと同じ火のスクウェアクラスのメイジであり、群の指揮官として、参謀としてアルブレヒトが太鼓判を押すほどに優秀で有能。

実家とは色々と複雑な事情があつて敵対関係だが、それでもツエルプストー辺境白家という、ゲルマニアでも有数の名門の嫡流として生まれた。

顔だつて悪くない、まさに『貴公子』ではあるのだが。

うっかりアルブレヒトに魅せられて臣下になつてしまったのが運のつき。というよりも運命の分かれ目。

なんて哀れな。

それでも後悔はしていないのだが。

「おい、一体何を言つて、」

「近いうちに会いに行くからな。情報を集めて置けよ。ああ、幼いとはいえ一応女だ、何か贈り物を持っていくべきか？」

アルブレヒトは敵ならば女でも容赦しないが、普段は意外とフェミニストであつた。そんなところは貴族　彼は皇族だが　らしいと言えるだろう。

何せ彼は基本女好きだし。

そんな彼の好みは出るところは出て、引つ込むところは引つ込んでいるというグラマラスな美女である。

大勢の愛人を抱えてはいる彼だが、まだ結婚はしていない。

婚約の話はそれなりにあるのだが、首を縦に振ろうとしないのだ。幼少の頃から決められていた生母の一族の姫との婚約は、彼自身が宮廷中を巻き込んだ大騒動の挙句ぶち壊したし。それでただでさえ大きな母親との溝がまた広がったのだが。

表向きは、まだ家庭に縛られたくは無い。結婚は人生の墓場だというがこの年で墓場に入って溜まるものか、俺は優雅な独身生活を満喫したい、ということに通しているが。

「さて、」

慌ててとめようとオスカーは声を上げる。

そんな彼は既婚者ながら、ツエルプストーの名に相応しくあちこちに愛人を抱えている。

「では、俺は軍の訓練を見てやらねばならぬのでな。もう行くぞ」

「人の話を聞けと　」

アルブレヒトは一瞥も与えることなく部屋を出て行き、伸ばした手は虚しく宙をかいた。

まったく、言い出したら聞かないのはいつものこととはいえ……。
思わず頭を抱える。

相手は、高位聖職者、それも政敵が倒れた今、教会の事実上の最高
権力者である枢機卿がいつに無く執着しているという噂の相手だ。

彼も彼の主君も少女にはこれっぽっちも興味は無いが、相手がどう
取るかは、また別の問題なわけで。

誤解を受けた拳句に下手に嫉妬や敵意を買い、彼らの敵と結ばれて
しまえばこれ異常ないほど厄介なことになる。

ただでさえ彼らの敵の勢力は巨大なのだ。

これでブリミル教の枢機卿が向こうに付けばどうなるか。

下手をすれば異端者扱いだ。

そんなことになればこのハルケギニア全体が敵に回る。

彼の主君もそれが分かっているわけではないが、今は好奇心が上
回ってしまっている。

アルブレヒトのその稚気とも取れる好奇心の強さは彼の魅力の一因
ともなっているのだが。

今回ばかりは。

いや、今回も、か。

オスカーはしくしくと痛み出した腹に手をやる。

もし万が一にも、ブリミル教全体が彼の敵にまわることになっても
彼の主ならば笑って立ち向かうだろう。

この程度倒せなくて皇帝を名乗れるものかとか何とか言って。
そして、負ける時になっても笑っているのだろうが。

何故だろう。何だかとてもその場面が鮮やかに想像できる。

オスカーは胃を押さえる手にさらに力を込めた。

臣下として、そして盟友としてそんなことになるのを座して見ているわけにはいかない。

やめさせるのが一番いいのだろうが。

アルブレヒトは基本的に人の話をきかず、好き勝手にやりたいことをやる人物ではあるが、臣下の進言はきちんと聞き入れる度量も持ち合わせている。

オスカーが本気でやめた方が良くと言えば諦めるだろう。

だが彼自身、話しているうちに『枢機卿の愛人』に興味がわいてきたのも事実だった。

「少し、探りを入れてみるか」

だめそうだったら、アルブレヒトを説得すればいいのだ。

もし本当に彼女が何らかの思惑があってこちらに探りを入れているならば、上手くすれば取り込めるかもしれない。

クザーヌ・ゲルジオ枢機卿は俗物であり、聖職者としては疑問符を付けられる人物ながら、一流の政治家である。

彼はこのゲルマニアのどの皇位後継者候補とも距離を置き、一定以上は近寄ろうとはしない。

アルブレヒトの敵は数多い。

もしも、枢機卿に影響を与えることが出来るであろう人物と、つな

がりを作ることが出来るのであれば、それは彼にとって大きな力となるだろう。

危険だが賭けてみる価値はある。

オスカー・フォン・ツェルプストーは主君の命令を果たすため、部屋を後にした。

その29（後書き）

アルブレヒトをこんなにしたのは一応理由があるのですが・・・。
なんか魔改造になってるような。
ごめんなさい。

その30

「あの、お嬢様」

「はい？どういたしましたか、ユリアさん」

今日も今日とて『水辺の誘い』の元・メルヒオルの執務室で書類の山と格闘していると、娼婦を引退してから私の秘書的なことをしてもらっているユリアが顔を出した。

引退したとはいえ、今でもその美貌は並々ならぬもので、最盛期にはとある貴族から屋敷を貢がれたというのも納得だ。

それでも、降るようにあつた　　実は今でも時々話が出る
身請け話をなぜか全て断り、いまだにこの場所に残る彼女は非常に優秀で、私としても助かっているのだが。

理由なんて人それぞれだし、追求しようとは思わないけどね。

いつもなら問題が起こっても笑顔を絶やさずたちどころに対処してしまう彼女が困り顔だ。

「あの、実は先ほどから2人組みのお客様が『責任者を出せ』と下のほうで騒いでおります」

「まだ始業時間ではございませんよね？それに、護衛の方はどうしましたの？」

最近は余裕が出てきたので、大金を払って護衛、それもメイジの護衛を3・4人は常駐させていたはず。

「それが、お客様の方が高レベルのメイジのようで。時間外ですと申し上げても聞いていただけず」

大金を出しているとはいえ、高レベルの傭兵が『娼館の護衛』なんていう仕事を引き受けるはずが無い。いるのはドットと、ラインがせいぜいだ。

「トライアングル以上ということですか？」

「ええ。それにかなり戦いなれているようで、護衛の方があつという間に沈黙させられてしまいました」

おいおい、なんて厄介な。

まだ準備時間で、客がいない時間だったのが不幸中の幸いか。

「非番の護衛の方にすぐに連絡を付けてください。それと、けが人の様子は？」

「奥に運びましたが、気絶させられているだけのようです」

「そうですか。なんにせよ、これ以上好き勝手にさせるわけにはいきませんね。メルヒオル様は？」

「今は出かけております」

肝心なときになんて役に立たない。

「私が出て行くわけにも参りませんし、困りましたわね……。いたしかたございません。別に代役を立てましょう」

責任者だと私が出て行ったところで、この子供の姿ではふざけているのかととられるのがおちだ。事態を余計に悪化させかねない。

誰に頼もうかと、候補を思い浮かべて、

「それが……。どうやら相手はお嬢様のことをご存知のようですね」

「はかな。」

私がこの責任者だということは殆どの者は知らないはず。

『枢機卿の関係者』が娼館に出入りしているとないささか外聞が悪いので。

だから私が『枢機卿の愛人』だということも、ここの娼婦たちの殆どは知らない。

おそらくメルヒオルの親戚の娘だと思っているはずだ。

「本当なのですか」

「ええ。とりあえず私が責任者ということで行こうとしたのですが、相手にもされず……。その時に、『ずいぶん可愛らしい責任者』と話したいと」

『可愛らしい責任者』ねえ。

これは完全にばれてるかな。

しょうがない。

「では、応接室のほうに通してください」

「かしこまりました」

ばかな。何故この二人がここに来る！？

応接室に入ってきた2人組みの姿に、反応しないようにするので精一杯だった。

彼らの容姿は、最近調査書で目にしたものとそっくり同じだったのだから。

動揺を見せないように、努めて静かに呼吸をする。

回りを探っていたことがばれたのか？

しまったな。

テオドールに頼んでいるものはまだ完成していないぞ。

「はじめまして。どうぞお座りくださいませ。

私がここを預からせていただいているものです。本日は何かございましたでしょうか？」

私は上手く笑えているだろうか。

念のために服の下に携えてきた、テオドールから渡された銃にそれとなく手を這わせる。

「はじめましてだな、ミス・セレナ。ああ、これはお近づきの印だ
とでも思ってくれ。可憐なあなたにはぴったりだろう。
教会にも映えるかと思って白にしてみた」

渡されたのは大きな真つ白な薔薇の花束。

なんつー気障な男だ。

ていうか、教会にも映えるように、って。
完全にこっちの素性ばれてるよね。名前も知ってるみたいだし。

「ありがとうございます。ああ、ユリアさん、あなたは席をはずし
てください。そのかわりナターリエをここに」

何を言われるか分かったものではない。
部外者には席を外してもらったほうがいいだろう。

ナターリエは、私がここにいる間はまだ店に出ない女の子たちに色
々と教育してもらっている。
1・2を争う人気だったナターリエの話は、彼女たちのためになる
だろうから。

「かしこまりました」

ユリアは一礼して出て行く。

しばらくの間、静寂が部屋を支配する。

私は笑顔を保って頭の中を整理するので精一杯だし、この2人は私
や部屋を興味深そうに眺めるだけ。

この2人が私のことを明確に認識してここに来た以上、全て知られていると考えたほうがいいだろう。

さすがはいずれ皇位を担う大国の皇子。

私程度では相手にならないということか。

「くくくつ。何もそんなに緊張しなくとも、とって食いはしない」

向かいの長いすに腰掛けていたはずの男 アルブレヒト皇子が
いつの間にか私の目の前に立っていた。

あごに手を当て、上向かされる。

「アル、何を 」

片割れの、オスカー・ファン・ツェルプストーも、これは予想外だったらしく声を上げた。

「あら。いきなり店で暴れた見も知らぬ男性方と同じ部屋にいて、緊張するなと仰るのですか？」

見下ろされる視線から、絶対に目をそらさない。
虚勢だけど、曲げられない意地でもあった。

「ふん。面白い」

三者三様に張り詰めた空気が流れて

「失礼いたしま、セレナ様つつ」

入ってきたナターリエに、場の空気が動き出す。

「セレナ様から離れなさいっ」

「アル、失礼だろう」

ナターリエが私とアルブレヒトの間に割って入り、ツェルプストーが引き戻す。

「大丈夫ですか、セレナ様」

心配そうにこちらを見るナターリエ。

「心配要りませんわ、ナターリエ」

「連れが乱暴なことをして申し訳なかった」

まじめな顔でこちらに謝罪する赤毛の男。

どうやら報告書に有った通り、すいぶんとまじめな常識家らしい。破天荒な主人に振り回されているのだろう。気の毒に。

「いいえ。それで、あなた方は一体？」

「分かっているのではないか？」

2人とも、何も言わずにこちらを見ている。

さて、どうしようか。

下手な演技は通じない、というか完全に確信を持ってここに来たみたいだし。

「これは失礼いたしました、アルブレヒト皇子殿下、ツェルプスト

「少将閣下」

知らないふりも、出来ないしねえ。

言えば、アルブレヒトの顔が傲岸な笑みを浮かべる。

隣でその笑顔を見てしまったツエルプストーが頭を抱えているが。

「くく。どうやら当たりだったらしいな。ならば何故俺たちがここに来たのかも分かっているだろう？」

何故俺の周りを探らせた？」

どう答えようか。

「鉄が欲しかっただけですわ」

まあ、ここは正直に言ったほうがいいだろうね。別に鉄が欲しいことは悪いことではないんだし。

「鉄、ですか」

2人がなんだか予想外なことを聞いた、みたいな顔をしてこちらを見ている。

おいおい、じゃあ一体なんだと思ってたんだよ、あんたらは。

「ええ。私が抱えている職人が、良質の鉄が欲しいといひまして。かといって、シュペーの鉄は希少で高価でございましょう？それでアルブレヒト皇子殿下が抱えていらっしゃるという方の鉄を、こちらに流していただけなものかと思いましたが」

「俺が抱えている者はメイジではないが」

「それがどういたしましたの？品質はこちらの職人が保証しているのです。誰が作ったのかなんて些細なこと」

「ふむ・・・」

どうやら納得してくれたらしい。

まあ、本当のことだしねえ。

ひと段落着いたのを察したナターリエが、それぞれの前にワインを差し出す。

大分予定はずれたが、考えようによっては接触する手間が省けたんだ。今のうちに交渉してしまおうか。

「いかがでしょう？少々都合してはいただけませんか？もちろん、相応の代金はお支払いいたしますわ」

2人は目を見交わせて、

「一つよろしいでしょうか」

口を開いたのはツェルプストーの方。

「なんなりと」

「なぜ、鉄が必要なのでしょうか」

私は服の下に付けてあった銃を取り出す。

このドレス、一見してそうとは分らないが、いろいろなところに

収納がついているのだ。

ソレを目にしたツエルプストーが、杖を取り出し私とアルブレヒトとの間に立ちふさがった。

さすがは本職の軍人。

動きがいい。

でも心配しなくても私はアルブレヒトを撃つたりはしないけど。つて言っても、これが彼の仕事なんだから仕方ないか。

でもできれば殺気を向けるのはやめて欲しい。

いや、勿論本気ではないのだろうけれども。

それに反応して私をかばうように動こうとするナターリエをそれとなく抑えて。

気付かないふりをして、銃を差し出す。

「こちらをご覧下さいませ」

「・・・、これは・・・」

ソレが何なのか気付いたらしい彼が驚愕の視線をこちらに向け。

「なんだ？オスカー」

ひょいと、覗き込んできたアルブレヒトも、まじめな顔で私に向き直る。

「これは、もしや」

「ええ。連射のきく銃ですわ。といっても四連だけですが」

2人の顔つきが、見る見る軍人のものになった。

当然だ。今までは単発銃だったものが、連射製になったのだ。まさに革命的な発展だろう。

そして、有能な軍人である彼らにはそのことが痛いほどに分かっているはず。

「なるほど。これを量産するために鉄が必要だと？」

「いいえ」

まさか肯定の返事以外が帰ってくるとは思わなかったであろう二人の注意が銃から離れ私に向くのを確認して。

「これはあくまで、質のいい鉄が手に入らなかったからこのような銃になりましたの」

意味、分かるよなあ？

「良質の鉄が手に入るなら、これ以上の物が作れると？」

「その通りですわ」

「どれほどの物となるのだ？」

「そうですね……。殺傷能力も飛距離も狙いの精密さも連射製も、少なくとも従来のものの数倍にはなるはずですわ」

顔色が変わったね。

アルブレヒトの最大の手勢は平民の兵士たち。

これを聞いたら、無視できないよねえ？

「そして、出来上がり次第、こちらの銃をアルブレヒト皇子に優先的に流す用意もございます」

欲しいでしょう？

欲しくないわけが無いよねえ？

「なぜ、俺に？」

「必要でございましょう？いずれ来る戦いに」

玉座、欲しいんでしょう？

「そうではない。何故俺を選ぶ？わが親愛なる兄上や姉上でなく」

「さて。何のことだか分かりかねますが……。私、負ける勝負は嫌いですのよ。勝負に出るのは勝つと分かっているときだけですよ」

だって私は知っている。

この男が皇帝の座を手に入れることを。

分かりきった、私にとっての出来レース。

「ク・・・ククク・・・ハハハハハ。面白い、面白いではないか。いいぞ、女。お前の口車に乗ってやろう。」

アルブレヒトの目が、獲物に狙いを定めた猛獣のように光る。

正直、少しばかり、いやかなり怖い。

たぶんこの男は、生まれつきの支配者だ。皇帝の座に座るために

生まれてきたような男。

でも、今は気おされてはいけない場面。
本能的にそう悟った。

ここで、今ここで引いてしまえば、この男にとって私はただの便利な手駒に成り下がる。

そんなわけにはいかない。

銃というこちらの最大の切り札を切ったんだ。
最低でも対等の立場に立たせてもらう。

そう、決意を視線に込めてアルブレヒトを見返した。

「ふん。つくづく面白い」

アルブレヒトだけでなく、ツェルプストーも興味深げに私を見据える。

「一月」

「ん？」

「一月後には、あなた方にお見せする事ができるだけの物が仕上がっているはずですわ」

テオドールも遅くともそれぐらいで完成するって言ってたし。

今日はこの辺にしておこうか。

実物を見せてからいろんな事をとり決めるほうが良いだろう。

「期待しておくぞ」

「かしこまりました。」

本日はわざわざご足労をありがとうございました。それに、お騒がせしたお詫び、と申すのもなんですが、当店で甘いひと時を過ごして行かれませんか？」

書類によると女好きらしいし。

「ほお。面白そうだな。そういえばこの店は最近色々と評判になっているそうではないか」

へえ。結構有名になったものだな。

最近はお上級貴族らしき客も増えてるみたいだし。

「どうぞ御緩りと」

「ならば、女、ナターリエとかいったか。俺の相手をしないか？」

ナターリエが困ったようにこちらを見る。

「彼女は私の侍女であって、こちらの店のものではございませんわ」

「それは残念だ。では先ほどのユリアとやらは？」

さすが女好き。名前なんてろくに呼んでないのによく覚えていらっしやる事で。

それも見事に良い女ばかり。

「彼女もだめです。」

そろそろ店のほうも開くでしょうから、そこで、

グイ、と手を引かれる。

「俺としてはお前でも構わんのだがな？」

「アルブレヒト！！」

私は構わないけど、ジジイにばれたら面倒だし。

「申し訳ございませんけれど。それにそちらのご趣味は無かったか
と思いますか？」

この男の愛人は確か成熟した美女のはず。

「確かに興味は無いが、貴様は面白い」

変な風に興味を持たれたな。
やれやれ。

重ねて断れば、あっさりと引いたけど。

一体なんだったんだ？

ただの冗談か？

部屋を出て行った2人はさんざん楽しんだようで。

明け方近くに帰っていった。

この後2人がこの『水辺の誘い』の常連となったのは、まあ余談だ
ろう。

その31

「先ほどからずいぶんと上機嫌だな」

オスカーは彼の主君のあまりに分かりやすい態度にため息を漏らした。

彼の決して短くは無い主君に振り回され続けてきた経験上、この男が上機嫌にしているときは　　主に彼にとって　　ろくな事にならない。

「あのセレナとか言う女、ずいぶんと面白い。
それに思わぬ拾い物もあったのだ。これが上機嫌にならずにいられるものか」

「確かになかなか見所のありそうな子供だったが。
だが、あの『銃』は確かに予想外だったな。あれほどの物を作る職人が在野に埋もれていようとは」

いいながら、内心舌打ちがもれる。

もう少し職人関連に気を配っておくべきだった、と。

あれほどの人材を他人に渡してしまった。偶々、なぜかこちらに味方してくれたから良いようなものの・・・。

あの『銃』がただでさえ強大な主君の敵に流れていれば、こちらの勝ち目は薄くなっただろう。

それに、あの子供が彼らの敵の手先、もしくは枢機卿側の間諜ではないとは言いい切れない。

アルブレヒトは、一般的に皇位継承者の中ではそれほど有力ではないといわれている。その彼らに、どうして味方しようとするのか。
あの『銃』ならば彼らの敵に持っていったとしても、かなりの評価

をもらえるはずなのに。

勿論、彼女に会いにいく前に身辺調査は済ませたが、この世に『絶対』は有り得ない。

有能な軍人である彼は、その事を良く知っていた。

実際のところは、テオドールが連射銃を開発できたのはロマリアで『場違いな工芸品』を研究することが出来たからだし、セレナがアルブレヒトに近づいたのは、原作知識によって彼が皇帝位につくことを知っていたからなのだが、そんなことを彼が知るはずが無い。

「眉間にしわが寄っているぞ、オスカー。せつかくの色男が台無しだ。いや、むしろ女どもにはそのほうがもてるのか？」

「からかうな。お前とて分かっているだろう」

わずかに語気を強めた忠実な部下を、アルブレヒトは鼻で笑う。

「あの女が、俺たちに近づいたのに裏があるの？」

「分かっているのなら、」

「それがどうした？」

アルブレヒトの笑みに、獰猛なものが混じる。

「俺が部下に絶対の忠誠を求めたことがあるか？」

アルブレヒトはオスカーの、軍人としては長めの髪を手に取り引き寄せた。

「貴様を配下に加えたときも言っただ、オスカー・フォン・ツエルプストー。俺は貴様らを信用しよう、重用しよう。だが、裏切るなどは言わぬ。俺は部下に忠誠心など求めぬ。裏切りたんならば勝手に裏切るがよい。俺はその全てを受け入れて見せよう。高々臣下の裏切りごとき、御すことができずして何が皇帝か。裏切りごときで倒れるようならば、俺がそれまでの男だったということよ。」

その程度の人間だと言っのなら、生きていても価値など無い。その程度で倒れるものを皇帝だなどと、誰が認めても俺が認めぬ」

爛々と、狂気にも似た光を瞳が放つ。

それを間近で見て、オスカーは静かに瞑目した。

「ああ、そうだな。お前はそう言う男であつたな、アルブレヒト」

アルブレヒトは生まれながらの支配者だ。

だがその本質は決して国主に向いたものではない。

戦って戦って戦って、その先に破滅が待っていると知りながら、笑って突き進むような男だ。

勿論、皇帝となればその責務を十二分に果たすだろうが　それは彼の本質を歪めることに他ならない。

もし。

だから彼は思うのだ。

世界に『もしも』など有り得ないことを知りながら。

『もし真実皇帝たる器の人間が皇家にいたならば』と。

皇帝として全てに秀でているような、もしくは足りないところはあっても臣下を重用し、それを補えるような器を持った人間、アルブレヒトを用いながら、その狂気を受け止めることの出来る人間が現皇家にいたならば、話は簡単だった。

彼らの進むべき道も、もっと優しいものとなっていただろう。

もしそんな人間がいれば、アルブレヒトは喜んで彼女 に仕えただろう。 あるいは

そうすれば、アルブレヒトは自分の本質を歪めることなく生きていくことが出来た。

彼が帝位にさえつかないのであれば、好きなだけ好きなように戦い散ることが出来たのだ。

だが今の皇家にいるのは、皇族とは名ばかりの小者や愚者ばかり。

だからアルブレヒトは選んだ。

選ばざるを得なかった。

彼自身が帝位につく道を。

自分らしく生きてそして死ぬことを諦める道を。

皇帝になれば、もう無茶は出来ない。

全てを賭けて戦うことは出来ない。

皇帝は国そのものだから。

全ての国民を背負うものだから。

もしかしたら、だからこそ、アルブレヒトは危うい道を選ぶのかも
しれない。

オスカーはふと、そう思った。

今ならば、まだ皇帝ではないから。

今ならば、まだ彼は彼として死ぬことが出来るから。

だから賭けのようなことを、わざわざ危険な道を選んでいるのではないか、そう思って。

ふと、主君の普段の態度を思い返してあっさりその考えを捨て去った。

そこからどう見ても、これはやつの素以外の何物でもないだろう、と。

だが、本当に。

もしも、まともな皇帝がいたならば。

彼は彼のために、その有り得たかもしれない可能性を悼んだ。

オスカー・フォン・ツェルプストーが現第三皇子アルブレヒトと出会ったのは、今から十年以上前に遡る。

オスカーは先代ツェルプストー辺境伯の長男としてこの世に生を受けた。

彼の父は、当時ゲルマニアにこの人ありと歌われた將軍。『英雄王』と名高いトリステイン王フィリップと並び賞されたほど。

幼いオスカーは父を心から誇りに思い、尊敬していた。父のようになりたい。

彼にとつて、父はまさに英雄だった。

だが、彼が10に上がる前に、父は戦場で受けた傷が元でその命を落とす。

そして、まだ幼い彼に爵位を継がせるのは無理があると。

そう言つて、当主の座を父の弟に奪われた。

口では『オスカーが成人すれば返す』そう言っていたが、叔父にその気がないことなど一目瞭然だった。

だから、彼は軍人に成ることを選んだ。

別に辺境伯の地位が欲しかったわけではない。

ただ。

あの男　父を妬み、媚びへつらいながら影で父を失脚させようと画策していた下種の手に偉大な父のものだった爵位があるのが我慢ならなかった。

このゲルマニアで手っ取り早く力を手に入れるには軍人になるのが一番だった。

また、軍人としての父の姿が脳裏に強く焼きついていたからかもしれない。

13の歳。彼はゲルマニアはウィンドボナの士官学校の門をたたいた。

学生生活は順風満帆といってよかった。

士官学校の教官たちは、一部例外こそあるものの皆厳しく、そして公平だった。

もつともそれは軍に影響を及ぼすような大貴族や有力者の子弟は、殆ど魔法学院にいくからかもしれないが。

常に努力を絶やさず、才能もあつたオスカーは2年に上がる頃には魔法の腕はトライアングルに、座学でも常に主席をキープしていた。

さすがは將軍の子。

そう囁かれるようになり、彼はその頃やっと、自分が窮地に陥っていることに気付いた。

いつからだろうか。

帰省したときに顔を合わせる叔父の顔に憎しみがあからさまに浮かび始めたのは。

いつからだろうか。

従兄弟たちの顔に妬みが浮かび始めたのは。

いくら賢いといつても、彼は所詮大事に大事に育てられた良家のお坊ちゃまだった。

才能にあふれ、両親から溢れるばかりの愛情を注がれて。

だから彼に分かるはずがなかったのだ。

常に兄と比べられ、卑屈になった叔父の心は。

彼の才能に嫉妬する従兄弟たちの思いも。

彼にとって爵位は父のものだった。自分はただ父のものを取り返す

のだと、そう思っていた。

正義は自分にあるのだと。

叔父にとってはもうすでにそれは叔父自身のもので、自分のものを守るために攻撃してくるだろうと、分かっているながら、分かりきれてはいなかったのかもしれない。

やっと、叔父が本気で自分を排除しようとしていることに気付いても、打てる手はあまりに少なかった。

先代の嫡子で、優秀であるとはいえまだ学生の彼と、当主としての権力を握る叔父。

力の差は歴然。

一体どうすればいいのか。

悩む彼の前に現れたのが、自分より一つ下の少年、アルブレヒト皇子だった。

「貴様が先ツエルプストー辺境伯の嫡男か」

「あなたは・・・？」

訝しげに自分を見るオスカールの視線をいつそ清しいまでに無視し、一つ頷いた。

「よし、貴様、俺に仕えよ」

「・・・はあ？」

幼くはあるが、支配者然とした子供。そんな子供にいきなり『仕えよ』などと言われれば、つい従ってしまう……訳がなかった。たいそう賢かったオスカー少年が思ったのは、なんだこいつ。その一言に尽きた。

次の言葉を、聴くまでは。

「ツエルプストーは本気で貴様を殺そうとしているぞ？ 貴様だけなら難も逃れられようが……、母親を殺されたくはあるまい」

「な、どうということだ!？」

「ん？ まだ分からののか？ 思ったより愚鈍だったか。

どうもこうも、貴様の『叔父上』が貴様と貴様の母親を暗殺しようとしているという話だ」

なんだか色々とひどいことを言われた気がするが、そんなことを気にする余裕などなかった。

まさか、暗殺を目論まれるほど自分が叔父に疎まれているなど、当時のオスカーは思ってもいなかったのだ。

この少年の言っていることは本当か、そもそもこの少年は何者なのか、自分は一体どうすればいいのか。

思いは千路に乱れる。

兎に角母の元に行かなければと、オスカーがきびすを返しかけて。

「どこにいく？」

「母上のところだ。情報をくれたことには感謝する。話があるならまた後日、」

「母親のところに行ってどうするつもりだ？」

オスカーの足が止まった。

そうだ。母のところに行ったところで、一体彼はどうすればいいのか。逃げるにせよ、隠れるにせよ、情報も、味方も、時間も足りない。

母の実家はそれなりに有力貴族だが、ツェルプストー辺境伯家に比べれば落ちる。

彼の両親が結婚した当時はそれほどに勢力差はなかったが、皮肉なことに父が多大な武勲を上げた結果、ツェルプストーの権勢は増し、両者の実力は比べ物にならないほど開いていた。

「俺のところに来い。そうすれば、貴様も、貴様の母親も守ってやる。」

そう言う彼は、一体何者なのか。

「俺は貴様の才を利用する。そのかわり、貴様は俺を母親を守るために利用するが良い。」

貴様が俺の元にいる限り、貴様の母親に手出しはさせぬ。わが名、ゲルマニア第三皇子アルブレヒトの名の下に誓ってやる。」

これが、後に篡奪皇帝と呼ばれる男と、その忠臣の出会いだった。

その32

とある屋敷。

金型やら鉄屑やらが散乱する一室で、私は変態と向かい合っている。

「で、出来たの？」

テオドールは、その幽鬼のようにやつれ切った顔に満面の笑みを乗せた。

はつきり行って大層恐ろしいのだが。

「ええ。やっとこさ完成いたしましたよ」

そうか。出来たのか。

とうとう完成したんだな、その銃は。

私が銃を完成させるように言ってから実に4ヶ月という時間と、私の財産がほぼ無くなるほどの金額を費やして。

危うく破産するかと思った。

いや、本気で。

さしだされた一丁の銃と、そして積み上げられた弾丸の山を見る。

ああ、これに3万エキュールが飛んでいったわけか……。

というか、一番金がかかったのは、意外にも銃ではなく弾の方だった。銃のほうは、シュペーの鉄を買い込み、齟齬が出ないように型を取って組み上げて（といってもこの作業だけで相当な苦労があっ

たらしい）、ですんだが、銃弾のほうは、ある程度の鎧や、魔法の壁を貫くための破壊力を持たせなければならぬ、ということ、試行錯誤の繰り返しだったらしい。

いろいろな所から様々な火の秘薬やら火薬やらを取り寄せ、火薬の配合をロマリアから持ってきた銃弾と比べながら、ああでもないこうでもないとして試し続け。

やっと納得のいく威力が出せる物が仕上がったらしい。

古今東西、どの世界でも武器の開発は金と時間がかかるものである。

だがテオドルが言うには、ロマリアから持ってきた『場違いな工芸品』があり、それを見本にしたり、基本的な型をそれから取ったりしたからこの程度で済んだらしいが、それがなければいまだに完成どころか着想さえ出来ていないだろう、との事だった。

「この銃についてですが

」

熱く語っているのを聞き流す。

専門的な話をされたところで、私に分かるはずがないのだ。

とりあえず話をまとめると。

5発の銃弾をこめることが出来る連発銃。

後装式で銃弾の装填が容易。

ライフリングが施されている。

簡単な鎧くらいなら打ち抜ける。

狙いも今までのとは段違いに付けやすい。

銃剣付。

整備もそれなりに簡単。

銃弾は金属薬莖を採用。

今までとは段違いに威力が出る。

ただし銃弾は造るのは難しいし高くつくよ。

といったところか。

薬莖を作るのにゴーレムでプレスしないといけならしく、それをやっている間は他の作業が出来ないとの事。

おまけに火薬の調合も面倒らしいし。

そのせいで弾丸製造が難しいらしい。

やっぱりもう少し職人が必要か。

銃本体のほうは、すでに型も取っており、量産も可能ということだった。

先ほどの試射のさいに貫かれた鎧 この世界の傭兵が一般的に使っている種類のそれに近寄る。

剣戟程度なら防ぐといわれたそれには銃弾の大きさに綺麗に穴が開いていた。

これならアルブレヒトたちも満足するだろう。

「よくやった、テオドル。褒美に欲しい物があるなら言えよ。私に出来る限り叶えてやる」

「いえ。これほどの銃を作ることが出来たのは、全てお嬢様のお力添えのおかげですから・・・。

やっと僕の理想の銃が、はあはあ、いやいや、これで満足しちゃだめだよ、そうだよね、まってね、まだ見ぬ僕の、ハアハア」

「黙れよ変態」

後半で全て台無しだ、その変態。

せつかく作り上げた銃に体をくねらせながら近づいていくのを、銃を引き寄せることで阻止する。

仮にも皇子に見せ、おそらく手にとられるだろうものに、変態の妙なモノを付けられるわけには・・・ああ、きつともうとつくの昔に手遅れなんだろうなあ、色々と。

これさえなければ本当に、完璧なんだが。

名残惜しそう、というか未練たっぷり私の持つ銃を眺めている変態に、もうため息しか出ない。

「近いうちに人に説明してもらうことになるから。とりあえずまともによってくれよ」

聞こえているかどうか分からない　おそらく聞いていない

男にそれだけ言っただけで部屋を後にした。

銃と引き離れたところでもう一度説明しよう。銃と離しさえすればそこそこまともだから。

その時に職人仲間のことも聞くとしようか。

あの日、私がアルブレヒトとツエルプストーと出会ってから1カ月という時間が流れた。

アルブレヒトと約束した日がついに訪れたのだ。

訪れたツエルプストーとアルブレヒトを、娼館の地下、防音設備の施された部屋に案内する。

何でそんな部屋があるのかは・・・、ここが娼館、しかもメルヒオルのヤツは結構違法なこととしてた、てことで察して欲しい。

「外でなくていいのか」

地下通路にアルブレヒトの声が響いた。

たしかに、普通は鉄砲の披露は外でやるものだろうが。

「人目につかないほうがよろしいでしょう」

他人に見られると厄介なことになるからなあ。

私とアルブレヒトが会ってるとか、敵に知られたらまずいだろうし、私も下手に男と会ってた、親しくしてたとかジジイの耳に入ったらどうなることか。

だからこの部屋を選んだのだ。昔は見世物とかもしてたらしく、結構な広さはあるし。

いくつかの曲がり角を曲がり、階段をくだり、扉をくぐってひときわ大きな両開きの鉄の扉の前にたどり着く。

「こちらですわ」

立ち止まると、周囲を警戒しながらツェルプストーが前に出た。彼はここに着くまでも常に周囲に気を配り、怪しいものがないかを確認していたのだ。

やっぱりまだ警戒されてるって事だよなあ。

まあ、当たり前か。

いきなり出てきた私をすんなり信用するほうが問題だろうし。

こん・ここんこん・こん

決めてあった合図のノックをし、開かれるのを待つ。

ややあつて、軋んだ音を地下通路に響かせながら扉が開かれた。

「お待ちしておりました」

待ち構えていたナターリエが頭を下げる。

「テオドールは？」

「既にあちらに」

指し示されるままに、講堂ほどの広さの広間へと出て、待っていたらしい人影に近づく。

テオドール、頼むから今日ばかりはまともでいてくれよ。

「お待たせしましたね、テオドール」

「お嬢様。僕が説明するのはこちらのお二人に向けてですか？」

よし。これなら大丈夫そうだ。あとは途中で豹変さえしなければ・・・。

「その通りです。お二方、こちらが『銃』を作り出した職人でございます。名は、テオドール」

はじめまして、とテオドールが頭を下げる。

テオドールは黙って立ってさえいれば、知的で穏やか、それにさすがはあのトリステイン貴族の出だけはある上品さを持つてゐるからなあ。

黙って立ってさえいれば。

「お前の作った銃は見せてもらった。あれは中々に素晴らしい一品だったが、今日見るものはそれ以上と期待してもよからうな」

自分の作った『銃』を褒められたテオドールが、嬉しそうに笑う。

「そういつていただけて光栄です。今日お持ちしました銃が御眼鏡にかなうかどうかは分かりませんが」

そばにおいてあつた箱の蓋を開け、そのまま差し出す。

それをツエルプストーが受け取り、妙なところがないか検分してからアルブレヒトに手渡した。

「ほお。前のものといささか形は変わっているようだが、こちらの銃も連射が聞くのか？」

「勿論ですとも。この銃は」

テオドールが屋敷で私に聞かせた説明を繰り返す。

私にははつきり言つて半分以上わけが分からなかったのだが、この2人はさすがは軍人。

テオドールの伝えた以上のことを理解できているらしい。

説明を受け、分からないところや曖昧なところは質問をして、それ

にテオドールが応え。

「一通り、知りたいことが分かったらしく話が途切れたときには、二人の目は興奮に輝いていた。」

「その説明が本当だというのなら、これは素晴らしい!!」

普段は といってもあまり知らないが 冷静そうなツエル
ブストーが声を張り上げる。

「その通りだな。さて、試射の方は？」

「では、こちらで」

テオドールが部屋の一番隅にまで下がる。

テオドールのいる場所の、ちょうど正反対の壁際には鎧が立てかけられている。

銃を構え、打ち出す。

轟音。

つと、こればかりは何度聞いてもなれないな。

地下だから音が反響して凄いことになってるし。

うう、耳がキーンとする。

三人は鎧のところに行ってまた熱く語り合ってるし。

混じれないというか、混じってもどうせ理解できないんだろうなあ。
ナターリエを呼び寄せ、ワインを貰う。

しょうがない。あの三人が落ち着くまでしばらく待つか。

・・・まだかなあ。

ん？静かになったな。やっと終わったか？

話題も一通りは出尽くしたらしく、声が止んだ、と思ったところに。

「テオドール。貴様俺の下に来るつもりはないか？」

今日一番の爆弾発言が飛び出した。

目の端のほうに、驚愕に顔を歪めるナターリエが見える。

まあ、言うか言うかとは思ってたけど、こんなに堂々と言い出すとはね。

さすがは皇子様。

というよりさすがはアルブレヒトかな？

こそこそ勧誘とか性に合わなさそうだものねえ。

ふと、手に持つワイングラスの中、水面が小刻みに震えているのが目に入った。

あゝ。言われるのは覚悟してたつもりだったけど、やっぱりつもりはつもりでしかなかったって事か。

万が一、テオドールを奪われてしまえば、それは私がアルブレヒトとの交渉で使える最大の駒を失うことを示す。というか、はっきり言ってテオドールいれば私要らないだろうしなあ。

せいぜいがジジイとの伝手のための手ごまってところか？

さて、どうしよう？

「お断りいたしますよ」

・・・え？

「ほお、何故だ？」

「わが陣営に来てもらえるならば、鉄も火薬も出来る限りの融通を利かせるぞ」

「心は揺れますけど。でも一応、僕にだって情とか義理とか言うモノはありますし。命を救われちゃいましたしねえ。それに、僕の研究とか技術、あんなに褒めてくれた人って、お嬢様が初めてだったんですよ。はじめて、認めてもらえたって言うか。

それに、僕異端の疑いがかかってますから。ここでお嬢様から離れると命が危ないというか、聖堂騎士喉けられたくないというか」

どこか照れたように笑いながら、そんな風に。

「テオドール・・・」

「そ・れ・に！！何より、あの数限りない僕の最愛の彼女たち！！
！彼女たちに会うにはお嬢様のそばにいるのが一番！！ああ、今
思い出しても僕を恍惚の世界に誘うあの魅惑的で官能的な~~~~~
~~~~（以下略）~~~~」

さっきまでの感動かえしやがれこの変態っつ。  
あれか。

貴様にとって私はロマリアの『場違いな工芸品』を見に行くためのパスポートか何かなわけか、ああ？

アルブレヒトとツエルプストーが突然豹変した変態を目を見開いて見つめてるよ。

アルブレヒトは面白そうにしてるけど、なんかツエルプストーは頭抱えて・・・、良く見たら腰引けてるし。

この変態、熨斗つけてくれてやろうか。

・・・こいつにこれだけの才能さえなければ、いくらでも放り出せるんだけどなあ。

「あゝ、あの、お二方、申し訳ありません。この状態になってしまえば、彼はしばらくは戻ってきませんから」

現実世界に。

その間にこちらでお話をと、テーブルのほうへと誘う。

ナターリエが寄ってきて、二人にワインを注ぐ。

「前にも思いましたが、中々口当たりのいいワインですね」

「トリステインのタルブ産のワインですわ」

ああ、というようにツエルプストーが頷いた。

「これがですか。聞いたことはありませんが」

「お飲みになったことはありませんの？」

「宮廷で出るワインはガリア産の物で、軍で飲むのは安い蒸留酒だからな」

なるほど。

「だがこれはいい味だ」

2人は気に入ったらしい。

土産に包ませるか。

「お気に召したのでしたら、何本かお持ちになりますか？」

タルブから定期的に取り寄せてるしなあ。

二人が頷くを見て、ナターリエに目配せする。彼女なら上手くやってくれることだろう。

さて、世間話はここまでにしよう。

未だに床で悶えている変態は無視して、商談に入る。

こうなってしまった時のために、生産ペースとか必要な鉄の量とかは書類にまとめさせておいたから問題無い。

無いったら無い。

「で、こちらの『銃』の事なのですが、いかがでした？鉄のほうは回していただけでしょうか？」

さっきの興奮ぶりからしてまず決まりだろうけど、ちゃんと確認は

取っ  
てお  
かないとね。

### その33

なかなかやる。

それが、オスカーが幼い娼館の主にして自分たちの取引相手となつた少女に抱いた思いだった。

事前に調査はしてあるのだろう。こちらに出せるぎりぎりの物を取ろうとするその姿勢は荒削りではあるが見所がある。

なによりゲルマニアはある意味では貪欲を評価する社会とも言える。

それに鑑みれば、まあ及第点くらいは上げてもいいかな、というのがオスカーの評価だった。

床に転がってどこぞの誰か、もしくは何かに対して尽きない愛を叫ぶ部下に頭を抱えるさまが、あまりにアレな主君に振り回されて胃を痛める自分とどこか重なりそのせいで評価が甘くなったのかもしれないが。

今日この日まで、背後関係を洗ってみたが、他の帝位継承候補者からの回し者である可能性は殆ど無い。

後は彼女の主人であるゲルジオ枢機卿方面だが、あの老獪な政治家が背後にいるというなら現時点では手出しが出来ない。

むしろ、排除云々というより彼が自分たちに接触を取ろうというなら喜ばしいことなのだが。

だが、残念ながらその可能性が極めて薄いことに彼は気付いていた。

もし彼の枢機卿が彼らと接触を持ちたいというのであれば、もっと上手い手段はいくらでもある。

わざわざ自分の愛人である少女を動かす必要は無いのだ。

ならばこの少女の独断ということだが。

一体彼女は何がしたいのか。何故自分たちに味方するのか。それが中々見えてこない。

主君には『取り越し苦労が過ぎる』とよくからかわれ、彼自身、自分でもそれは分かっているのだが、まあ、性格と言うモノは早々変えられる物ではない。

まさに真性の苦勞人体質である。

「あなたの仰ることは分かりました。ですが、これでは我がほうが得をしすぎている」

「公正な取引だと思いますが」

微笑む少女に、オスカーは内心で舌打ちを漏した。  
言いたいことは分かっているはずなのにこの態度。

さすがはあのゲルジオ枢機卿の下にいるだけのことはある。

「そう言うことではありませんよ。あなたはこれを我が陣営に限定して卸すといって下さる。何故です？これだけの銃だ。王宮に持ち込めばそれこそ莫大な報奨金が出ることでしょ。あなたのご主人も喜ぶのではありませんか？」

これほど高性能な銃ならば、王宮でも諸手を挙げて導入に走るはずだ。

そうすれば彼女の背後にいるゲルジオ枢機卿の影響力も増し、彼女自身も益々重んじられるだろう。

何故それをせずに、わざわざ自分たちに渡そうとするのか。それが見えない。

見えないからこそ、疑い深くなる。

彼女は首をかしげ、そして笑った。

「皇帝に味方するのがそれほど不自然ですか？」

当たり前のことを言うように。

決まりきったことを読み上げるように。

アルブレヒトを『皇帝』と言い切ったのだ。

なぜ、こうも自信に満ちて言い切れるのか。彼がそれを知ることとは無い。

「皇帝、ですか。それならば余計に王宮へ、」

「今ではなく、私が生きる次代の皇帝ですわ」

「俺がそうなるということか」

「ええ」

何の疑いも無いその言葉に、アルブレヒトが笑う。

「お前は、前にも勝算のない賭けはしないなどと言っていたな。その自信は一体どこから来る？それとも何か？自分が俺を皇帝の座につけてやるとでも言うつもりか？」

「いいえ。皇子ならば私の力など無くとも帝位におつきになりましょう。私はただ知っているだけです。あなたが皇帝になることを」

そう微笑む彼女の真意はどこにあるのか？

「そこでお前は何を手に入れる？俺を皇帝と呼ぶお前は、何が目的なのだ？俺に何を求める」

「まずは一つ。私の身の安全を」

私を守ってください、そんなことを言う。

「一体何から守れというのだ？」

「あなたには心強い味方がいらっしゃるのでは？」

ゲルジオ枢機卿の『お気に入り』に手出しをしようとする輩はまずい無いだろう。

「まあ、これは保険なのですが。そして、もう一つ。こちらの方が本題ですわ」

少女の顔から、微笑が消えた。

「トリステインを」



「は？」

一体何を言われるのかと、内心身構えていたオスカーとアルブレヒトは、一瞬彼女の言っていることが理解できなかった。

地位や金ならば、どれほど莫大でも納得がいった。

この『銃』をもたらした功績からすれば、ある程度の物は覚悟済みだったのだが。

彼女が口にしたのは、国。

小国とはいえ、始祖の血を受け継ぐ由緒正しい国の名。

「・・・それは、自分をトリステインの王にしろと言っているのか？」

アルブレヒトのその言葉に対する反応は激烈だった。

「ふざけるなよ。誰があんな国を支配してやろうなどと思うものか。私が望むのはあの国の苦痛だ。あの国でのうのと暮らしている貴族どもの、支配されることに慣れきっている平民どもの、絶望が欲しいんだ。頼まれたって王になどなってやるものか」

憎悪に染まった顔と、どこまでも静かな声が、その思いの深さを物語る。

それでも、話すうちに冷静さを取り戻したらしい。

こほん、と一つ咳払い。

「申し訳ございません。お見苦しいところをお見せいたしました」

再び微笑を浮かべる。

アルブレヒトの目が面白そうに細められたのに気付いたのは、おそらくオスカーだけだった。

「おい、」

「貴様は本当に面白い。」

良いだろう。俺が帝位に着いた暁には、貴様にトリステインをくれてやる」

余計なことを言うな、という思いを込めてあげた声はあっさりと無視され。

オスカー・フォン・ツェルプストーの胃痛の種がまた一つ増えた。

「勝手なことを」

屋敷の一室、人払いを済ませた部屋の中に、アルブレヒトの笑いが満ちた。

「トリステインをくれてやると言ったことか？」

「それ以外に何がある！」

「良かったではないか。あの憎悪は本物だ。俺があの子にトリステ

インをくれてやるという言葉を反故にしない限りは裏切るまい。俺たちに接触してきた理由も分かったであろう?」

ぐ、と言葉に詰まる。

トリステインは始祖の血を継ぐ王国だ。始祖を崇めるブリミル教は、彼の王国が滅びるのに良い顔をしまい。

だから彼女は、始祖の血を継がないゲルマニアの皇子であるアルブレヒトを選んだ。

何故彼が皇帝の座に着くことにあれほどまでに自信満々だったのかはオスカーやアルブレヒトには分からなかったが。

それでも、彼女のトリステインに対する憎しみが本物なのは理解できた。確かに、トリステインを滅ぼすのに彼らが協力する限り彼女は裏切らないだろう。

だが。

「仮にも始祖の残した一国だぞ。そこらの小国を滅ぼすのとは訳が違う」

「あの女はあの国を滅ぼしたいわけではないだろうよ。それに、おそらく我らにあの国をどうこうさせるつもりもあるまいよ」

「どうということだ」

くつくつと、笑いがのどから漏れる。

「簡単なことだ。オスカー、お前は自分の獲物に他人の手を触れさ

せようと思うか？

あの女が求めるのは自分の手でトリステインを滅茶苦茶にするまでの後ろ盾とか、まあそんなところなのだろうよ。逆に俺たちが手を出せば怒り狂うはずだ。

それに、一思いに滅ぼしてしまえというような優しい人間には見えなかったからな。恐らく本人の頭の中では、あの国をどうするかはとうに決まっているのであろうよ」

それに、と一拍置いて。

「今の俺たちにとってあの『銃』はそれだけの価値があるう？  
もしあの女が使えないのであれば、切り捨てればよいだけの話ではないか」

確かに、彼らにとって彼女がもたらした『銃』は小国一つなどどうでもよくなるほどの価値はあったが。

「確かにな。あの銃があれば作戦はだいぶやりやすくなるはずだ」

それを思うに着け、あそこで勧誘しそこなっただのは残念だ。  
かなり癖があり、ここに来ればオスカーの胃が痛む原因の一つとなっただろうが、それを加味しても彼の技術は手に入れたい物だった。

「あのテオドールとか言う男にもう一度声をかけるか？」

おそらく無駄だろう、彼がそう思いながらいえば、案の定アルブレヒトも首を振る。

「おそらくあの男はあの男の主人を見限るまい。命を救われたというのも本当だしな」

手元の『テオドール・ド・ナーディスト』に関する資料に目を落とす。

本来ならば一年近く前に異端審問によって殺されていただろう青年。それに手を差し伸べたのが、当時から『枢機卿の愛人』として一定の影響力を所持していたセレナだった。

彼女はテオドールの命を救ったのみならず、彼の才能を認め、自らの買い取った屋敷に住まわせ、研究に対し惜しみない援助を与えた末、彼らに披露した『銃』の開発に漕ぎ着けたのだ。

「俺たちでは『異端審問』からは完全には守れないか」

「ああ。みすみすこれほどの人材を坊主どもに殺されたくは無い。あの女の手で守られるというのなら、それに越したことは無いだろう」

「そうだな。残念だが諦めるか」

もしも手に入れる機会が来たならばその時に動けばいいか。そう自らを納得させ、オスカーは頷く。

「彼女を信用するのであれば、あの娼館を使うことは出来ないか？」

「それは、連絡用に、ということか？」

今でも娼館ないで得られた情報の供給というのは契約内容に入っているが、オスカーが言うのはそれとは別の話。

「ああ。あそこの女は素晴らしい。評判になるのも分かる。俺たちが通いつめてもおかしいとは思われないだろう。見たところ隠し通路や隠し部屋の類も多かったしな」

「あれは作戦の要だが？それを知らせるのか？」

面白そうにアルブレヒトが言う。

今まで疑っていたオスカーの言葉としては、確かにおかしいが。

「俺が言い出さなくてもあそこを使うつもりだっただろうが。ならば俺から言ったほうがまだからな。それに、あそこを使う利点が多いのは確かなことだからな」

「なるほどな」

笑いを含んだ声に、オスカーは思わず頭を抱えそうになるのをこらえる。

例の作戦は確かに上手くいけば与えられるダメージは甚大な物になるだろうが、作戦中にこの男が何をやらかすかと思えば胃も頭も、どこもかしこも痛くなってくる。

今の自分と同じような目でテオドルを見つめていたセレナを思い出す。

自分の代わりに、この男の面倒を見てくれないものか。

いや、きっと無理だろうなあ。

そんなことを黄昏た目で思いながら、オスカーは大きくため息をこぼした。

彼が己の主君と出会ってから十年以上が経過しているが、その間にため息と胃痛が友人に加わっているのは確かなことだった。

はたしてセレナ存在はそんな彼の助けとなるのか、はたまた苦勞の種となるのか？

現時点で知るものは誰もいない。

「では次に会ったときにその辺の話も詰めておくとするか」

「ああ。後はこの作戦にかかわる別のやつらにも連絡先として知らせておかないと」

「ならば、今度行くときはやつ等も連れて行つてやろう。どうせ幾つか鉄の方も持つて以下なければならぬしな」

銃の性能は見せられた。ならば次はアルブレヒトの抱える鉄職人の作り出す鉄で同じ物が作れるのか？

それを調べるために幾つかサンプルを持つていくことになっている。

「あの銃に使われているのはスーパー産の鉄だったか」

オスカーは肯定した。

「実際ここ数ヶ月、スーパーの鉄を買い占めている物があるということだったからな」

そのお陰でスーパー鉄の相場は大分跳ね上がっている。

「まあ、うちの鉄ならば大丈夫だろう」

スーパー、という良質の鉄の代名詞とも言われるものに対するにはあまりに軽い言葉に、しかしアルブレヒトも軽く同意を返すだけだった。

「次にいくのが楽しみだな」

人の悪い笑みを浮かべるのにやれやれと肩をすくめる。きっと次の機会も自分は胃を痛めることになるのだろう。

「そういえば、あの女の経歴は不明だったな」

「ああ。枢機卿に拾われる前は一体どんな生活をしていたのだから。トリステインのラ・ヴァリエール領の教会を、亜人に襲われたとかで頼ったのが縁でゲルジオ枢機卿と知り合ったらしいが、それ以前は謎に包まれている」

これは別にセレナの意図したことではなかったのだが、教会に身を寄せるときに素性を偽ったこと、彼女自身の身寄りが無かったこと、村の人々が自分たちが貴族に差し出した一家のことを忘れたがり、一切話題に上らせなかったことでセレナの痕跡は一切たどれなくなっていた。

「一体何があつてあそこまでトリステインという国を憎んでいるのか。調べられるか？」

「分からないが……。出来る限りは調査してみよう」



## その34

なぜ。

なぜだ。

何故私は、いや、私がアルブレヒトのところの問題にまで気を配らなければいけないんだ!?

目の前に聳え立つ書類の塔を眺める。

きつと今の私はまさしく『死んだ魚のような』目をしているのだからうなゝははは。

今やすっかりなじんだ『水辺の誘い』の執務室。

そこに見慣れない書類の山、山、また山。

一体何がどうしてこうなった!?

「セレナや」

実に久々にジジイが帰宅できるとの事で、顔を合わせての晩餐の席。

「どうかいたしましたの、クザーヌ様」

「長い間寂しい思いをさせて悪かったのう」

しわだらけの顔を申し訳なさそうに歪める。

いや、私としては本気で助かってるんだけどね。  
捨てられんのは命の危機的な意味で怖くはあるが、それでも自由時間が増えることはありがたいのだし。

そんな内心を悟られないように努めて笑顔を作る。

「謝らないで下さいませ、クザー又様。

確かにクザー又様にお会いできないのはとてもさびしいですけど、クザー又様は大切なお役目をなさっていらっしゃるのですもの。私のことなど……。それに、時間があつたらこうして顔を見せてくださいますもの。セレナはそれだけで幸せですわ。

それよりも、私としてはクザー又様のお体のほうが心配ですわ。きちんと休息を取っていらっしゃいますか？」

ジジイの体調が心配なのは結構本気。

倒れられたりするわけにはいかないから。

ジジイには出来るだけ長い間『教会の独裁者』でいてもらわないと私が困るんだよ。

「うむ。きちんと休んでおるぞ。

セレナはほんに優しいいい子じゃの。じゃがたまにはわがママを言ってもよいのじゃよ。そなたの可愛らしいわがママを叶えるのも、わしにとつては楽しいことじゃてな」

「でしたら、お仕事がひと段落着いたら一日お時間を下さいませ。たまにはクザー又様と2人でのんびりとした時間を過ごしたく思いますの」

「そうか、それだけで良いのか。そなたは本当に欲がないの」

欲が無い、ねえ。実際はすごい欲深いと思うんだけどなあ、私は。ただ本当に欲しい物が厄介なだけで。

「そんなことはありませんわ。」

そうそう、クザーヌ様、私が調合しました薬草茶がありますのよ。お疲れの時には体にいいと思うのですが、一杯お飲みになりますこと?。」

「おお、勿論貰おう。そなたの茶は美味しいからの」

「そう言って頂けると嬉しいですわ」

和やかなまま食事を取り。

そのままの空気のまま寝室に入って、久々にやることやって。・・・よく考えると私の仕事って元々こっちが本業?みたいなモノなんだよなあ。

最近すっかり別方面が忙しくなって忘れてたけど。

久々で体が重くても、仕事は待ってくれない。

ジジイが出勤していくのを見送ってから、私も自分の仕事場へと向かう。

「おはようございます、お嬢様、ナターリエ」

「おはようございます、ユリアさん」

「おはよう、ユリア」

門の前で迎えてくれるユリアに挨拶を返し、今日の予定を確認する。

「本日は午後と午前に一軒ずつ、出入りの商人との商談がございました」

こういう人と会ったりする仕事は残念ながら私は出来ない。子供が出て行ったりしたら向こうも不愉快になるだろうし、足元見られるかもしれないし、何よりあまり目立つわけには行かない身の上なので。

「いつも通りにお願いできますか、ユリアさん」

だから代役を立てることにしてる。たいていはユリアに頼むことになるんだけど。

いや、彼女は本当に優秀。

本当に、望むのなら自分の才覚でどこまでも登っていけるだろうけど。

そんな彼女は実はナターリエと仲が良い。

何でもナターリエが売られてきたときに、すでに店一番の売れっ子だったユリアによく面倒を見てもらったんだとか。

引退するまではナターリエと一緒に店の顔だったらしいし。

でもさあ、ナターリエは今22歳。

売られてきたのは10年以上前。そのときから売れっ子だったって・・。

ちらり、とユリアの美貌を見る。

「？　どうかなさいましたか、お嬢様」

「何でもありませんわ」

どう見ても20半ばくらいだよなあ。

・・・一体彼女はいくつなんだろうか。

後でこっそりナターリエに聞いてみたところ、詳しいことは知らないが少なくとも40には手が届いているとの事。

絶対に見えない、と内心絶叫したのは、まあ無理も無いことだと思っ  
て欲しい。

諸々仕事を終わらせて、娼館が開くかという時間。

私は執務室で人を待っていた。

一人は我が部下の変態、テオドル。

もう一組はアルブレヒトたち。

アルブレヒトのところで作られている鉄のサンプルを持ってきてくれるとか。

でも私は鉄の良し悪しとかさっぱり分からない。

ということで変態にも来るよう言いつけてるんだが。

ああ、あの変態が今度は何をやらかすかと思えば胃が痛くなってくる。

あれが何かをしでかすたびに私の精神力だとか、そう言っのがどんどん削られていく。

ただでさえ色々と余裕が無いというのに。

今日は最後までまともでいてくれないかなあ。  
きつと無理なんだろうな。

無理といい切れてしまうのが悲しい。

はあ、とため息を一つ。

時間をつぶそうと報告書を読んでいたところで、扉がたたかれた。

この時間だと、テオドールかな？

「どうぞ」

「失礼いたします、お嬢様」

テオドールが優雅に一礼して入ってくる。

扉がしっかりと閉まったのを確認して。

「アルブレヒトたちが来るまでまだ時間があるから、君はそこに座つてろよ」

「はい。」

皇子たちのところではどんな鉄を作ってるんですかねえ。もう、僕  
楽しみで昨日から寝てないんですよ」

「さあね。私は知らないよ。そんなのは来れば分かることだからどうでもいい。けどさあ、君あんまり暴走するんじゃないよ。相手はあれでもれっきとした大貴族と皇子様なんだからさ」

言っても無駄なんだろうなあ、と思いつつも、注意だけはしっかりとる。

アルブレヒトが風変わりだから良かったようなものの、テオドールの豹変ぶりは無礼だといわれてもしょうがないレベルだし。

「え〜、僕暴走なんかしてないですよ」

無自覚かよ!!

なんと本人はアレで普段どおりだったという、あまりの衝撃的というか、アレな事実に盛大に固まること数拍。

驚愕の視線でテオドールを見つめ続けることしか出来ない私と、そんな私を不思議そうに見ているテオドール。

なんともいえない空気を壊したのは、またしても扉がたたかれる音。

「あ、ああ、どうぞ」

入ってきたのは、アルブレヒトとツェルプストーに、それに見慣れない二人の男。

「邪魔をするぞ」

「お待ちしておりました、お二方。ところでそちら様方はどなたでございましょう?」

この場に連れてくるって事は信頼の置ける人たちなんだろうが、一体何者で、そしてどうして連れてきたんだか。

「ああ。これがフランツ、でこっちのひよろいのがパウルだ」

一礼する二人に笑う。

フランツと呼ばれた人はいかにも軍人、ってタイプ。がっしりとして、いかつい感じ。パウルの方は、学者っぽい。きっと文官だと思われる。なんか眼鏡かけてるし。

「セレナと申します。こちらがテオドールですわ」

とりあえず挨拶は交わしたものの。本当に何だってこの人たちを連れてきたんだ？

「殿下、何故彼らを？」

聞けば、アルブレヒトが笑みを浮かべた。なんというか、笑ってるんだけど笑ってないというか、肉食獣っぽい獰猛な笑いというか、今にも食われそうというか。

まあつまり端的に言うとなな。

怖い。

これに尽きる。

いや、笑顔がここまで怖い人とか初めてあったんだけど。勿論前世も含めて。

「俺は帝位を手にする」



「存じております」

何を今更。

ってかあんだ、だから私の話にのって銃を手に入れてんでしょように。

「だが今の俺の継承順位は高くは無い。そう低くも無いがな」

アルブレヒトの継承順位は第三位。生まれたときは五位だったが、彼の姉たちが降嫁したことによって繰り上がった。

継承権を持っているのが三十人近くいる中では大分高い。

でも、彼より上の二人にはそれぞれ強力なバックが着いている。嫁に行ったお姉さんたちも野心家で色々影で動いているみたいだし。

「だから俺が玉座を取るためには色々と障害があるわけだが」

」

その後、私は玉座を取るためのアルブレヒトたちの陰謀というか策謀というか、作戦というか、とにかくそういったものを聞かされた。

一体なんだってまだ出会って間もない私に、漏れたらお終いな最重要機密なところまで話すのか、と思ったが、どうやら私にも協力しろと、そういつているわけかこの男は。

あー、銃だけ渡して静観するつもりだったのが、見事に巻き込まれたみたいだね、これは。

で、それにはこの二人も大いに関係してくるから、今日の紹介の運びになったと。

思ったとおり、フランスは軍人。ツェルプストーとあわせて二人でアルブレヒトの軍の二枚看板らしい。元は傭兵団を率いていたのをアルブレヒトが引き抜いたんだとか。

パウルのほうはこちらもやっぱり文官。アルブレヒトの下で内政の

一切を取り仕切ってる。こちらは元々平民で、たまたま徴兵されてアルブレヒトの下で一平卒やってたときに目に留まって引き立てられたらしい。

それにしてもまた、随分な綱渡りな策だなあ。

まさに伸るか反るかの賭け。

やれやれ。博打はあまり好きじゃないんだけどなあ。

「随分と危ない橋を渡られますのね。それに、私達にここまで話してもよろしいのですか？」

いくら私が協力したほうがやりやすいからって、ここまで話しているのかね。適当に理由並べてだまくらいかせばいいのに。

私がこの情報を敵側に流したらどうしよう、とか考えないのだろうか、この男は。

「裏切りたければいつでも裏切るが良い。お前に裏切られて終わるのであれば、俺がその程度であつたというだけの話。この程度、渡りきれぬ男が玉座につけるわけが無かるう」

それに、それくらいのほうが生きていると実感できて面白い。

ポツリと落とされた声に、私は唐突に理解した。

この男は皇帝に向かない、と。

確かに優秀でも有能でもあるだろうが、玉座に座って全てを統べるよりも、軍を率いることに向く男だろう。

器の大小や能力の問題ではなく、ただの好みの話だが……。

もし、世界が乱世であるならば、皇帝が戦場に出て軍を率いる時代であるならば、あるいは皇帝に相応しかったのかもしれない。

だが、今は小競り合いはあるとはいえ、大きな戦乱などめつたに起こらない。

なにより、ゲルマニアは始祖の血を引かず、貴族達の忠誠心が薄いために政権が不安定だ。

そんな国を放り出して戦場に度々行ける筈が無い。

今この時代に皇帝となるならば、アルブレヒトは玉座に縛り付けられることになるだろう。

そしてこの男は、おそらく自分自身その事に気付いている。

自分が皇帝に向かないことも、自由をなくすことも。きっとその全てを。

「一つ、お聞きしてもよろしいですか、殿下」

「なんだ」

「なぜ、玉座にお座りになろうと思ったのですか」

息を呑む音が、部屋に満ちた。

「なぜか、か。ここまで直接的に聞いてきたのは久しぶりだな」

くつくつと、アルブレヒトがのどを鳴らして笑う。

「兄の、マンフレートの評判を知っているか」

「ええ。何でも文武に長け、下々にまで気配りをなさり、魔法の腕

にも秀でた優秀なお方だとお聞きしたことがございます」

第一皇子のマンフレートって、本当に悪い評判が聞こえてこないんだよなあ。

ジョアンナに調べさせてもほこり一つ出てこない、正に完璧な貴公子様。

「下々に優しく、優秀な。まったく、物は言いようなものだ。

あの男は確かに優秀ではあるが、皇帝の器ではない。優しい、臣下の意見に耳を傾けるといえば聞こえはいいが、ただ人の意見に流されること、皇帝には決して許されぬ。

だが、あの男にはそれが分かっていない。あの男はたやすく人の意見に左右され、自らで決断を下すことが出来ぬ。

皇帝は確かに臣下の意見を聞き入れ、政に反映せねばならぬだろう。しかしながら必要以上の干渉は許してはならぬのだ。

だが、マンフレートのやつはそれが分かっておらぬ。アレが皇帝とならば、国政はベレンツォレル一族が口を出し、専横を許すままになろう」

あー。用は優柔不断で意志薄弱って事かな？

噂ではそんな細かい性格まで流れてこなかったからなあ。

まあ、これはあくまでアルブレヒトの私見であるわけなんだけど。

「ヨアヒムは言うまでも無い。あれはただの小者、俗物だ。アレの背後にいるリングエンに操られているだけのこと」

確かに、第二皇子は良い噂あんまり聞かないよなあ。

彼の奥さんの一族の当主が偉い大物政治家で、国政に重きを成しているのは有名だけさ。

「そのほかにも、現皇家にはろくな者がおらぬ。だから俺が玉座に着くしかないだろう」

うん。まあ、あんまり良い噂聞かないんだよね、皇族達つて。現皇帝含め。

勿論あからさまに悪い噂が流れているわけじゃないんだけど。

なるほど、ねえ。

この状態じゃアルブレヒトが立つのがベストってわけか。

「分かりましたわ。立ち入ったことを聞いてしまつて申し訳ございませんでした」

しょうがない。ここまで踏み込んだら中途半端に抜け出すことも出来ないだろう。イヴァンにも連絡を入れておくか。

で、そこからは本来の作業。鉄の確認とか、この娼館を使うときの注意点だとか私の役割だとかを詰めていたわけだけど。

まあ、そこまではよかったんだよ。鉄の品質にも一切問題はなかったし、テオドールのヤツも暴走しなかったし。

でもさあ。その時鉄の生産量の話から人手の話になつて、徴兵とかそつ言うのの。あと流民がどうこうとか。金が足りないとか。

で、何にも考えずについついぼろつと言っちゃったんだよね。

現代の税制はどうだったかなあ、とか、大規模雇用のための産業構造とか、常備軍がどうこうとか、ぼんやりと思い出しながら。もと

もとそう言つのにそう詳しいわけじゃなかったから、ほんとに外郭だけ、というかこんな意見もあります、程度だったんだけど。

興味深そうな彼らの顔に、しまった、と思ったときにはもう手遅れ。

「随分と面白い」

無表情のまま目を輝かせてこちらを見るパウエル君と、面白そうに見えるアルブレヒトとフランツ。その二人を見て胃を抑えているツエルプストー。

いやとりあえず、なんかすまん、ツエルプストー。

変態に振り回される私としては人事とは思えないだけ、こつ、身に摘まされるというか、なんというか。

「凄い発想ですねふむ荒削りで乱暴ではあるが見所はありますこれは色々とつめていけばあるいはそのあなたこんなところで娼館経営するよりも当方の文官の道をめざしませんか是非そうするべきですともさあさあ早くわたしのもとへ共にアルブレヒト領を豊かにしようではありませんか」

パウエルが、一息でそういいきつた。素晴らしい早口の上、一切変わらぬ無表情で。

ていうか、君先ほどまで一言も口開いてなかったよね？

フランツの方は色々と思見出したり世間話仕掛けてきたりしてたけど、君は聞かれても首動かすだけだったじゃん！！何でいきなりマシガントークかましてくれてるのさ。

えーと、これは引き抜かれているわけだよね？

「あの、残念ですが、」

「あなたには単純な農地の方よりも産業関連のほうが良いでしょうね何心配することはありません私がしつかりと補助をしますそれとも商業関連のほうが好きですかそうですねならばそこも調度手が足りていないという報告があつたばかりです」

「いえ、だから、」

「何心配することはありませんあなたがどれが好みだろうが得意だろうがどうせ万年人手不足なのですそのうちすべての部署の仕事や書類に囲まれることができるようになりますともその上……」  
（以下延々と続く）……」

君人の話聞く気無いよね？

って言うか万年人手不足って何だよ。イヤだよそんな職場。

というかいったい何時息してるんだ？

「あゝ、セレナ嬢、申し訳ない。こうなってしまうては一切人の話は聞かなくてな」

ツエルプストーが申し訳なさそうに謝罪してくれた。  
アルブレヒトとフランツは既に興味が失せたのかテオドールと話し込んでるし。

「いいえ。テオドールもああですから」

なんか言ってて情けなくなつた。

「その内止まりますので・・・酸欠で倒れて」

それまで喋ってるんだ・・・。

なんかこう、奇妙な共感というか、同病相哀れむというか。なんともいえない空気の中で、私達は黙っていた。

あ、倒れた。

で、倒れたパウルを運び出して彼らは帰っていったのだが。

なぜかその日以来書類が私宛に送られてくるようになった。

内容はあの日私がこぼしてしまったことに関する問い合わせだとか、起こった問題に対する意見が聞きたいとか。一つ返せばその内容に関する問い合わせや、注意点とかの書類が数倍になって返ってくる。とんだ倍々ゲームである。

きつと無視したらしわ寄せは全てツエルプストーに行くのだろうな。そう思うとなんだか居た堪れなくて仕上げてしまったんだが。

それにいざという時はロマリアに対抗して私を守ってもらわないといけないから、ゲルマニアやアルブレヒトには強くなってもらわないと、とも思うわけだし。

そんなこんなで出来上がった書類地獄。

今思えば、最初にきつぱり断つとけば良かったんだよなあ。



尽きぬ書類の山に囲まれながら、そう大きくため息を漏らした。

### その34（後書き）

主人公の天職はきつと墓堀職人。

### その35（前書き）

とんでもNAISEI編のはじまりです  
どんどん突っ込み入れて下さい。

## その35

『国の基礎は教育である』とぶち上げた女がいたらしい。

死屍累々、疲れ果てた同僚と書類地獄の中で、とうとう彼は爆発した。

「あああああああ、一体どこの阿呆だこんなこと考えやがったのは！！！！！！」

すかさず、インク瓶が彼の頬すれすれを飛んでいく。

「うつせえぞつつ！！騒ぐ暇があったらとつと手え動かしやがれ！！！！」

アルブレヒト領の行政府、そのとある一室における状況である。

教育改革~~~~~あるいはアルブレヒト領官僚の受難？~~~~~

盛大な音を立て、扉を叩き壊さんばかりに乱暴に開けて入ってきた男に、その部屋の中にいたほぼ全員が内心でため息をこぼす。

うわあ、ついに来たよ。

それが彼らの偽らざる心境であつた。

男はそんな彼らに目をくれず、この、一般には『秘書室』と呼ばれている部屋の一審奥に座る、彼に全く目をやらずに仕事を続ける人物へと歩み寄る。

怒鳴り散らす彼の名はダーヴィッド・フォン・ハーベルグ。この行政府で金の管理を一手に任されている男。没落貴族の出身ながら、口も態度も悪いが能力は確かである。

「パウル！！貴様どういことだこの試算は！！」

「落ち着いてくださいダーヴィット様……」

おろおろと、慌てて入ってきた男の副官が気弱そうな声を上げる。

怒鳴りつけられたのは、名目上はこの秘書室の主任にして、実質はアルブレヒト領の内政のほぼ全権を担っているパウロ。

その彼は、己を怒鳴りつける男に一瞥も返さずに一枚の書類を突きつけた。

「ああ？そりや確かに人手不足は深刻だがよ、何もここまで急に変わるこたねえだろ。これで新しい政策何個目だよ。出せる金にも限度ってモンがあるんだよ」

アルブレヒト領行政府は忙しい。

休み？なにそれ美味しいの？そう聞きたくなるほどに、休暇という言葉と縁の無い職場である。

何故そんなにも忙しいのか。

理由は色々ある。

まず貴族官僚が殆どいないこと。

皇子の領土である。普通は王都から側近を連れてくるなりなんなりするのだろうが、彼らの主はアルブレヒト。

貴族と仲が悪いことで有名な皇族。

そんな彼についてくる官僚なぞ殆どいない。

また、地方貴族のプライドの高く能力がそこまでない者は率先して追い出す。

おまけに入ってきた者達が、あまりの仕事量に次々とやめていく。すると残っている者たちに加速度的に負担がかかり、それに耐えられない者は止めていき……。と負の連鎖が起こる。

結果として、今のこっている者たちは優秀だが、常に過労死寸前に追い込まれている、という現状。

もちろん、この現状に上層部は何とか人員を補充しようとはしたが、そもそも常識的な人員がやめていく理由の何割かはこの奇人変人変態の多い職場に付いて行けないことが上げられる。その元凶たちがどうしようとしたところで、焼け石に水ほどの効果もありはしなかった。

そこで上がってきたのが今回の議題。

要は、下手な鉄砲も数打ちや当たる、平民に教育を施せば何人かは使える者が出てくるだろ、ということ。

言わんとすることはダーヴィットも痛いほど承知していた。

なにせ、人手不足の影響をもろに被るのは彼ら上層部。各々問題はあるが能力だけは確かなので表ざたになっていないだけで、彼らの処理しなければならぬ仕事は膨大な量に達していた。

だが、だからといってはいそうですか、などと頷くわけにはいかな

「貴様な、領内の子供全員に教育を施すつてのがどれほどのことなのか分かってんのか？」

もちろん、反発があることなどこれを立案した当初から分かりきったことだった。

週一とは言え、子供は立派な働き手。親達は納得しないだろう。

だから一家族一年に五エキューの助成金を出すことにした。

それでも子供の手を借りなければ、いや手を借りても生活が成り立たない浮民や、最下層の貧民の為に前々から進めていた働き場所となる大規模な工場や農場を作る。

それでも反発は根強いだろう。

貴族やブリミル教からの横槍も入ることは想像に難くない。

何よりも。

「これ全部実現するためにいくらかかると思ってたやがる！？金が無尽蔵に湧いて出てくるなんざ思ってたんじゃないやねえだろうな！？」

エキュー金貨が、スウ銀貨が、ドニエ銅貨が、目の前で減っていくのを見るしかない俺の気持ちに貴様にわかんのかあ~~~~~！？あ、俺の金、俺の金、俺の金がああ~~~~~」

いや、あんたのじゃないし。領の金だし。

錯乱したようにわめき散らすダーヴィッドに、聞いていた人間達は内心で同じ突込みを入れる。

例外は何を考えているのか全く分からない無表情で仕事を進めるパウルだけだ。

副官      ティナ・フォン・トスニルドはすっかり頭を抱えている。

そう。ダーヴィット・フォン・ハーベルグ。没落貴族で貧乏な家に生まれた彼は、大層な吝嗇家であり、守銭奴だった。彼の金銭に対する執着は並大抵の物ではない。

それは彼がここアルブレヒト領の金の管理をするようになってから、経費が三分の二に減ったということからも如実に現れているといえるだろう。

一見まともに見える彼も、優秀ではあるんだけど・・・アレさえなければねえ。と言われるアルブレヒト領上層部の立派な一員だった。

だがまあ、言っていることは間違っていない。

大規模農場を作る為に森を開墾し、農地を作り、人を雇う。

ただそれだけでも、かなりの金が出て行くのだ。

おまけに製鉄所を巨大化するだの、工場を作るだの。

さらには助成金に、教育を施すための人員の確保だ。

一体いくら使うことになるのか。

生半可な額ではないことだけは確かである。

そもそもが、アルブレヒト領はそうまで豊かな領地ではないのだ。アルブレヒトがこの領に来るまでは、本当に貧しい貧しい土地だった。

だからこそ、宮殿で疎まれていたアルブレヒトに下賜されたのであるが。

アルブレヒトがこの地を任されたのは約十年ほど前。

何も無い状態から始まった領地は、彼自身が亜人を討伐し、少しでも痩せた土地を何とかしようと魔法をかけ、森を切り開き、道を通し、商人を誘致し、鉱山を開き。そうして十年間かけて、少しずつ少しずつ豊かになってきたのだ。

当然ながら、初期の頃は殆ど赤字。今になってようやくと余裕が見



えてきたかどうかと言うところ。

特に、アルブレヒト領の一番の強みは鉄である。

だが、実は質のいい鉄が作れることは最重要機密であり、一般的に流している鉄の質はせいぜいが中の上といった所。ゆえにそこまで大金は入ってこない。

半年ほど前には最新式の銃を買うとかで、大金をはたいた。

まあその銃にはそれだけの価値があったことはダーヴィットも否定はしないが。

だがしかし。

もうこれ以上出せる金が無い、と言うのは本当のことだった。

「心配ない、ダーヴィット。製鉄所の件は俺とアルブレヒトが私財を出すし、教育関連の費用はさる人物が負担してくれるそうだ。その他の工場は今すぐ作るつもりは無い」

背後から響いた声に、ダーヴィットが振り向く。

「ツエルプストー殿」

ダーヴィットが暴走している、と言う知らせを受けて駆けつけたオスカー。

ティナが彼に感謝のまなざしを注ぐ。

ここアルブレヒト領行政府では、『困ったことがおきたらツエルプストーへ』はほぼ合言葉のような不文律である。

こうして彼は日々愉快な上司と同僚達に振り回される日々を送っているのだ。

「教師も教材もむこうのほうが何とかするそうだ。どうだ？それなら何とかならないか？」

素早く頭の中で計算を繰り返す。

「そうですね。実質負担が農場関連だけであるのならば、何とかして見せましょう」

ダーヴィットはできないことは出来るとは言わない。出来ることを出来ないとも言わない。  
そして、出すべき出費、回収が期待できる出費や利益が期待できる投資に対しては出す物を出す。

「ならば問題ないだろう」

「でも本当にギリギリですよ。あゝ、くそ。やっと幾らか貯まるかと思っただけなのに」

チツと、鋭い舌打ち。

「じゃあ俺は自分の部署に戻りますよ。部下の尻叩かにやいけなくなりましたからねえ。行くぜ、ティナ」

こうして、アルブレヒト領内政官達の悪夢は幕を開けた。

開墾のために整えるべきはまず、その周辺の亜人を討伐するための武力である。

「おい、第三軍の勤務状況はどうなってる？今月の亜人討伐行けそうか？」

「無理ですよ。彼ら1カ月ずっと東部の巡視してたんですよ！？」

「だが第一軍も第二軍も今は手が離せないぞ！」

「四軍は手え空いてんじゃないっすかあ？」

「馬鹿言え！！奴等は王都帰りの上に盗賊との戦闘もこなしたばかりだ！！」

「やっぱり第三軍のほうが・・・」

「いや、だが」

そうして。

「おい、第三軍の野郎共。喜べ。明日から亜人討伐だ」

「はい~~~~！？」

「は、自分達は先日東部から帰還したばかりであります」

「命令だ」

「・・・っそお・・・」

「死ぬ・・・。絶対死ぬ」

「なおこの討伐には特別にフランツ殿も参加なさるそうだ。府抜けた真似をさらせばどうなるか・・・、言わなくても分かるな？」

「・・・」

「終わったな」

「・・・死なない程度に頑張ろうぜ」

オスカー・フォン・ツエルプストーと並ぶアルブレヒト軍の立役者、フランツは普段は気の良い兄貴肌だが、軍務のとき彼の前で失態を犯せば『地獄の鍛錬』が待ち構えている。  
ある意味恐怖の象徴であつた。

教育を施すにせよ助成金を出すにせよ、人を雇うにせよ、綿密な実態調査は欠かせない。  
と言っわけで。

「はあ！？一体なんでこんなに浮民が増えてるんです！？」

「ちょ、待て、何だこの数字。おい、これ計算したの誰だ！？明らかに間違ってるだろ！！」

「はあ？逃げられた？別に捕まえようってんじゃないんですから。え！？軍隊出したって、どこの馬鹿だ！？」

「ああ、くそ。やっぱり警戒されてんだよなあ」

「捕まえるつもりは無いんですが・・・」

「他領では迫害されてきた方々ですからねえ」

「おい、これ明らかにごまかされてるだろ。助成金目当てで嘘つくようなヤツにはやっぱ罰則定めた方が良さそうだな」

「ここ、施設に出来ないのか!？」

「無理だ!!ここの土地は私有地だ!!」

彼らの仕事に終わりは見えない。

家に帰る時間も食事をとる時間も、寝る時間さえも惜しみ、書類を捌き、亜人を退け、調査を続ける。

ただでさえ忙しいと言うのに、通常業務にさらにプラスアルファで押し掛かってくる仕事の群れ。

将来確実に楽になるためとはいえ、はたしてその日が来るまで生きながらえることが出来るのだろうか。

彼らは真剣にわが身を案じた。

「うわ、倒れたぞ!？」

「起きろ!頼む起きてくれ!!お前にまで倒れられたら、あの書類の山を俺は一人で処理しなきゃ行けないんだよ!!」

「こつちでも誰か倒れてるぞ!!」

「かまわん、たたき起こせ」

彼らの大半が、後に『思い出したくも無い日々』。そう語ることになる月日の、それはほんの前哨戦に過ぎないのだと、幸か不幸か、知るものはいない。

そうして、数々の犠牲を出して。

やっと『アルブレヒト領教育改革案』は形になった。

就学年齢は7歳～16歳までは無条件に受け入れる。

卒業までの期間は約三年。

目標は日常的な読み書き及び計算をこなせるようになること。

将来的には識字率100パーセントをめざす。

教師役は引退した娼婦達を使う。

各村の集会所、無いときは新たに集会所を建ててそこで授業を行う。授業は週一で行われる。

一定以下の収入の家庭には年5～10エキユーほどの助成金を出す。アルブレヒトが経営する農場や工場に勤めるものの子供は彼が責任を持って教育を受けさせる。

特に優秀な者は推薦を受け、報奨金を貰って上級教育を受ける権利を有する。そこでも優秀な成績を収めた場合、推薦または試験を受けた後、各人の能力によって行政入りも可能になる物とする。

などなど。

見積もりを記した書類をツェルプストーに提出し、ついでと言うように口を開く。

「でも、良いんですか、ツェルプストー殿」

「何がだ？ダーヴィット」

ダーヴィットの口が笑みの形に歪んだ。

「分かってんでしょ？教育改革がどののといつても、莫大な費用を要する上、効果は未知数。

上手くいったとしてもアレの効果が始めるのはどう考えても5年は先だ。なんだって今なんです？」

「・・・お前ならもう、分かっているんじゃないか？だから一人でここに來たのだろう？」

くつくつと、笑い声が室内に木霊する。

「やあっぱりねえ、そう言うことですか。うちの大将もすいぶんとまあ、大胆なことをお考えなさることです」

オスカーが思い切り眉を寄せた。まるで苦虫を噛み潰したかのような顔。

どうやら思い出したくも無いことを色々と思い出してしまったらしい。なにせアルブレヒトの『大胆』はたいてい彼の胃に大いに負担をかける結果となる。

「アレが破天荒なのは今に始まった事ではない」

「全くですねえ。だからこそあいつの事も泳がせてるんでしょうが・・・。

ところで、この教育案、いつから始めるんです？」

「ああ、今度新しい司祭が赴任するから、それを待つてからだな」  
アルブレヒト領は以前までその広さの割りに貧しい上に人が少なく、教会の責任者は司祭だった。  
今は多少豊かになったとはいえ、辺鄙な場所にあることもあり、司教区に格上げすることは防げてある。

それにしても、とダーヴィットは首をかしげた。

「なんでまた、新しい司祭が来るまで待つんですか？誰でも同じなんじゃ？」

どうせ邪魔されるだけなのではないか？そう露骨に顔に出ている。

オスカーはただ意味深に笑ってみせるだけ。

そして数カ月後。

「アルブレヒト様、新しくこの教区に赴任してきた司祭様が挨拶にお見えです」

「通せ」

「失礼いたします。」

このたびこちらに赴任いたしました、ニコル・アクティナスと申し



ます。なにぶん若輩者ではございますが、始祖と民のため、精一杯  
尽くさせていただきたいと思っておりますので、どうぞよろしく願  
います」

### その36（前書き）

長いこと放置してしまっていてすいません。

少々忙しくて更新できませんでした。

なんかその間に評価ポイントが2000を突破・・・。

皆様、本当にありがとうございます。

何かやってほしい、ということがあればいつでもどうぞ。

といっても前の記念小説すらまだUPできていないのですが、それでも良ければ、是非に。

## その36

よし、これで最後。

書類の山を綺麗に片付けて、大きく伸びをする。

「やっと終わった。

ナターリエ、イヴァンに連絡とってもらえる?」

調度お茶の用意をしにきたナターリエに声をかける。

「イヴァンに、ですか?」

「そう。なに?それとも今は忙しいとか?」

イヴァンも随分出世して、今や一地区を任せられる押しも押されぬ幹部格だからなあ。

「いえ。そんなことは言っていませんでした。すぐに連絡を入れてみますね」

「よろしく」

そしてその日の夜。

遅くなると出かけたジジイのいない屋敷の一室で、ジョアンナ、ナターリエ、イヴァン、ニコル、テオドールの全員を集めて話し合っていた。

議題は勿論、これからの行動について。

アルブレヒトとも繋がりを持ったし、それに伴う変更点とかも色々あるわけだし。

まずはこれまでの経緯の説明から。

アルブレヒトとの出会いから取引にいたるまでを大雑把に話す。

「ま、こういうわけでアルブレヒト皇子と組むことになった。それに伴って君達にも幾つかやってほしいことが増えるわけだけど」

それぞれの顔を見渡す。

「テオドールは今までどおりね。君はまず第一に武器のことだけ考えればいいから」

「分かりました」

おーおー。幸せそうな顔しちゃってまあ。

でも、テオドールの作り出す武器が高性能なのは事実だし、来る継承争いのことを考えたら、武器はいくらでもほしいのが本音だしね。

「ジョアンナには諜報関係、特に貴族関連に手を伸ばして欲しい。

勿論無理をする必要は無いよ。

後、部下をサンディトに接触させて。勿論こつちが糸引いてるってのはばれないように」

ジョアンナは『無理なんてしていませんよ』なんて笑うけど、実際かなり危険な橋も渡ってるみたいだし。

情報と引き換えに大怪我とか、本当にやめて欲しい。

「ナターリエには、娼館のほうのまとめ役を頼みたい。

アルブレヒトたちのこともあつて、私が『水辺の誘い』関連に割くことの出来る時間は減ると思う。その辺、私の目の届かないところに注意して欲しい。ユリアにも協力を要請してかまわないよ」

「はい」

ナターリエ自身、元娼婦つて事もあつて勝手も分かつてるし、何か問題が起こってもユリアがいれば大丈夫だろ。

「で。イヴァンとニコルなんだけど」

二人の顔を真っ直ぐに見る。

「君達に頼むのは少し難しくなる。無理そうなら無理だといつてくれてかまわないよ」

一呼吸おいて。

二人が何も言わないのを確認してから話し始める。

「まずは、ニコルなんだけど、君、今度司祭に昇進になるから」

「・・・は？」

「だから、昇進。ただし辺境に飛ばされるけど」

これは確定事項だ。ニコルは、今までの情報や金を使つての活動の成果で、かなり上層部からの覚えが良い。

元々が『五十年に一人』とか言われるほどの逸材だ。

ジジイも昇進させようとしたんだが、ここで問題が一つ。

ニコルは政争に敗れた没落貴族の出身だ。それも優秀な。

幼稚な嫌がらせをしてくれたサンデイト助祭をはじめ、嫉妬とか利害関係だとかでニコルを気に食わないものたちも数多い。

サンデイト助祭も今度司祭に昇進するんだけどね。

そして、サンデイト家とアクティナス家はかつての政争で争った勝者と敗者。

サンデイト家はニコルが出世する、それも自分達の後継者と同じスピードで、というのは嫌だろう。

いくら実質ロマリアの独裁者となったジジイでも、名門サンデイト家は立てなくてはならない。

まったく、面倒なことだと愚痴混じりに聞かされて、それから。

「そなたならどうする？」

と問われた。

マルティノツジ枢機卿の『病死』にいたる一連の事件で、私が政治関連に興味を持っていることを知ったジジイは、時々こうして私の意見を聞いてくるようになった。

私の言うことをきき、どこが良かったか、何が悪いかを教える。

最近ではこれが楽しみらしい。

ジジイのそばで色々と習うと、人格はどうあれ、この男が本物の政治家だということが見にしみる。

見ているだけで勉強になるというか。

これならヴィットーリオやガリアのジョゼフにもある程度は張り合えちゃうんじゃない？と思う程度には。

それを考えるだに、ジジイの『死期』が気になるんだよねえ。  
原作に『クザーヌ・ゲルジオ』なんて男は存在していなかった。  
ヴィットーリオが教皇になったときも、最有力候補はマザリーニ枢  
機卿だったらしいし。  
ということとは、少なくともヴィットーリオが教皇になる頃にはジジ  
イの力はかなり落ちているか、それとも死んでいるかのどちらかに  
なるわけだが。

正直、死んでるほうが確率的には高いと思うんだよね。  
もういい年だし、原作開始まで20年以上あるんだ。  
問題はそれがいつか、って事なんだけど。  
今のところはすこぶる元気だしなあ。

というか、正直今死んでもらうわけにはいかない訳だけど。  
私の権力的にも、保身のためにも。

「セレナ様？どうなさいました？」

心配そうにこちらを見るジョアンナの声。

いけない。

こんなことを考えている場合じゃなかった。

「なんでもないよ、ジョアンナ」

ええと、どこまで話したんだっけか。

ああそうだ、ニコルの昇進の話だったっけ。

で。先ほどの問いには、両方を昇進させ、サンディトのほうはこの

ウィンドボナの大聖堂付きの司祭にして、ニコルは地方に飛ばして実務経験をつませたらどうか、と提案したのだ。

どうやら私の答えは及第点だったらしい。

サンデイトには名、つまり名誉を。ニコルには実、後々役に立つであろう経験をつませる。

ついでにニコルを飛ばす先は、アルブレヒト領ではどうか、と提案しておいた。

で、今日になってそれが本決まりになったとジジイに聞かされたわけだ。

「まあ、こんなわけで、君にはアルブレヒト領に飛んでもらうことに決定したから」

ぼかん、と普段は生真面目なニコルが間抜けな表情をさらす。

「は、え、いや、だからって何でまたアルブレヒト領？」

良い所に気付いた、ニコル。

「ん~~~~、実はアルブレヒトの所の今の司祭がさ、皇后の実家のベレンツォレル家の、ひいては第一皇子と繋がってるらしくてさ」

だから今までやりたくても大々的な改革を施せず、警戒を買わないように、『そこそこの豊かな領』レベルでとめておいたんだそうだ。馬鹿正直に新たな政策を試せば、彼からすぐに第一皇子側に情報が流れる。

そして王宮側からちょっかいが入りかねなかったから。



王宮が口出しできなくても、その司祭が何やかやと文句をつけていたらしい。

少しでも目新しいことや、平民を優遇するような政策を採ろうとすれば、やれ異端だの何だのとくちばしを突っ込む。

そうでなくても四面楚歌状態のアルブレヒトは、教会を敵にまわすわけにもいかなかったし。

で、さすがにそんな状態じゃ何も出来ないので、ニコルに行ってもらおう、と。

それでも、金は極秘裏に商会に預けたりなんだから、ちゃっかり稼いでみたいだけ。

「多分、ベレンツォレル側からなんか言ってくると思うけど、ニコルなら上手くあしらえるだろう」

頑張つて、と笑ったら大きなため息をこぼされた。

「つまりは私は、王宮側からの防波堤をしつつ、第三皇子に協力して、お前との連絡を繋げばいいんだな？」

「流石だね、ニコル」

正にその通り。

面倒くさいだろうし、こんな俗世に君は係わり合いになりたくは無いだろうけど、頑張ってくれたまえ。

「まあ、細かいところは後で詰めよう。」

最後にイヴァンなんだけど。君には探して欲しい人物がいるんだよね」

この中で、一番私と繋がっているとばれる確立が薄いのがイヴァンだ。だからこそ彼にしか出来ない役割がある。」

「探して欲しい人なんだけど、・・・新教徒。それも出来れば熱心で、狡猾な人。それなりに有能ならなおよし」

「新教徒、だと？」

「そう。探したら、君が直接接触はしなくていいから、部下でも何でも近づけて。ベレンツォレル家の若君に接触させるから」

ベレンツォレル家の時期当主、エドムント・フォン・ベレンツォレル。

大貴族の生まれで、叔母は皇后。

従兄弟の第一皇子とは幼い頃からの遊び友達で、彼が帝位に着けば、側近の座は決まっている。

周り中から甘やかされた、正に『貴族のお坊ちゃま』。それも悪いほうの意味で。

少し探りを入れれば、出るわ出るわ、道を歩いていた平民を気に食わないからと無礼打ちしたのだの、美しい娘を散々もてあそんだ拳句殺したのだの、枚挙に暇が無い。

おまけにプライドだけは高くて無能。

それでも現当主は猫可愛がりしてるというんだから、もう。

で、その彼に新教徒を近づける。

最近うちの店にもくるようになったしね。

馬鹿で無能でプライドが高い相手はやりやすい。  
ただひたすら煽ててやればいいんだから。

「できそう？イヴァン」

「探すのは難しくはなさそうだが、問題は上手く接触させられるかな。……。俺の部下は、あまりそう言うことに慣れていないんだが。」

なあ、フェイス・チェンジのかかったマジック・アイテムを入手できないか？」

「それなら出来ないことも無いけど……。」

イヴァンがよし、と頷く。

「ならば、それを使っておれ自身が動こう。『新教徒』を上手く操縦して、暴走させずに、それでいて気に入られるようにもって行けばいいんだな？」

「その通りだけど、大丈夫？」

ふん、と鼻で笑う。

ナターリエがそんなしぐさを見て頬を染めた。  
バカップルどもめ。

「この程度の危険など危険のうちにも入らん」

そういえば君は裏社会の実力者だったね。  
まあ何でもいいや、上手くいくなら。

「そう。じゃあ頼んだよ」

### その37（前書き）

長らく更新停滞してしまい、申し訳ございませんでした。

これから少しずつ、更新再開していききたいと思います。

ところで、これからの展開について決まったことがあります。  
簡単に言つと、前々から言っていた終わり方の話のことです。

詳しくは日記のほうに書いてありますのでそちらをご覧ください。

本筋のほうを決めました。

終わった後でハッピーエンドバージョンも書くかもしれませんが、  
本筋というか本編の方は必ずしもハッピーエンドとはいかないです。  
いえ、だからと言って鬱エンドを求められると拍子抜けさせてしま  
うと思うのですが。

ただ、めでたしめでたし、の終わりではないです。

主人公は幸せに暮らしました、的な終わりじゃなきゃいやだ、とい  
う方は申し訳ありませんが避けていただいた方が無難かもしれません  
です。

更新停滞をした上に長々と言ひ訳を垂れ流してすいません。

ではそれでも良いと言つてくださる方は、どうぞこれからもよろし  
くお願いいたします。。

## その37

草木も眠る丑三つ時。

しんとした静寂に支配された暗闇の中を、息を殺して移動する物がいた。

もう少し、もう少しだ。誰にも気付かれること無く門を抜けさえすれば

めったに人の通らない場所にあるぐり戸に、そつと手をかける。

ここまで来れば、もう見つかることは無いだろう。  
後は外に出てさえしまえば。

かんぬきをはずし、扉を開こうと、

「そこまでだユルゲン」

体が凍りつく。

何故だ。何故ばれた？作戦は完璧だったはず。

彼が脳内であかく間も、次々と彼の周りに人が展開し、気付けばすっかり囲まれていた。

「ユルゲン……。何故こんなことを」

同じ部署に勤める同期であり親友であるマテウスが彼を辛そうに、どこか信じられない、信じたくない、そんな目で見つめる。

「おまえはそんなヤツじゃなかっただろう、ユルゲン。何故・・・何故裏切った。何故抜け出したんだ・・・」

くつと、彼は目をそらした。

長年助け合い、時には競い合ってきた彼の顔を、真っ直ぐに見ることが出来なかった。

「俺には妻と、生まれたばかりの息子がいるんだ」

「ユルゲン・・・」

「だが裏切りは裏切りだ」

周りにいる、おそらくこの集団のまとめ役の男が冷たい声で断じる。

「分かってるさ、そんなこと。気持ちみんな一緒だって。

だが、だがな、いい加減にしないと妻が怖いんだよ！！おまけに息子なんて俺の顔見たら泣き出すんだぞ！！人見知りされるんだよ、実の息子に！！

一体何日家に帰ってないと思ってるんだ。一日、いや、一時間で良い、いい加減家に帰らせてくれ！！」

ふん、と鼻で笑う。

「みんな同じだといってるだろうが。どうせならとっとと見捨てられてしまえ」

ひでえ、と思わず皆がこぼした。

「ほら、主任最近奥さんが出ていったって・・・」

「ああ、『そんなに仕事が好きなら、仕事と結婚したらいいか』と  
言われたらしいな」

「うわ~~~~きつつう・・・」

「聞こえてるぞ、そこお!!」

真赤になつて怒鳴り散らす男の命令に従い、逃げ出そうとしたユル  
ゲンを拘束し、城へと戻る。

「ふん、帰りたいのならばとっと仕事を片付けるんだな」

「出来るんならとつくにやってますよう」

とある夜のアルブレヒト領行政府。ありふれた光景のお話である。

~~~~~アルブレヒト領官僚の受難~~~~~

第一皇子側、というよりも皇后の一族と繋がっていた司祭が移動に
なり、アルブレヒト一派に好意的なニコル・アクティナス司祭が赴
任してきたことにより、彼らは大分自由に動けるようになっていた。

平民の教育も、教会と上手く連携をとって、そこそこ上手くいつて
いる。

それに関連して作った製鉄所と大規模農園も。

で、次に手をつけたのが、出来上がった作物や鉄を売り出すこと。

今まで売りに出していた鉄は質の低いものだったが、今回からは中の上クラスの鉄を売りに出す。

そのために必要なのはスムーズな流通の確保だ。

街道を新しく切り開き、拡張し、町の設備を整える。

言うのは簡単だが、実行するとなると様々な問題が出てくる。

特にアルブレヒト領は辺境。

山と森に囲まれた地だ。距離の問題や亜人の出没などの厄介ことは掃いて捨てるほどある。

それでも、官吏や軍人が己の体に鞭を打ち、最後の一片まで力を振り絞って街道を完成させた。

ここにいたるまでは様々苦勞があつたが、幸いなことは平民でも一対一で亜人に対処できる武器が彼らの手元に有ったことだろうか。

今までは、亜人と一対一で対峙することができるのは、手だれのメイジだけというのが常識だった。

オーク鬼ですら、戦士五人に匹敵するといわれているのだ。

群れを退治するともなれば、軍隊を出さなくてはならない、それですら負けることも間々あること。

だが、今アルブレヒト領の街道沿いの森で起こっている事態は、そんな今までの『常識』を根こそぎ破壊してしまうものだった。

「構え、良いか、よゝゝゝく狙えよ。・・・よし、打て」

『打て』の声と共に土メイジが即席で作り上げた壁の間から、おび

ただし量の銃弾が放たれる。

間をおかずに第二射、第三射、四、五、六射も。

後に残るのは、遠距離から放たれた弾丸に体中を射抜かれ倒れ付す、オーク鬼の数十匹はいようかと思われる大群。

「よし。着剣。かれ」

手に手に、剣先のついた長い銃を持ち、それでオーク鬼に止めを刺していく。

「隊長殿、オーク鬼の全滅を確認いたしました」

隊長、と呼ばれた男はその声に一つうなずく。

「よし、任務は完了だ。火のメイジに死体を焼き捨てさせる。なおその際、森に延焼しないように気を配れ。ああ、薬莢もできる限り回収するように各班に命じろ」

「はっ」

命令を復唱した部下が去っていくのを見送り、己の横に立つ副官に独り言でも言うかのように話しかけた。

「しかし、この新式の銃は凄いわな」

「その通りですね。自分達の新兵の時分は、亜人退治といえば死をも覚悟する任務でしたが」

展開する部下達を見やって、かつてを思い返すように目を細め。

「そうだったな。あの頃は亜人が怖くて仕方なかった……。それが今じゃ、やつらの絶対に手の届かない遠方から、一方的に殲滅することが出来るんだからな」

「ええ。殿下が新式の銃を訓練せよと仰ったときは、はたしてどれほどの物かと思いましたが、少なくとも亜人や夜盗に対してであれば多大な効果を発揮するようですね」

その通りだな、と相槌を打ちながら、男は内心ぼやく。

メイジにこそ通じる武器でなくてはならないのだが、と。

彼らの真の敵は、メイジを数多く有する正規軍なのだから。

「報告書が上がってきたぞ、アルブレヒト」

書類を片手に、亜人退治の状況を報告する。

「やはり新式の銃のお陰で大分楽になっているようだな」

「ああ。今までとは犠牲も速度も段違いだ。これなら街道整備の計画は前倒しでいけるだろう」

ふむ……。とアルブレヒトはわずかに考え込み。

「商人の集まりの方はどうだ？」

「そちらも悪くは無い。やはりそこそこ上質な鉄が、それなりの値

段で手に入るといふのは大分魅力的のようだ」

「そうか。ああ、官僚の教育のほうだが、やっとあの爺共を引っ張り出せそうだぞ」

見るが良い、そう言っ放られた書類に書かれているのは、数名の人間がアルブレヒト領に赴任してくる、ということ。

アルブレヒトが『爺共』というようにそこに記されている人間は、殆どがかなり高齢の人間だ。

だが、それを見たオスカーは目を輝かせた。

「承知していただけたのか!？」

「ああ。どうやら奴らとしても『平民に教育を』という考えには惹かれるものがあつたらしいな」

彼らは皆、年齢を理由に、あるいは疎まれ、あるいは権力闘争に倦んで一線から退いた者達。

だがその実力は折り紙つき。

現皇帝が若い頃から帝国を支えてきた名官ばかりだ。

そんな彼らに、平民出身の官僚教育官として来ないかと声をかけたのだ。

勿論声をかける人間もきちんと選別してある。

今回声をかけた数名は、曲がったことが嫌いで上官や主君に諫言を繰り返し、結果疎まれて遠ざけられ、そのまま隠居した者たちだ。

一筋縄ではいかないながら、彼らを味方に付けられたことは大きい。

「それからもう一方も釣れたぞ」

ひらひらと、ウィンドボナからの書状を閃かせながらアルブレヒトは彼特有の、猛獣のような笑みを浮かべる。

「ああ。それなら耳に入っている。知識人たちが興味を示しているとか。ヘクトールは上手く噂を流してくれたようだな」

アルブレヒトたちが打ち出した『教育案』は、斬新ではあるもののその効果のほどは未知数。

だが、『平民にも教育を』という言葉に、その理想に共感するものは多いのだ。

特に平民から成り上がった知識層。

その中にはこのメイジ中心のハルケギニアのあり方に、確固たる形ではなくとも、漠然とした疑問や不満を持つものは少なくない。

なにせ平民と貴族を分けるのは『魔法が使えるか否か』。ただそれだけ。

それ以外の能力に違いは無いのだから。

無能な上官を持つことになった平民は悲惨だ。兵士として、あるいは役人として、ただ貴族というだけで威張り散らす上司に涙を呑んだものは決して少なくは無い。

ましてやここは能力主義の風潮があるゲルマニア。

平民の知識層にとって、その貴族達の姿がどう映るか。

『志』を持つものは、いつの時代、どこにでも存在する。アルブレヒトが帝位を目指すように、ニコル・アクティナスがブリミル教の改革を目指すように。

平民の教育、ひいては彼らの地位の向上に繋がるこの政策に共感し、

理想を見る者もまたいるのだ。

そんな彼らが次々とアルブレヒト領の行政府の扉を叩いている。

金では決して購うことの出来ない『名声』を、アルブレヒトは手に入れた。

それに、十年後、二十年後を考えたとき。

教育の成果は必ずや出るはずだった。

そしてやがて来るのは、貴族　　つまりは『メイジ』の失墜。

もちろん、そこまで気付いていなくともそれが面白くない者も多い。平素からアルブレヒトを苦々しく思っている皇族や、大貴族達。

何かと文句をつけてくる彼らを、表向きはニコルとの協力関係をたてにしている。

平民達の教育には、ニコルも学舎に説教をしてまわったりと協力している。

逸材と名高く、枢機卿にも目をかけられている、ハルケギニア最大宗教の聖職者に喧嘩を売りたいと思う物はあまりいない。

今のところは小康状態を保っていた。

「ああ、それから、」

オスカーが何かを言いかけたとき、扉が叩かれる。

「入れ」

入ってきたのはパウル。

黙り込んだまま一礼して、一枚の報告書を主君の前に差し出す。

「ん？なんだ？ヘクトール・・・ウィンドボナからか・・・ほお、これは、これは」

くつくつと、アルブレヒトの喉が押さえきれない笑いに鳴る。

「どうした？」

オスカーは差し出された書類に書かれてあった文字を追う。

「これは」

まだ笑いを零し続けている主君を見やる。

アルブレヒトの何処か狂気をはらんだような目が彼を捉えた。

「ああ、やっとだ・・・ようやく始まった」

喜悦を抑えきれないといわんばかりの声。

彼の手に持つ書類には。

『帝都ウィンドボナにて、枢機卿の愛人であるセレナ嬢が娼館『水辺の誘い』で貴族の攻撃を受け負傷。

なお現在に至るまで意識不明の重体である』

そう、記されていた。

その38

目を開けると、そこにあっただのは見慣れたジジイの屋敷の私室。
んんんんんん？

私店にいたんじゃないかったっけ？いつの間に戻ってきたんだ？
ってか私何してたんだっけか？

いつものように体を起こそうとして。

「ぐ．．．う．．．」

体中を貫いた激痛に、息が詰まった。

あー！。

思い出した。そうだそうだ、そうだった。

私が生きてるって事は、上手くいったのか？

今回は大分危ない橋渡ったからなあ。

何はともあれ、情報収集からだね。

痛み、軋む腕を必死に伸ばし、枕もとのマジックアイテムに手をやる。

それから数秒もしないうちに。

「セレナ様！！」

扉を弾き飛ばさんばかりの勢いでジョアンナが部屋へと飛び込んできた。

いつも落ち着いている彼女にしては珍しい。

って、ちょ、顔が近い近い。

「お、落ち着きなよジョアンナ」

どうどう、とまるで動物でもなだめるように……、って、何で泣く!?

「ちょ、本当にどうしたんだよ、ジョアンナ」

「どうしたもこうしたもございません、セレナ様。四日もお目覚めになれなかったのですよ。傷もかなり深く……。一時は手遅れではないかと……。もうお目覚めにならないのかとも思っていました」

「四日、だって……。？」

しまった。予定より重症だったか。計画がずれなければ良いが。

「ジョアンナ、私は大丈夫だから落ち着けよ。それから私が寝ていた間にあったことの報告を」

「……かしこまりました。

計画に狂いはございません。情報の遮断は上手くいっています。枢機卿はまだ犯人を特定できてはおりません。また彼らのほうもセレナ様に気付いた様子はなく、今のところ上手くいっているかと」

よ…….

一瞬ジジイに犯人突き止められてるかと…….

まあ、予定より大分長く気付かなかったみたいだから、細かいところ修正しなきゃいけないだろうけどさ。

「そ、良くやってくれたね、ジョアンナ。向こうとの連絡は？」

「あちらも変更は無しと」

ふうん。アルブレヒトたちも上手くやってるみたいだね。それは何
良り。

後は……。って。

「ジョアンナ？どうしたの？」

何か言いたげにこっちを見られても、私は心の声までは読み取れないのだけれどね。

「セレナ様……。セレナ様たちの思いも、現状この作戦が一番効果があつたこともわかっています……。ですが、あえて申し上げます。

どうか、お体をもっと大切になさってください。

目を覚まさない貴方を、私達がどれほど……。

お願いです、セレナ様、お命をかけるような危ない事は、もう……

」

普段は冷静なジョアンナが、子供のように大粒の涙をこぼしながら、私に訴える。

ああ……。君は、本当に……。

「本当に、どうして君は私なんかをそんなに慕うんだろうね」

別に、何をしてやったというわけじゃない。

高々一度、薬を融通してやっただけで。

私にはもったいない部下だね。

もったいなさ過ぎて、その内罰が当たりそう。

ゆつくりと、精一杯傷に響かないように手を伸ばし、どうにか彼女の涙を拭う。そして、せめてと、語りかけた。それが私にとっては精一杯の、ぎりぎりの誠意で。

「ごめん、心配をかけたね、ジョアンナ。

でも、ごめん、もうやらないと、約束はしてやれない。それが効果的だと思ったら、私は何度でも命を的にするだろう。

だから、それが辛いようなら・・・」

止めてもいい、降りてもいいのだ、と。言おうとした言葉はジョアンナの声で遮られた。

「いいえ。セレナ様。お見苦しいところをお見せしました。

分かっていたはずなのに・・・。これでは、ただの愚痴ですわね」

一瞬だけ俯き、次に顔を上げた時にはもう、彼女の顔に涙は無い。いつもの凜、とした侍女の顔で。

「では、私はこれで一旦失礼いたします。水メイジの先生と、それから軽い物でも用意してまいります。」

枢機卿にも、セレナ様がお目覚めになられたと、連絡もせねばなり

ませんので、と。

一礼して去っていった、そのあまりの見事さに、知らずため息がこぼれる。

ああ、ジョアンナは強いな。

自分では弱さだと、そういつていたけど、彼女はどこまでも強い。本当に強い人とは、彼女のような人のことを言うのだろう。私には、きつと一生持てない。

あーあ。本当に。

「何で私なんかに忠誠を誓っちゃってるのかなあ、ジョアンナは」

それこそ、アルブレヒトにだって重用されるだろうに。

私なんかに仕えたところで、先は無いに等しいってのにね。

だって、私には未来はない。私にあるのは、過去の残骸だけ。

それに突き動かされるように、ただただ、復讐に向かって歩んでいくだけで。

それが終わった後なんて、きつと待っているのは破滅くらいだろうに。

ああ、でも、ジョアンナまでそれに付き合わせるわけにはいかないな。

イヴァンとナターリエには、二人の幸せな未来を手に入れるため。

ニコルは、ブリミル教の改革をする力を手に入れるため。

テオドールは武器開発。

私に協力する彼らは、それぞれ彼らの追い求める物を手に入れたいから、私がそれを用意してやれるから、っていう動機があるけど、ジョアンナは・・・。

いずれ私から離れてやっていけるようにしないと・・・。

忠誠の代償が破滅とか、笑えない。

破滅するのは、私だけで十分だろう。

だから、ジョアンナ、君は・・・。

しばらくして、水メイジが診療に来て、治癒の魔法をかけられて。秘薬を飲んだり、ジョアンナに手伝ってもらって軽食を取ったりして。

怪我の影響か、それとも服用している薬のせいか、うつらうつらとしていた所で。

「セレナ、セレナや、気がついたそうだな」

来たね・・・。

やれやれ、ここからが本番。

正直、病み上がりの状態で対峙するには、相手が悪すぎるんだけれどもね。

「ええ、クザーヌ様。ご心配をおかけしてしまって、申し訳ございませんでした」

さてと。気合を入れて誤魔化すのでしょうか。

ジジイが心配顔で私を覗き込む。

「おお……。良かった……」

セレナや、そなたが襲われたと聞いたときは心臓が止まるかと思うたぞ。四日も眠ったままで……。生きた心地がせなんだ」

皺だらけの手が、そつと私の手を握る。

てか、本当に顔色よくないな。

ふうん。本気で心配してたわけだ。

まあこのジジイ、身内にはこれでもか、って勢いで甘いもんな……。

「クザー又様……。ご心配をおかけしてしまつて、申し訳ございません。ですが、セレナはもう大丈夫ですわ」

安心させるように、微笑んでみる。

「それよりも、クザー又様の方こそ顔色が悪いですわ」

ジジイの後ろから入ってきたジョアンナに合図して、お茶の用意をさせる。

「何を言うか。わしの事など今は気にせぬでよい。

そなたは、一歩間違えれば今頃生きてはおらなんだぞ。

もう少し手当てが遅くなつておらば、始祖ブリミルの御許に……」

始祖の御許に……。って、そついやあんまりにも俗っぽいところばつか見てるから忘れてたけど、このジジイ一応高位聖職者なんだよ

なあ。

まあ、死んでもブリミルのところなんて生きたくないけど。
そんなところ行くくらいなら、地獄に落ちたほうが何ぼかマシ。
まあ、どの道私が地獄行きなのは確かだろうけどさ。

「クザー又様……。そのように悲しいお顔をなさらないで下さいませ。セレナはここで生きておりますわ。決して死んだりいたしません」

って言うか、まだ死ねないし。

まだ何にもしてない。父さんと母さんの仇どもだって、のうのうと生きてる。

トリステインへの復讐だって、そこに至る道にたどり着いたばかり。そう。

私はまだ死ねない。死ぬわけにはいかないんだ。

しばらく、そんなやり取りが繰り返されて。

「ああ、ところでセレナや」

ジジイが申し訳なさそうに、言い難そうに口を開く。

「どうかなさいましたの、クザー又様」

「怖いことを思い出させてしまうかもしれないが……。そなたにこのような大怪我を負わせた、その相手のことを、何か覚えておるかね？」

っ……。とうとう来たか、この質問が……。

「私に怪我をさせた人物、ですか……。」

勿論、きちんと覚えているさ。

顔も、風体も、着ていた服も、どの誰か……、爵位だって分かっている。

でも、それを悟られるわけには行かない。

今、私に怪我を負わせた、って言うか私がそうなるように仕組んだけど、まあ、その犯人を特定されるわけにはいかないんだよね。ここではれたら全てが水の泡。

こんな重症負って、痛い思いまでしたのがすべて無駄になってしまふ。

だから。

私がジジイの質問に対してできるのはただ一つ。

「…………たしか……。あ……。ああ……。」

包帯だらけの手で、頭を抱えこむ。

「セレナ、どうした、セレナ……！」

ジジイがおろおろと、私のことを迂闊に触ることもできずに、大声で水メイジを呼べと叫んでいる。

「大丈夫ですか、お嬢様」

「さあ、こちらの秘薬を」

「楽になりますので」

大勢に囲まれ、鎮静作用のある秘薬やら何やらを投与されてしばらく。

「クザー又様……。お役に立てずに申し訳ございません……。」

「いや、わしが悪かったのじゃ。怖いことを無理やり思い出させてしまつて悪かったの」

水メイジに、患者、つまり私を余り興奮させないように、と釘をさされたジジイもいつに無く神妙な顔。

「いいえ。クザー又様は私のことを考えてくださったのでしょう？何も謝られることなどございませんわ」

「だが……。いや、分かった。そなたは優しいからな。わしが何を言つたところで無駄じゃろう。

それにつけ、犯人は腹立たしい物じゃ。

セレナや、犯人はこのわしが必ず捕らえてやるからの。そなたにこのような大怪我をさせたのじゃ、相応しい罰を下してやるから、安心して待つておれ」

「はい、クザール様。頼りにしておりますわ」

今は捕まえさせるわけには行かないけど。

でも、『その時』が来たら……。

貴方にも、きちんと働いていただきますよ……。

クザール・ゲルジオ枢機卿殿下。

それから、私の『頼りにしている』という発言に発奮したらしいジイは張り切って犯人探しの続きのために出て行って。

それと入れ違うように入ってきたのが、ナターリエ。

いや、参りました。

だって、寝室の扉を開けて、私の顔を見るや否や、その場で泣き出すんだもん。

泣くだけ泣いて、それからはお説教だった。

どれだけ心配したかとか、危ない事はしたらだめだとか、『水辺の誘い』のみんながどんなに心配をしているかだとか。

ジョアンナの時もそうだったんだけど、何の邪心もなく、純粹に私のことを心配してなかれてるかと思うと、流石の私も少しは辛い。

いや、良心とか、父さんと母さんが死んだ日に捨てたけどね？

ナターリエは特に、母さんに似てるからなあ。

何とかなだめて、謝って。

それから、ジョアンナ経由でアルブレヒト達と連絡を取って。

『水辺の誘い』関連を―先ずナターリエとユリアに任せるように手を打ち。

それから、『ブリミル教の實質上の最高権力者のお気に入りのお愛人』が大怪我をしたらしいということが、流石に漏れたみたいで押し寄せてくる見舞いの使いやら見舞い品やらをさばいて。

完治するまでの日々を、それなりに忙しく私は過ごさることになった。

その39

幾百もの宝石が、降り注ぐ光を反射して煌びやかに輝く。

ゆったりと流れる華やかな音楽、それに合わせて踊るは大国の貴顕。そこここで上がる笑い声と、ひそやかに交わされる情報。

ゲルマニアはウィンドボナの大宮殿。久々に皇帝列席の舞踏会が開かれるということで、いつに無く華やいだ空気が漂うその大広間。

『ゲルマニア帝国皇帝カールハインツ閣下、及び皇后コンスタンツエ殿下の御成り』

ざわめきが静まり、その場にいた全員が、入ってきた初老の男女に礼を取った。

その中を静々と進んでゆく二人。

共に豪華な服をまとい、一段高くに作られた玉座に腰を下ろす。

男の方は六十代後半だろうか。

昔はつややかであった髪は、近頃急速に色あせ薄くなっている。だがその眼光には年による弱さなどどこにも無く、鋭く陰の強い眼差しでもって辺りを睥睨する。

近年は猜疑心が強くなり、些細なことで怒り狂うことも多い。長年使え続けてきた側近や軍で人望の有った將軍も肅清の前に倒れた。それでも大国を長年治めて来たという威厳ゆえか、それともその猜疑心から来る物か、一種侵しがたい風格が漂う。

その傍の、玉座より少しだけ小ぶりの椅子に座るのがゲルマニア皇后コンスタンツェ。

若い頃はゲルマニア有数と称えられた美貌は、年月を確かに重ねて

はいる物の、それでもしつかりと見て取れる。

連れ添って四十年近くになるだろう二人の間に、信頼や安らぎは無い。それどころか漂う空気は、ただただ冷たい。

皇后コンスタンツェはゲルマニアで1・2を争う大貴族の娘として生まれ、蝶よ花よと何不自由無く育てられた。

一方でその夫の皇帝カールハインツは、前代皇帝の長男ではあるものの、両親が比較的早くに亡くなったことから権力基盤が安定せず、後盾を得るためにコンスタンツェと結婚したという経緯があった。

皇后にしてみれば、自分の実家が皇帝を皇帝たらしめてやったのだという意識があり、またそれは確かに事実でもあり、彼女と彼女の実家であるベレンツォレル一族の権勢は高まった。政治にも積極的に関わる。

当然のことながら、カールハインツとしてはそれは愉快なことではない。

彼自身が力をつけるにつけ、ベレンツォレル一族以外のものを重用するようになる。

すると今度は皇后が面白くなく・・・。

という悪循環。

今や皇帝夫妻の仲はすっかりと冷え切っていた。

そしてそれは今や誰もが知る公然の秘密でもあり。

玉座に腰かけたまま目も合わせようとしない皇帝夫妻に、来客たちにも固い空気が漂う。

誰もがどう動くべきか判断をつけあぐねていたとき、彼は現れた。

『ゲルマニア帝国皇太子マンフレート殿下の御成り』

大きく開かれた扉から大広間に入ってきたのは若い男。

皇后コンスタンツェの面影を色濃く継いだ整った面立ちに、父譲りの艶やかな栗毛。

見る者の心を浮き立たせるような微笑みを浮かべ、玉座へと近づく。

「父上、母上、ご機嫌麗しく。この晴れやかな席でお二人のご尊顔を拝することができ光栄に存じます」

優雅に一礼した自慢の息子に、固かった皇后の表情も緩み、笑みを浮かべる。

「よく来ましたね、マンフレート」

「せっかくお二人が主催された宴なのですから。父上も、お元気そうで何よりです」

「うむ」

屈託なく微笑む息子に、流石の皇帝も毒気を抜かれたのか僅かに眼光が和らいだ。

権力者たちの間に漂う緊張感が緩んだことで、大広間にいた貴顕たちも自分たちのペースを取り戻し、それぞれに楽しみ始める。

楽団は軽やかな音楽を流し、踊りに加わるもの、意中の女性に近づくもの。そして交わされるさまざまな会話。

「ねえ、伯爵夫人、お聞きになりまして、例の噂」

「バウマン男爵の・・・」

「そうそう、奥様が・・・」

貴婦人たちの扇の陰で囁かれる噂。

高々ゴシップと侮ることはできない。古今、根も葉もない細やかな噂から破滅に至ったものは決して少なくないのだから。

それを知る高貴な女性たちは熱心に情報をやり取りする。

それは決して娯楽のためだけではない。

この華やかな扇子の下でどれだけの情報を手に入れられるか、どれほどに自分たちに都合のいい情報を流すことができるかは、時に権勢を左右することにもつながるのだから。

ふと、貴婦人の一人がホール中央でダンスを披露する男に目をやった。

「あら、あそこにいらっしゃるのはベレンツォレルの・・・」

「そうですわ、ご長男のエドムント様」

「エドムント様と言えば、お聞きになりまして？最近悪所の方にお通いだとか」

くすくすと、どこか話題の相手を軽んじるかのような密やかな笑いが起こる。

「あら、わたくしは素性のしれぬ平民をお取立てになったとお聞きしましてよ」

「そういえば、ベレンツォレル家と言えば、御当主の方も・・・」

一層声を低め、扇の内側で囁くようにつぶやかれた言葉に、その隣に立っていた女性がこれも小さな声で同意する。

「ええ、庶子がいらっしやいますわよね」

「あの時は宮廷中がひっくり返ったような騒ぎでしたものね」

「それはそうですね。ベレンツォレル侯爵夫人と言えば・・・」

「なんと言っても皇帝閣下の妹君」

「嫉妬深いお方ですものね……。皇后殿下のお兄様であればこそ許されたようなものですわ」

「確か母子共々お屋敷を追い出されたとか」

それに同意の聲が上がる。そんな中。

「あら、皆様、御存じありませんでしたの？」

ぼつりとつぶやいた女性の声は、密やかなはずなのに確かにその場にいた女性たちの耳を打った。

「何かご存じですか？」

一斉に注目を浴びたまだ年若いその夫人は、そそがれる視線にたじろぎながらも言葉を口の端に乗せる。

「何でも、追い出したはいいのですけれど、母親の方がすぐに亡くなってしまったそうで……。庶子の方はそれ以来行方が分からなくなっているとか」

まあ、と彼女たちは扇子を口元に引き寄せた。

どこまでも優雅な仕草のその奥で、今得たその情報の真偽、有用性を素早く判断する。

「よくご存じですね」

「ええ……。主人があちら様と付き合いがありますので」

「ああ……。そうでしたわね」

「でしたら奥様、エドムント様のご婚約のお話は本当ですか？」

「なんでも、降嫁された第一皇女様のご息女と御縁談が持ち上がっていらつしゃるとか」

「あら、わたくしが聞いたお話では皇女様のご息女はヨアヒム様のご息子とお話があるとか」

「本当ですか？」

「でも確かに、リンゼン家はベレンツォレル家と比べると……。ねえ」

現皇帝の治世下で、疎まれているとはいえ、ベレンツォレル家が皇帝がつかつに手出しできないほどの権勢を誇っている。

勢力で言えば他家を出し抜き、圧倒的であると言っている。

一方のリンゼン家は、皇帝とベレンツォレルの間隙を突き、カールハインツに取り入ることで権力を手中に収めてきた家だ。

現当主の辣腕もあり、元々はぱつとしない中流貴族であったものを、一挙に勢力を大きくしたが、その権勢も皇帝の寵あつてこそ。

それに、猜疑心の強いカールハインツの手足となつて動き、いくつもの貴族を陥れ、また煮え湯を飲ませて、その功によって出世したというのがリンゼン家に対する貴族社会の見方だ。

皇帝ももう老齡。

いつ倒れても可笑しくない。

故に、リンゼンとすれば、一家でも多くの貴族と好を通じ、味方を得たいだろう。

第一皇女側としても、ベレンツォレルの若君との政略結婚を結んだとして、第一皇子が皇帝に立てば、ベレンツォレル家の風下に立つことになるのは避けられない。

下手をすれば傘下に取り込まれる事態にもなりかねないのだ。

それくらいならば、いつそ第二皇子側について賭に出るのも・・・
そう思う気持ちもなくはないのだろう。

「そういえば・・・、ベレンツォレルの方では、ツエルプストーの先代の若君・・・、オスカー様に縁談を持ちかけていらつしやると聞いたことがございますわ」

そう漏らした中年の婦人に、周りにいた女性達は眉を寄せる。

「本当ですよ？」

「ですがオスカー様と言えば、皇后殿下とは犬猿の、アルブレヒト殿下の御側近でございましょう？」

「それに、こう言つては何ですが、オスカー様は、ベレンツォレルと縁談を結ばれるには・・・、格の方が」

オスカーは確かに先代のツエルプストー侯爵の嫡子であり、自身も優れたメイジにして軍人ではあるが、所詮はそれだけでも言える。侯爵家はすでに叔父の手に収まり、彼自身は一族から冷遇され、絶縁状態にある。

大貴族にとつて、確かにメイジとしての腕は一種のステータスにはなり得るが、肩書きも立場も持たない一軍人を縁談を餌にして迎え入れようと思うほどの利点には到底なり得ないのだ。

ほとんどの貴婦人達はそつとその情報に『でたらめ』のラベルを貼つた。

「そついえば、アルブレヒト殿下はいらっしゃっていませんのね」

「あのお方は宴などはお嫌いでいらっしゃるから」

「騎士や兵士達と荒原を駆けていらっしゃる方が好きなのでございましょう」

アルブレヒト第三皇子は舞踏会などの行事にはほとんど姿を見せない。

それどころか、一年の大半を田舎の領地にて引きこもり、ウィンド

ボナに出てこない。

そこが貴族に敬遠される要因の一つでもあるのだが、本人は批判や誹謗などどこ吹く風とばかりに相手にしようともしないのだから、貴族と彼の関係は完全に悪循環だった。

本人にそれを好転させようという意志すらもないあたり、如何ともしがたいのだが。

ロマリアあたりの宴に比べれば、風格や品格は劣るにせよ、その規模では引けをとらない舞踏会は夜を徹して続けられ、皇宮から明かりが消えることもまた、無かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6816o/>

ゼロの世界で

2011年9月23日18時11分発行